

## ◆ はじめに

平成 21 年度に南九州大学 FD 推進委員会が発足してから、本学での本格的な FD 活動の取り組みは 10 年目を迎えました。この間、各種事業の推進と定着、FD 活動の情報公開、南九州短期大学 FD 推進委員会との情報共有や、平成 29 年度から始まった SD 義務化に伴う南九州学園 SD 推進委員会との連携強化、さらに大学・短大の FD 活動および教職員一体となった SD 活動を統括する SD 推進会議の組織化など、大学教育の質保証の充実化と発展のための基盤づくりが行われてきました。

平成 30 年度は、これまでの事業の蓄積とデータをもとに事業の継続実施を進めながら、実施の過程で見えてきた課題に対処すべく委員会で協議検討し、改善または新たな取り組みとしてスタートさせるなどの対策を行いました。例えば、学生による授業評価アンケートを受けた教員の報告書の書式を変更して実施しました。具体的には、改善点とその改善案に特化された従来の「授業改善報告書」を「所見報告書」と改称し、良い工夫や方法に関する所見も含めた報告書にすることで、他の教職員にとっても参考になるよう報告書の有効活用を目指しました。委員長が取りまとめた所見を委員会で確認し、学科・センターおよび事務局にて共有するというものです。さらに、授業評価アンケートの実施範囲を、単独で授業を担当する非常勤講師にも拡大し、全学的な教育活動のレベルアップを図りました。また、これまで実施してきた「新入生魅力度調査」および「卒業生満足度調査」については、学内に複数の類似した調査が存在することと、調査内容が教員の授業力向上を目的とする FD 活動の趣旨と必ずしも一致しないことから、平成 30 年度の在学生在が卒業してからは、学園全体として一本化した調査を新たに実施する方向性を示すこととなりました。一方で、相互授業参観の参観者数が伸び悩んだことは反省点です。全教職員にとって、業務多端のなか新たな時間を捻出することは容易なことではありませんが、より参観しやすくなるための計画上の工夫が求められます。

本年度は、以上のような新たな試みを開始させるとともに、課題も残りました。まだまだ改善すべき点や、さらなる充実を図る余地は十分に残されていると思われれます。次年度以降の FD 活動の充実と発展に、本報告書が役立てば幸いです。

最後に、平成 30 年度の FD 推進活動にご理解とご協力、また貴重なご意見をいただいた全教職員の皆様、そして FD 活動の改善と発展のために真摯に協議検討し、最後まで本報告書の作成を担ってくださった FD 推進委員の皆様、心から感謝申し上げます。

平成 31 年 3 月

平成 30 年度南九州大学 FD 推進委員会

委員長 早川純子

## 平成 30 年度 南九州大学 FD 推進委員会委員

(部門内五十音順)

環境園芸学科	管理栄養学科	食品開発科学科	子ども教育学科	教養・教職センター
岡島 直方	川北 久美子	寺原 典彦	財部 盛久	スモール・ブライアン

杉田 亘	小松 洋一	矢野原 泰士	鳴海 正也	
			早川 純子	

大学院	事務局（宮崎）	事務局（都城）
岡島 直方	赤木 裕美	阿部 秀
	飯原 薫	猪股 浄文
	小林 明子	水淵 美香

## ◆ FD 推進委員会開催報告

平成 30 年度は、下記のように 5 回の FD 推進委員会を開催しました。会場はすべて以下のとおり。  
宮崎キャンパス：本館 2 階応接室，都城キャンパス：本館 1 階多目的会議室（TV 会議）

### 第 1 回 FD 推進委員会

日 程： 平成 30 年 5 月 15 日（火）  
時 間： 16：30 ～ 16：40  
出席者： [宮崎] 7 名 [都城] 6 名  
欠 席： [宮崎] なし [都城] 1 名

審議事項：

- 1) 平成 30 年度委員長の選出について

報告・連絡事項

- 1) 事業予算について
- 2) 平成 29 年度 FD 推進委員会活動報告について

### 第 2 回 FD 推進委員会

日 程： 平成 30 年 6 月 13 日（水）  
時 間： 16：30 ～ 17：20  
出席者： [宮崎] 6 名 [都城] 8 名  
欠 席： [宮崎] 1 名 [都城] 1 名

審議事項：

- 1) 本年度の FD 推進委員会の進め方について
- 2) 本年度の事業計画について
- 3) 前期授業評価アンケートについて
- 4) 新入生魅力度調査及び卒業予定者満足度調査の実施について
- 5) FD 講演会の実施について
- 6) FD 活動の情報収集について
- 7) 各学科独自の FD 活動の実施について

報告・連絡事項

なし

### 第3回 FD推進委員会

日 程： 平成30年7月12日（木）  
時 間： 16:30 ～ 17:05  
出席者： [宮崎] 5名 [都城] 8名  
欠 席： [宮崎] 2名 [都城] 1名

審議事項：

- 1) 「授業改善報告書」の書式について
- 2) 「授業改善報告書」の活用とフィードバックについて
- 3) 前期授業評価アンケート、新入生魅力度調査の実施状況について
- 4) FD 講演会の実施について
- 5) FD 活動の情報収集について

報告・連絡事項

なし

### 第4回 FD推進委員会

日 程： 平成30年10月17日（水）  
時 間： 16:30 ～ 17:00  
出席者： [宮崎] 7名 [都城] 6名  
欠 席： [宮崎] 0名 [都城] 3名

審議事項：

- 1) FD 講演会実施報告
- 2) 後期授業評価アンケート、および卒業生満足度調査の実施について
- 3) 後期授業参観について

報告・連絡事項

- 1) 新入生魅力度調査アンケート、および前期授業評価アンケート集計結果
- 2) 学科 FD 活動実施と報告について
- 3) 新入生魅力度・卒業生満足度調査結果分析報告
- 4) FD 活動の情報収集について

### 第5回 FD推進委員会

日 程： 平成31年3月7日（木）  
時 間： 16:30 ～ 18:15  
出席者： [宮崎] 6名 [都城] 8名 オブザーバー：黒田 IR 担当  
欠 席： [宮崎] 1名 [都城] 1名

審議事項：

- 1) 後期授業評価アンケートの集計結果について
- 2) 授業参観の実績
- 3) 新入生魅力度調査および卒業生満足と調査項目に関する検討

報告・連絡事項

- 1) 卒業生満足度調査の集計結果について
- 2) 前期授業評価アンケート「所見報告書」の取りまとめ
- 3) 平成 30 年度 FD 活動報告書作成の流れ
- 4) 平成 31 年度事業計画および予算計画
- 5) 学外 FD フォーラム参加報告

## ◆ FD 推進活動一覧

平成 30 年度に実施した南九州大学の FD 推進活動の概要を下記に記述します。

### 事業【1】 授業評価アンケートの実施（前期・後期）

教育目的の達成状況を点検・評価するとともに、教員の授業の教授法改善や学生の授業に対する満足度の把握等を目的として、例年と同様に継続して実施した。アンケートにおいては学生自身の受講姿勢、及び授業に対する 5 段階評価の確認とともに自由意見欄を設け、授業の良い点、改善を求める点等を求めている。授業評価アンケートは集計後、結果は各教員に開示し、各教員は結果に基づく所見報告書（昨年度までは授業改善報告書）を作成し提出した。報告書のなかで良い工夫や方法に関する所見については委員長が取りまとめ、委員会で確認した上、学科・センターおよび事務局で共有して報告書の有効活用を目指した。また学科別にアンケート集計を行い、学科別にも分析を行った。アンケートで得られた各教員個人および学科の問題点・改善点は今後の教育活動に活用する。

### 事業【2】 授業参観の実施（後期）

授業評価アンケートと同様に教員の教授法改善等を目的として毎年行っている。より多くの教職員に参観を求めるため、昨年度同様実施対象期間を延長する等の工夫をしたものの、参観対象の授業コマ数が限定されたものになったり、参観者の授業や業務と重なるなどした結果、限られた教員のみでの参加になり、総参加数は前年度を下回った。平成 27 年度の参加実績：20 名、平成 28 年度の参加実績：44 名、平成 29 年度の参加実績：40 名、今年度は 27 名であった。

この事業の目的を達成するためには、より多くの教職員に参観いただくことが重要であるため、今後の対策としては、授業参観期間をさらに拡大したり、授業担当教員が実施する期間中のすべての授業を参観可能とするなどの検討も必要かもしれない。これらを含め、次年度への課題として引き継ぎ、さらなる改善を進める。

### 事業【3】 FD 講演会の実施

本事業は、大学教員の教育力向上を主目的として平成 22 年度から行っている。平成 30 年度は、9 月 19 日(水)、関西国際大学学長の濱名篤先生を講師に迎え、「3 つのポリシーに対応した学習成果の測定と可視化について」というテーマで、全教職員を対象とした講演会を実施した。濱名先生は、大学経営のかたわら諮問機関で政府への直接的な提言を行うなど、教育改革をリードする評価（アセスメント）に関する第一人者として知られる。

主な講演内容は、3 つのポリシー（DP・CP・AP）に関わる制度改正の背景や改革の実質化

に向けた取り組み手法、また大学全体としての共通の評価方針（アセスメント・ポリシー）の確立と、学生の学修成果の評価と可視化、さらに所属大学での具体的な取り組みの紹介を通じた PDCA サイクルに沿った教育活動の流れについてであった。さらに、評価視点の明確化や人材育成の資質形成と質保証に関わる詳細な解説からも、具体的な助言と多くの示唆が得られた。

#### **事業【4】 各学科独自の FD 活動の実施**

各学科においても全学的な事業同様に、学科独自の特色ある FD 活動を本年度も活発に行った。

#### **事業【5】 新入生魅力度評価アンケートおよび卒業予定者満足度評価アンケートの実施**

本調査は、平成 24 年度から導入され、魅力ある大学づくりのための情報を収集するために実施している。本年度も IR の分析したデータをもとに、平成 27 年度入学生の「新入生魅力度調査」および「卒業生満足度調査」の前後比較を行い、入学時の魅力度と卒業時の満足度のギャップの集約と整理を行った。全学および各学科において、特に満足度評価が有意に下がっている項目について、今後の対策を検討した。今後の取り組みに対する貴重な資料を得ることができた。

本事業で得られた成果は、各学科における教育活動および研究活動のみならず、広報活動や学園の運営の方向性を考えるための参考とする。

なお、これまで実施してきた「新入生魅力度調査」および「卒業生満足度調査」については、学内に複数の類似した調査が存在することと、調査内容が教員の授業力向上を目的とする FD 活動の趣旨と必ずしも一致しないことから、平成 30 年度の在学生在が卒業してからは、学園全体として一本化した調査を新たに実施する方向性を示すこととなった。

#### **事業【6】 他大学等の FD 推進活動の情報収集と FD フォーラム等への参加**

他大学から寄せられる FD 活動に係る情報の共有化を図るため、年間 5 回実施した FD 推進委員会において、FD 活動に関連する情報や他大学主催の FD 研修会やフォーラム等を紹介し、必要に応じて各委員を通じ、各学科・センター・大学院に周知したり、研修会等への参加を募った。今年度は、子ども教育学科鳴海正也講師が平成 31 年 3 月 2・3 日に大学コンソーシアム京都主催で行われた「大学におけるダイバーシティ」の研修会に参加し、第 5 回委員会にて参加報告がなされた。

これらの事業については、情報の早い段階での共有が十分でない場合もあったことから、今後は以下も参考に早期の情報提供と共有ができるよう、さらなる工夫も必要である。

- ・各学科・センターにおいて、分野が近い他大学の FD 推進活動をそれぞれが調査し、優れた FD 推進活動の情報を FD 推進委員会を通じて提供する。

- ・情報の共有方法は、情報の入手後すぐに FD 推進委員全員と FD・SD 担当理事、短大 FD 推進委員長、学園 SD 推進委員長に対して、PDF 化した入手資料を E-mail を利用して配信を行う。その後の FD 推進委員会でも入手情報の確認を行う。
- ・SD 推進会議との定期的な情報交換による情報収集

### **事業【7】 FD 活動の情報公開の検討**

他大学では、FD 推進活動をホームページ上や印刷物で紹介しており、「FD 推進活動の公開」が進んでいる。本学においても「FD 推進活動の公開」について引き続き大学ホームページ上で情報公開を行う。

### **事業【8】 FD 活動報告書（本報告書）の作成**

平成 30 年度に行った FD 活動を記録するために報告書を作成した。報告書は事業の詳細のみならず、課題や反省点も記録することで、次年度以降の FD 推進活動等に役立てていく。

### **事業【9】 本学の SD 推進会議との連携**

昨年度より SD 推進会議が発足し、FD 推進委員会もその組織下で活動することとなっている。SD 推進に貢献する取組みとして、今年度 9 月に実施した FD 講演会は教職員合同の研修会とし、SD 推進会議と共催で実施した。今年度はさらに、南九州短期大学 FD 推進委員会とも連携して実施した。今後も情報共有に努めながら、SD 推進会議の動向に合わせ、FD 独自の事業を発展させつつ、協調して取組んでいくことが重要である。

### **事業【10】 『平成 30 年度 南九州大学 FD 活動報告書』の作成**

平成 30 年度 1 年間の南九州大学 FD 推進委員会の活動実績を報告書としてまとめた。令和元年 5 月 8 日に完成した。



## ◆ 授業評価アンケート報告

平成 30 年度においても、教員の教授法改善や授業に対する満足度の把握等を目的とした「授業評価アンケート（前期・後期）を実施した。各学科のアンケートの実施結果は以下のとおりである。

### 授業評価アンケート実施要領

#### 【目的】

教員の授業の教授法改善や学生の授業に対する満足度の把握等を目的として実施する。

#### 【対象】

専任教員については、原則として 1 教員 1 授業とする。2 授業以上でも可とするが、2 授業目以降のアンケート集計は教員が行う。なお、非常勤講師のアンケート実施については、今年度は単独で授業を実施している全教員を対象とした。

#### 【実施時期】

前期は 7 月 9 日（月）～7 月 13 日（金）間に、また後期は 12 月 10 日（月）～12 月 14 日（金）の間に実施することを原則とする。

但し、この期間に実施できない場合は多少前後しても構わない。

#### 【使用するアンケート用紙及び所見報告書】

別に示す。前述の通り、従来の「授業改善報告書」は「所見報告書」に改めた。

#### 【実施要領】

- (1) 学生支援課より、各教員に「実施する授業名」及び「アンケート実施時間（授業前か後か）」を案内する。各教員は学生支援課が指定する期日までに授業名及び実施時間を回答する。
- (2) 学生支援課員は、事前に受講学生分のアンケート用紙を準備する。
- (3) アンケート実施当日、学生支援課員はアンケート用紙を授業時間（授業開始後又は終了前）に配付し、教員はアンケートの目的等について学生に説明を行う。説明した後、教員は教室から退出する。
- (4) 学生支援課員は対象科目の授業時間（授業開始後又は終了前）に待機し、アンケート終了後に回答用紙を回収する。なお、都城キャンパスは学生支援課員少ないため、他部署職員も担当する。
- (5) アンケートは 7 月～8 月中に集計が行われる。学生支援課を通じて各教員へ報告が行われる。各教員は集計結果・自由記述欄の結果をもとに所見報告書を作成し、FD 推進委員長へ報告書を提出する。また、今年度は良い工夫や方法に関する所見について委員長が取りまとめ、委員会で確認の上、学科・センターおよび事務局にて共有することを通して報告書の有効活用を目指した。

#### 【その他】

- ・自由記述欄をフォーマットのままで実施する場合は、アンケート用紙は学生支援課で準備し、回収担当者が実施時期に持参する。
- ・自由記述欄は学科や教員単位で設定可能とする。独自にオリジナルなものを作成する場合は、その旨を学生支援課に連絡しておく。アンケート用紙は各自で印刷してもらう。  
(各学科あるいは各教員で特徴あるアンケートが実施できるよう積極的に自由記述欄を活用していただきたい)
- ・教員が担当する科目をすべて行う場合は実施しても問題ないが、その科目の集計作業は実施する教員が行う。

#### 【アンケートの集計】

アンケートの集計は外部に委託する。

平成 30 年度授業評価アンケートの結果と評価については、以下をご参照ください。

添付資料 平成 30 年度授業評価アンケート（前期・後期）

## ◆ 後期授業参観報告

平成 30 年度においても、教員の授業の教授法改善等を目的として、後期に参観授業を実施した。

実施要領を以下に示す。

### 後期授業参観実施要領

#### 【目的】

教員の授業の教授法改善等を目的として実施する。

#### 【対象授業】

別に「参観授業対象一覧」を示す。

#### 【実施手順】

- ・実施期間内にて対象授業の参観を実施する。
- ・参観者は教室内で対象授業の参観を行い、参観レポート（添付資料）を記入する。
- ・参観は業務等の関係もあるので教員への参加強制はしないが、できるだけ多くの教員に参加してもらう。
- ・参観レポートは、各キャンパスの「学生支援課」窓口へ提出する。取りまとめ後に参観授業の担当教員へ渡す。

後期授業参観については、以下をご参照ください。

資料添付：後期授業参観一覧および授業参観結果

## ◆ FD 講演会報告

FD 推進委員会では、平成 22 年度から教員の授業力向上、および FD 活動に対する理解及び FD 活動の推進のため、FD 講演会を実施している。平成 30 年度においては下記の要領で研修会を開催した。

### 平成 30 年度 南九州大学 FD 研修会

日時： 平成 30 年 9 月 19 日（水） 9:30～11:30（2 時間）  
会場： 宮崎キャンパス+都城キャンパス(テレビ会議方式)  
講師： 濱名篤氏（関西国際大学 学長）  
演題： 3つのポリシーに対応した学習成果の測定と可視化について  
対象： 大学・短大全教職員  
主催： 南九州大学 FD 推進委員会  
共催： 南九州短期大学 FD 推進委員会・南九州学園職員資質向上委員会

### ■講師

濱名 篤（関西国際大学 学長）

【兼職】 日本私立大学協会附置私学高等教育研究所研究員（至現在）、大学コンソーシアムひょうご神戸理事（至現在）、独立行政法人大学入試センター運営審議会委員 副議長（至現在）、文部科学省中央教育審議会臨時委員（大学分科会）（至現在）、文部科学省学校法人運営調査委員（至現在）、日本私立学校振興・共済事業団私学情報推進会議委員（至現在）

【専門】 高等教育論、教育社会学

【学会】 大学教育学会(常務理事)、初年次教育学会(理事)、日本高等教育学会(理事)、日本教育社会学会

【主な著書・論文】

『学修成果への挑戦-地方大学からの教育改革』 東信堂2018年9月

『進化する初年次教育』 世界思想社 2018年9月

『初年次教育-歴史・理論・実践と世界の動向』 丸善 2006年11月

『知識伝達の構造』 世界思想社 2008年3月

『初年次教育の現状と未来』 世界思想社 2013年1月

『大学改革のための30のキーワード』 学事出版 2013年3月

「大学評価の研究と実践の10年」 『高等教育研究第』 11集 2007年5月

「現代の学生と初年次教育」 『IDE現代の高等教育』 2008年2月

「初年次教育の必要性和可能性」 『大学と学生』 第54号 2008年5月

「日本の初年次教育の課題」 『初年次教育学会誌』 第1巻第1号 2008年11月

「中教審答申の中での『教養』」『世界思想』第36号 2009年3月

「学士力を培うための学士課程教育」『大学評価研究』8号 2009年7月

## 概要

学校教育法施行規則の改正により全ての大学に義務づけられた3つのポリシー（DP・CP・AP）について、制度改正の背景や改革の実質化に向けた取り組み手法を教授いただいた。3つのポリシーの明確化に加え、大学全体としての共通の評価方針（アセスメント・ポリシー）を確立し、学生の学修成果の評価と可視化を行うことの重要性が語られ、PDCAサイクルに沿った教育活動の流れについて、所属大学での取り組みの紹介を通してご説明いただいた。さらに、評価視点の明確化や人材育成の資質形成と質保証に関わる詳細な解説により、具体的な助言と多くの示唆が得られた。

研修会参加者(短大含む)は80名、アンケート提出者(大学教職員のみ)は65名であった。参加後のアンケートでは約9割の参加者が満足した、約7割強の参加者が理解できたという結果であった。開催時期はおおむねこの時期で良いという意見が多かった。詳細は添付資料にてご確認ください。

表 部門別参加者数

環境園芸学科	10人
管理栄養学科	9人
食品開発科学科	6人
子ども教育学科	10人
教養教職センター	3人
宮崎キャンパス事務局	23人
都城キャンパス事務部	12人
短期大学	7人
計	80人

添付資料 「南九州大学 FD 講演会 実施報告」

## 新入生魅力度調査・卒業予定者満足度調査

本調査は、平成 24 年度から導入され、魅力ある大学づくりのための情報を収集するために実施している。本年度も IR の分析したデータをもとに、平成 27 年度入学生の「新入生魅力度調査」および「卒業生満足度調査」の前後比較を行い、入学時の魅力度と卒業時の満足度のギャップの集約と整理を行った。全学および各学科において、特に満足度評価が有意に下がっている項目について、今後の対策を検討した。今後の取組みに対する貴重な資料を得ることができた。

本事業で得られた成果は、各学科における教育活動および研究活動のみならず、広報活動や学園の運営の方向性を考えるための参考とする。

なお、これまで実施してきた「新入生魅力度調査」および「卒業生満足度調査」については、学内に複数の類似した調査が存在することと、調査内容が教員の授業力向上を目的とする FD 活動の趣旨と必ずしも一致しないことから、平成 30 年度の在学生在が卒業してからは、学園全体として一本化した調査を新たに実施する方向性を示すこととなった。

### 平成 30 年度新入生魅力度調査・卒業予定者満足度調査の実施要領

#### 【目的】

本調査は、魅力ある大学づくりのための情報を収集するために実施している。新入生対象の調査では、本学のどのような点に魅力を感じてくるのか、また、卒業生対象の調査では、本学のどのような点に満足を感じ（あるいは不満を感じ）卒業して行くかをアンケートにより調査する。本アンケートの結果は、各学科における教育活動及び研究活動のみならず広報活動にも利用でき、また学園の運営の方向性を示すための参考にもなる。

#### 【集計作業】

- ・集計は外部に委託する。
- ・授業評価アンケート同様学科別の集計結果を出す。学科会議等で結果を分析し、結果から見えてくる課題を抽出し、課題の改善策を検討する。
- ・4 年後には魅力度と満足度のギャップを集計し、上記同様に学科単位で問題点抽出と課題解決策を検討する。

平成 30 年度新入生魅力度調査・卒業予定者満足度調査結果については、以下をご参照ください。

[添付資料 平成 30 年度新入生魅力度調査・卒業予定者満足度調査](#)

## ◆ 学外 FD 研修参加報告

研修名：2018年度 第24回 FD フォーラム「大学におけるダイバーシティ」

開催日：平成31年3月2日・3日

会場：立命館大学

報告者：鳴海正也（子ども教育学科）

3月2・3日に大学コンソーシアム京都主催で行われた2018年度 第24回 FD フォーラム「大学におけるダイバーシティ」の研修会に参加してきた。総参加者700名以上で行われ、このテーマが現在の大学にとって重要であり、大学に集う人々の多様性に対応することが喫緊の課題であること明らかとなる研究会であった。シンポジウムでは、4名のシンポジストが人権を軸として、外国籍、宗教、LGBT、障害者、累犯者の更生等の立場から話題提供が行われた。大学に多くの学生が集うということは多様性を受け入れるということであり、そのことが今の日本には求められていることがよく分かった。あるシンポジストの日本の組織は「責任者」と「予算がない」と機能しないがこのような形式が正しいのかという提案が心に残った。

2日目は、特別支援学校の教員養成がある大学の分科会に参加した。どの大学でも免許を取る履修希望者は増えているが、実際に支援学校に就職する率が低く、他の目的で履修する学生が増えているということが報告された。履修者が増えた関係で教育実習を依頼することが難しい現状も報告された。

今後ますます、大学に集う学生が多様化することを踏まえた対応が今後の大学運営に求められることがよく理解できた。

## ◆ 学科・センター独自の FD 活動

各学科における「独自の FD 活動」について報告する。各学科で質の高い FD 推進活動を独自に行っている。

### 【 環境園芸学科 】

#### 1. 保護者懇談会の開催

保護者（全学年）から学科および都城事務部に対する意見を頂く場として、年 1 回保護者懇談会を開催している。今年度は 12 月 1 日（土）に開催した。学部長のあいさつに引き続き、学科の教育研究活動紹介、各研究室の活動紹介等を行った。その後、本学の就職課より最近の就職の動向やこれからのスケジュール等の説明を行った。その一環として、4 年生の就職内定者 2 名より自らの就職活動についての体験談を紹介した。保護者からは実際の就職活動の事例を聞くことができ、有意義であったと好評であった。

また、全体での懇談会后、個人面談を希望する保護者に対しては、1・2 年生は学年担当、3・4 年生は研究室指導教員等が個別に面談し質問・意見に対応した。

#### 2. 学生指導について

環境園芸学科の在学生の出身地は全国にわたり、一人暮らしをしている学生も少なくないため、日頃よりきめ細やかな対応を心掛けている。本学科では、学生の学習や進路、日常生活等の相談に応じるために、各学年担当の教員を配置している。学年持ち上がり方式をとっており、入学から、通常 3 年生後期に研究室に所属となり指導教員の元に学習活動を開始するまでの 2 年半の間、同じ教員が学生の諸問題に対応している。

##### 1) 1 年生への指導

担当教員 5 人と、学生支援課、学生相談室、保健室等の教職員を交えて、1 年生全体の状況を把握するために月 1 回の定例ミーティングを行っている。必修授業の連続欠席、体調不良、GPA 低ポイント、悩みを抱える学生を早期に把握するとともに、指導方法とその対応策を協議し実行した。また適時、定例学科会議で報告して学生情報を共有し、学科教員への協力を依頼した。また、保護者に、班ごとの担当教員を文書で連絡した。

一部の推薦入試・AO入試で合格した入学予定者に対して、入学前事前学習課題を提供し、提出された回答に採点・チェックした後に、学習への意識づけを行うようコメントをつけて返却した。オリエンテーション時に、各班約 5~7 人程度ずつで集合写真を撮影し、顔と名前が一致するような資料を作成した。欠席がちな学生については、身体的、精神的、家庭的にどのような特徴があるかを把握し、授業への参加を促す連絡を行ったり、保護者に連絡をしたり、機会があればできるだけ本人に話しかけるようにした。当該年次の学生は、予定通り、休学等の一部学生を除いて今年度後期に所属する分野が決まった。

## 2) 2年生への指導

担任教員4人と、学生支援課、学生相談室、保健室を交えて計5回(4/18、7/25、9/20、11/28、3月中旬予定)の担当者会議を開催した。これら会議の開催日程は、学生の成績が出揃う時期や休み明けなどの重要な時期を選定し、学生の状況が把握できるタイミングと指導の効果が高い日程を考慮した。審議内容は、従来通りの学業不振や悩みを抱える学生を早期に見つけるとともに、指導方法を協議して適宜対応策を講じることに加えて、当該年度の学生については、導入されているGPA制度にもとづく成績不振者への学修指導を行った。学生便覧による規定に従ったGPAが1.0未満の学生への学修指導に加えて、修得単位数の少ない学生(学生支援課基準50単位以下)、GPAが1.5未満の学生にも指導を行うこととした。ただし、退学予定者、休学中、授業料未納による保留者には指導を行わないこととした。また、7月3日には「専攻選定説明会」を開催し、専攻への配属を行った。必要に応じて学生の状況を学科会議で報告することにより情報の共有を図った。

## 3) 3年生への指導

前期については、3年生担当教員5名が、新学期開始時にオリエンテーション(3年生)を行うとともに、GPA成績不振者への学修指導を行った。また、4月中に全3年生に対して、学生の所属する専攻の教員が専攻別個別面談を行っている。

環境園芸学科では、3年生後期からは原則として全ての学生が研究室に配属されることとなっている。

配属の手続きは6月開催の研究室配属説明会から開始した。配属学生数の上限を年度ごとに設定し、少人数による教育体制の堅持と研究室の担当教員の負担の偏りを無くすための配慮を行っている。配属先の選定においては、学生の希望を調査し、希望研究室が極力反映されるように配慮している。配属先の研究室では各教員が専攻演習Ⅰや研究室の活動を通し、専門分野の教育・研究指導のほか、履修・進路指導も行っている。

休学等の事情により研究室へ未配属の学生に対しては、3年生担当教員が中心になり指導を行うとともに、次年度の研究室配属に向け2年生担当教員と情報の共有を図っている。休学中の学生については学生本人あるいは保護者と必要に応じて連絡を取り合っている。

## 4) 4年生への指導

上述したような学科の方針に基づき、学生は3年生後期から研究室配属され、4年生の指導は引き続き配属先研究室の教員が中心となり行っている。4年生の必修科目である専攻演習Ⅱ、Ⅲや卒業論文を通し、教育・研究、さらには進路についても少人数あるいは個別指導を行っている。また、必要に応じ、保護者との連絡、学科での情報の共有を図っている。

## 3. 卒業論文概要集の作成

卒業論文で取り組んだ研究内容の要旨を取りまとめた卒業論文概要集(198ページ)を作成し

た。今年で7回目となった。本概要集については、4年生にとって卒業論文の内容の整理・まとめ、さらなる理解に繋がったものと考えられる。作成した本概要集の配布は、卒業生・研究室ならびに企画広報課にも配布した。

また、研究室配属3年生にとっては4年生の卒業論文や概要とその作成の取り組み姿勢に接することができたことは、今後の自分の取り組みや研究内容の理解に大いに役立つと期待される。

#### 4. オープンキャンパスの開催

環境園芸学科では毎年度、夏と春にオープンキャンパスを開催している。学科の全教員が参加することを基本とし、パネルやポスターの展示、実験や実習のデモンストレーション等を活用して、学科の紹介、特に研究室の紹介を行なっている。

今年度の夏と春のオープンキャンパスでは、5階から8階の各研究室を開放し、各教員が研究室所属学生の協力も得ながら研究内容の紹介を行った。また、夏のオープンキャンパスにおいては5名の教員による模擬授業も行われた。

模擬授業や研究室開放では参加学生および保護者からの専門的な質問もあり、好評であると感じた。

#### 5. 「国際交流」の実施

昨年度に引き続き、上海交通大学、上海農林職業技術学院、江蘇農林職業技術学院と交流を行った。

2018年2018年7月10日に江蘇農林職業技術学院の巫教授が来校し施設案内とカリキュラムの説明を行った。

2019年3月6～10日に上海交通大学、上海農林職業技術学院を訪問した（教員3名、技能職員1名、学生9名）。上海交通大学では李教授と当校関西教授が講演し現地の日本庭園の管理を行った。また、上海交通大学設計学院との協定締結を視野に今後の交流内容について意見交換した。上海農林職業技術学院では牧田講師の講演と参加学生によるプレゼンテーション（大学生活、学んだこと、宮崎の名所など）を行った。

#### 6. 学生の資格取得支援

##### 1) 園芸系

###### (1) 毒物劇物取扱責任者

当該資格の説明会及び受験講習会3回（法規・化学・実地）をフィールドセンターで開催した。就職課と連携して受験に関わる情報を提供するとともに、受験会場への送迎を行っている。

###### (2) 土壌医検定

土壌医の資格について、教育・研究・就職支援の一環として、その内容や受験について学生に情報提供を行った。

###### (3) 日本農業技術検定

本検定の3級、2級および1級試験において、受験希望者に対して試験情報の提供、ならびに

講習会等を実施している。特に、2級および1級試験の受験者に対しては、それぞれの受験科目に適した過去問題等の資料を提供している。

## 2) 造園系

以下の特別教育、講習および講義を行なった。

- (1) 小型車両系建設機械特別教育を実施
- (2) チェーンソー（伐木）特別教育の実施
- (3) 刈払機安全教育の実施
- (4) 玉掛け技能講習の実施
- (5) 高所作業車技能講習会
- (6) 小型移動式クレーン講習会
- (7) フルハーネス型安全帯使用作業特別教育
- (8) 造園技能士実技対策講習会の開催
- (9) 造園技能士学科試験対策講習会の開催
- (10) 造園技能士要素試験対策講座の開催
- (11) 建築 CAD 検定の開催

また、造園系では学外における各種造園活動も授業と連携させて積極的に行った。その内容は下記の通りである。

- (12) 「造園研修会」による庭園見学の実施
- (13) 学外商業・公共施設におけるガーデニングディスプレイ
- (14) 歴史的庭園の再生整備計画への協力
- (15) 市民参加型パークマネジメントへの協力

## 3) 自然環境系

- (1) 自然再生士補

自然再生士補の資格について、教育・研究・就職支援の一環としてその内容や受験について学生に情報提供を行った。

- (2) 生物分類技能検定

生物分類技能検定の資格について、教育・研究・就職支援の一環として、その内容や受験について学生に情報提供を行った。前年度まで行ってきた直前の試験対策講座は開催しなかった。3級に4人が合格した。

## 7. オフィスアワー

学生の学業や学生生活について、質問や相談に応じるための時間としてオフィスアワーを各教員が最低週一回カリキュラムとは別に設けている。原則として、オフィスアワー時間帯には教員が研究室に在室することとし、学生の指導にあたっている。

## 8. 平成 30 年度前期・後期 授業評価アンケート 集計結果分析

以下の設問によりアンケート調査を実施した.

### ●学生の授業取り組みに関する質問

設問① 私はこの授業によく出席した

設問② 私は授業内容について質問や発言をした

設問③ 私はこの科目に積極的に取り組んだ(予習や復習をした)

### ●教員の授業実施方法に関する質問

設問④ 教員の声は聞き取りやすかった

設問⑤ 教員の板書(または PPT・配付資料等)は読みやすかった(見やすかった)

設問⑥ 教員は授業の開始・終了の時刻を守ろうとしていた

設問⑦ 教員は学生の反応を確かめながら授業を進めていた

設問⑧ 教員は熱意を持って授業をしていた

### ●総合評価

設問⑨ 私はこの授業内容を理解できた

設問⑩ 私はこの授業で学んだ内容はなんらかのかたちで将来役に立つと感じた

設問⑪ 私は総合的に判断してこの授業で満足が得られた

#### 学生の授業取り組みに関する質問

設問1) 私はこの授業によく出席した



設問2) 私は授業内容について質問や発言をした

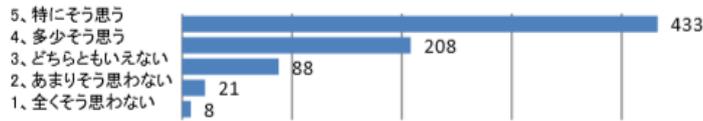


設問3) 私はこの科目に積極的に取り組んだ(予習や復習をした)



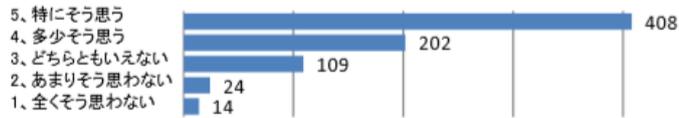
教員の授業実施方法に関する質問

設問4) 教員の声は聞き取りやすかった



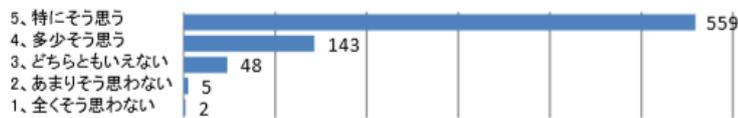
回答数 758 人  
未回答 3  
平均値 4.37

設問5) 教員の板書(またはPPT・配付資料等)は読みやすかった(見やすかった)



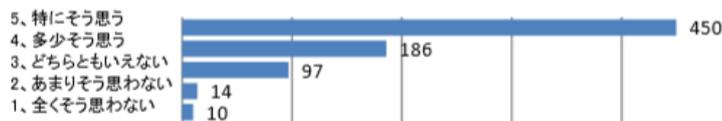
回答数 757 人  
未回答 4  
平均値 4.28

設問6) 教員は授業の開始・終了の時刻を守ろうとしていた



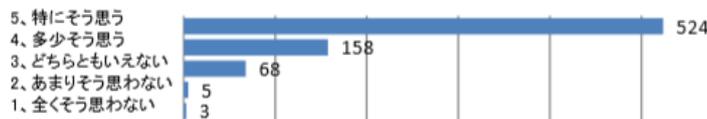
回答数 757 人  
未回答 4  
平均値 4.65

設問7) 教員は学生の反応を確かめながら授業を進めていた



回答数 757 人  
未回答 4  
平均値 4.39

設問8) 教員は熱意を持って授業をしていた



回答数 758 人  
未回答 3  
平均値 4.58

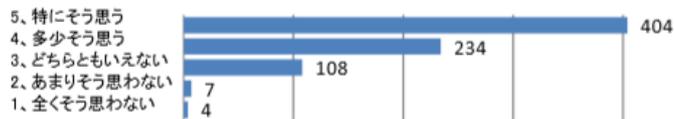
総合的評価

設問9) 私はこの授業内容を理解できた



回答数 757 人  
未回答 4  
平均値 4.14

設問10) 私はこの授業で学んだ内容はなんらかのかたちで将来役に立つと感じた



回答数 757 人  
未回答 4  
平均値 4.36

設問11) 私は総合的に判断してこの授業で満足が得られた

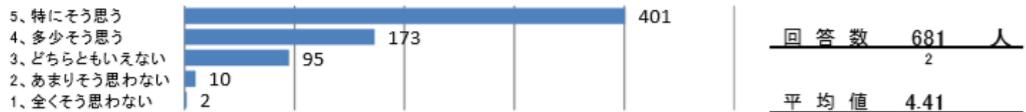


回答数 757 人  
未回答 4  
平均値 4.32

図1. 平成30年度前期の回答の集計

学生の授業取り組みに関する質問

設問1) 私はこの授業によく出席した



設問2) 私は授業内容について質問や発言をした

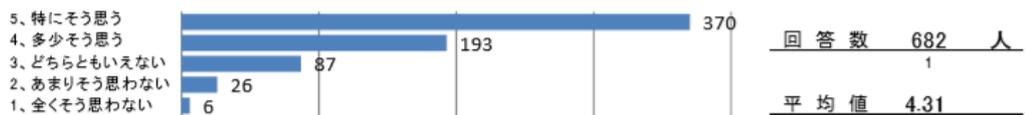


設問3) 私はこの科目に積極的に取り組んだ(予習や復習をした)

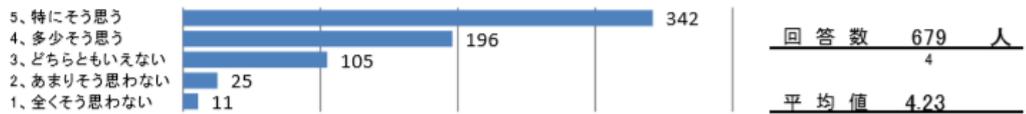


教員の授業実施方法に関する質問

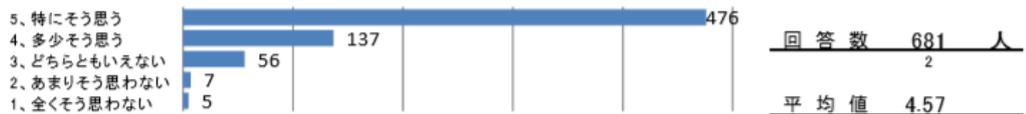
設問4) 教員の声は聞き取りやすかった



設問5) 教員の板書(またはPPT・配付資料等)は読みやすかった(見やすかった)



設問6) 教員は授業の開始・終了の時刻を守ろうとしていた



設問7) 教員は学生の反応を確かめながら授業を進めていた

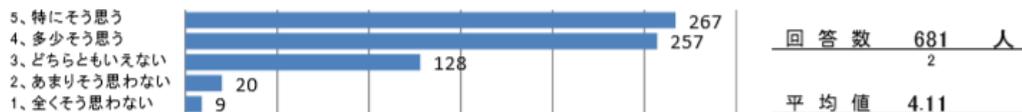


設問8) 教員は熱意を持って授業をしていた

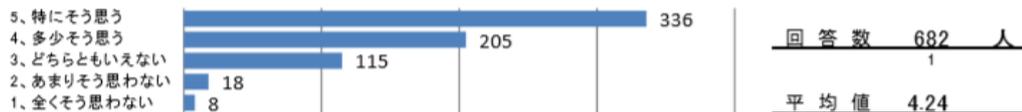


総合的評価

設問9) 私はこの授業内容を理解できた



設問10) 私はこの授業で学んだ内容はなんらかのかたちで将来役に立つと感じた



設問11) 私は総合的に判断してこの授業で満足が得られた

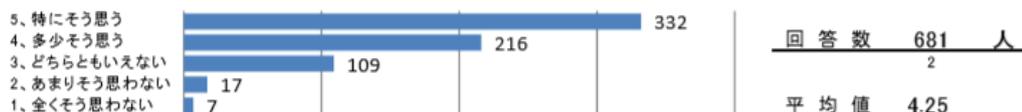


図2. 平成30年度後期の回答の集計

1) 全体について昨年度と本年度の前期と後期をそれぞれ比較すると、前期については、設問1のみで0.06ポイントの減がみられ、それ以外の10項目においてはポイントが増加した。また、後期については、設問1、2、3、7および10でそれぞれ0.04、0.1、0.03、0.02および0.01ポイントの減がみられ、それ以外の6項目においてはポイントが増加した。昨年度も一昨年度に比べ各項目のポイントが上昇傾向にあることから、長年の授業改善は緩やかながらも一定の効果を産み出していると考えられる。しかしながら、設問2「私は授業内容について質問や発言をした」および設問3「私はこの科目に積極的に取り組んだ(予習や復習をした)」については依然として平均4ポイントを下回っていることから、改善に向けて取り組んで行かなければならない。そのほかの9項目については全て平均4ポイントを上回っていることから現状を維持できるよう取り組んで行く。また、本年度アンケート結果に基づき各自で記載した授業改善報告書を踏まえ、授業改善に取り組むたい。

2) 各設問について

[学生の授業取り組みに関する質問]

設問1: 前期後期ともに、平均値は約4.4ポイントである。非常に高いポイントであることから、今後はいかにして1~3と回答した学生を4、5に引き上げていくか検討しなければならない。

設問2: 本設問に関しては、他の設問と比べ、例年ポイントが低い。少人数でのゼミとは異なり受講生が多い講義では、「質問や発言がしづらい」、「時間がない」などもその要因として考えられる。講義終了後に質問される場合も多くみられることから、講義終了後の質問についても設問に記載しても良いと考える。

設問3: 前期は3.76、後期は3.67であり、前期については平成22年度以降では最も高いポイントである。しかしながら、本設問については設問②に次いで低評価であり、回答「3」の「どちらともいえない」を含めると半数前後の学生が積極的に取り組んでいないと回答している。各科目

の位置づけを第 1 回目の授業や分野ならびに専攻説明会などを通じて明確にし、特色に合わせて自発的な参加意欲を高めるような具体的方策が望まれる。

〔教員の授業実施方法に関する質問〕

設問 4：前期後期ともに概ね高い評価であった。教員の声が聞き取り難いとの低評価の回答「1、2」は、前期後期とも 5%程度の結果であった。これは長年の取組みにより、マイクの使用や教室の変更などの各教員の対応により改善が図られたものと考えられる。今後も各授業において、学生に声が聞こえているかを確認することにより、より改善がなされるものとする。

設問 5：前期後期ともに比較的高評価であった。しかし、これまでに引き続き、前後期ともに、5～8%が回答「1、2」と教員の板書等は見づらいつとある。今後も、さらなるプレゼンテーション方法や質の工夫など、各教員の対応で改善が必要と考える。

設問 6：前期後期ともに例年通り高い評価であった。教員が授業の開始・終了の時刻を守ろうとしていなかったとする低評価の回答「1、2」は、1%程度の結果となった。授業時間については、比較的厳守されていると判断できるが、今後もさらなる継続が望まれる。

設問 7：前期後期ともに比較的高評価であった。不満を抱いている学生は少なく、概ね良好であると考えられる。今後も現在の状況を維持しつつも、授業中、学生に意見を聞いたり、問いかけをしたりするなど学生の理解度や意見を吸い上げるさらなる取り組みや工夫が望まれる。

設問 8：前期後期ともに高評価であり、各教員が熱意を持って授業に取り組んでいると判断される。今後もさらなる継続が望まれる。

〔総合評価〕

設問 9：前期は 4.14（昨年度前期 4.08）、後期 4.11（前年度後期 4.10）であり、前期後期とも昨年度に引き続き平成 22 年度以降では最も高いポイントであった。授業を非常によく理解できたとする回答「5」は全体の 40%前後であり、昨年度および一昨年度と比べると回答「5」の割合が増加してきている。しかしながら、依然として低評価の回答「1、2」も見受けられる。このことは、設問②および③の結果と合わせて考えると、学生の取り組み姿勢といった根本的な課題とも考えられる。今後の継続的な分析と継続的な取り組みが望まれる。

設問 10：前期は 4.36（昨年度 4.27）、後期は 4.24（前年度 4.25）であり、前期後期とも平成 22 年度以降では昨年と同様に高いポイントを維持した。ただし回答「1、2」を合わせると、約 2%の学生に将来役に立つと認識されていないことから、科目の意義や位置づけ、特色の理解を深めるとともに、授業内容に関する実践的な内容も授業に取り込み、将来における職業意識を高める工夫などが望まれる。

設問 11：前期は 4.32（前年度 4.19）、後期は 4.25（昨年度 4.23）であり、前期後期とも平成 22 年度以降では最も高いポイントであった。回答「5」と特に満足感を得られていると回答した学生の割合は、前期約 52%、後期約 49%であり昨年度よりも高くなっている。また、解答「4、5」を合わせると 80%を超えており非常に良好であるとする。一方で、20%程度の学生は回答「1、2、3」と満足であったとは答えていない。この評価は他の全設問を通した総合的な評価であり、多くの学生において全ての設問に対して絶対的な満足感を得られているわけではないことも認識しておかなければならない。

これまでの授業評価結果をもとに各教員は各設問項目を中心に改善の努力を行っており、各項目における年次の増減は多少あるものの、着実に成果が現れてきている。今後は、特に学生自信の授業に対する積極的な取組み（設問 2 および設問 3）を向上させることが総合評価の改善に結びつくと考えられる。引き続き、各教員および学科の地道な改善努力の継続が重要であると考えられる。

## 9. 新入生魅力度調査報告

100 人からの回答が得られ、設問の種別ごとに纏めた。

※ 尚、設問によっては全員が回答しておらず、データから除外したため、設問の回答数の合計が 100 人にならない場合がある。

※ 5 段階（5：特に魅力を感じている 4：多少魅力を感じている 3：どちらでもない 2：あまり魅力を感じない 1：まったく魅力を感じない）で評価している。

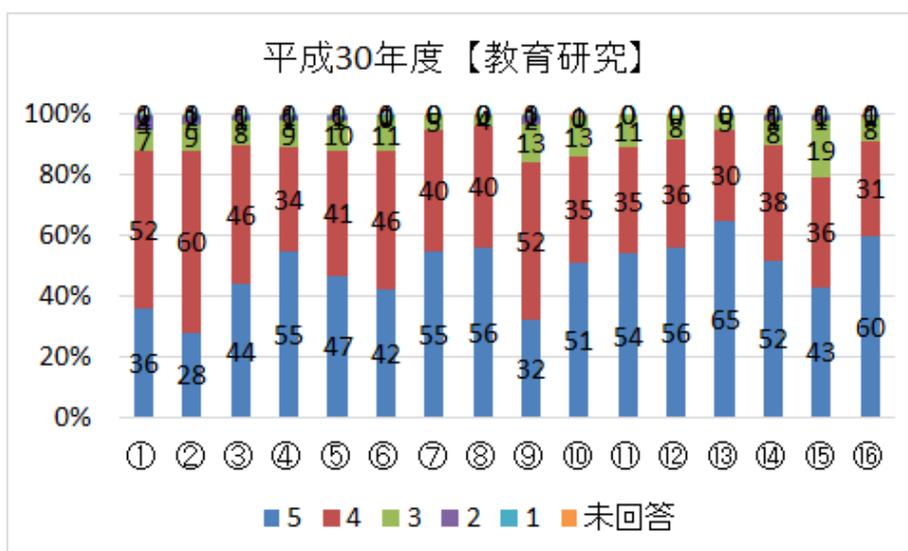
### 1) 教育研究について

#### 【教育研究に対する設問】

- ① あなたは南九州大学の「豊かな自然と温和な気候に恵まれた南九州の環境」で勉学に励めることをどの程度魅力を感じていますか。
- ② あなたは南九州大学の「創造性に富み、人間性と社会性豊かな人間を育成する」点にどの程度魅力を感じていますか。
- ③ あなたは南九州大学の「食・緑・人に関する基礎的、応用的研究をすすめ、専門的分野において社会に貢献寄与できる人材を育成している」点にどの程度 魅力を感じていますか。
- ④ あなたは南九州大学の「優れた教育研究業績をもつ、あるいは優れた現場経験をもつなど、高い能力を持った教員による教育を受けることができる」点にどの程度魅力を感じていますか。
- ⑤ あなたは南九州大学の「優れた研究環境のもと最先端の研究ができる」点にどの程度魅力を感じていますか。
- ⑥ あなたは環境園芸学科が、「環境」を基礎に置きつつ、「緑、食、人」をキーワードとして教育を行っていることにどの程度魅力を感じていますか。
- ⑦ あなたは環境園芸学科が、附属の実験施設やフィールドセンター等を活用した実学教育と少人数教育を行っていることにどの程度魅力を感じていますか。
- ⑧ あなたは環境園芸学科が、6 つの専攻（園芸生産環境、植物バイオ・育種、花・ガーデニング、造園緑地、自然環境、アグリビジネス）を設けていることにどの程度魅力を感じていますか。
- ⑨ あなたは環境園芸学科が、1 年次に人間性と社会性豊かな教養を身につけるための「教養教育科目」を設置していることにどの程度魅力を感じていますか。
- ⑩ あなたは環境園芸学科が、1 年次に農学の分野の専門職業人として必要とされる基礎的な知識と技術を身につけるための「専門基礎科目」を設置していることにどの程度魅力を感じて

いますか。

- ⑪ あなたは環境園芸学科が、専門的な方法論と知識を体系的に学ぶために「専門教育科目」を設置していることにどの程度魅力を感じていますか。
- ⑫ あなたは環境園芸学科が、幅広い知識を身につけるために、自分が目指す専門分野を超えて関心のある科目を履修できるように「専門選択科目」を設置していることにどの程度魅力を感じていますか。
- ⑬ あなたは環境園芸学科が、講義に加えて、演習や実験、実習の専門授業を数多く設置していることにどの程度魅力を感じていますか。
- ⑭ あなたは環境園芸学科が、3年次後期に全員の研究室配属を行い、身につけた知識や技術を駆使して、新たな問題の探求能力や解決能力を養成するカリキュラムを取っていることにどの程度魅力を感じていますか。
- ⑮ あなたは環境園芸学科が、4年次で卒業論文を学科の必須として、専門性を高めることとしていることにどの程度魅力を感じていますか。
- ⑯ あなたは環境園芸学科が、教員免許、学芸員免許、樹木医補、測量士補などの資格や免許の取得に対応した「専門選択科目」を設置していることにどの程度魅力を感じていますか。



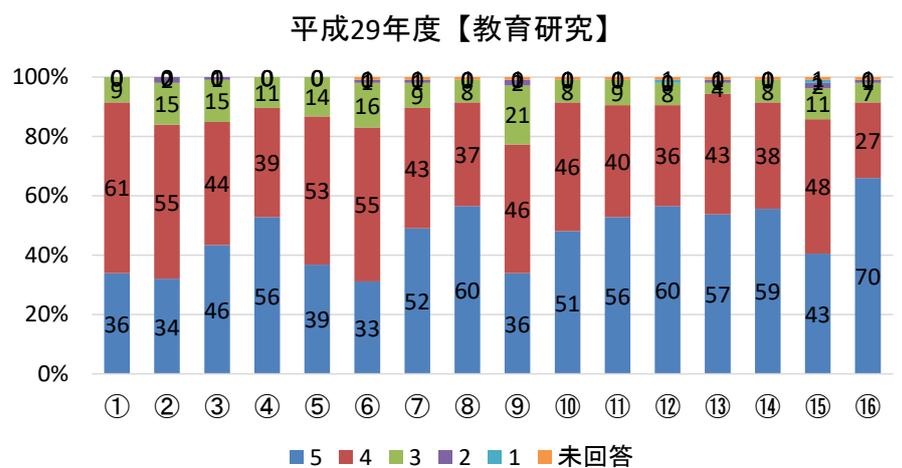


図1. 平成30年度および平成29年度新入生魅力度調査の回答集計（教育研究）

各設問において昨年度と同様の傾向がみられる。全ての設問で80%以上の新入生が「5：特に魅力を感じている」または「4：多少魅力を感じている」と答えており、本学ならびに環境園芸学科の教育研究理念やカリキュラムに受験生に対する一定の訴求効果があり、新入生はそれに期待しているものと考えられる。昨年度および一昨年度（データ省略）は、「5または4」と回答した新入生の割合が全設問中で設問9（教養教育科目の設置）が最も低かったが、本年度は設問15（卒業論文を学科の必須として専門性を高める）が最も低くなった。この点については、入学後早い段階で新入生全員に対し卒業論文の重要性・位置づけを理解させることも必要であると考えられる。

## 2) 就職支援について

### 【就職支援に対する質問】

- ① あなたは南九州大学の「就職課」があり、当該課の専門スタッフが就職活動支援をしてくれる」点にどの程度魅力を感じていますか。
- ② あなたは南九州大学の「将来の進路に関するセミナー・ガイダンスや公務員・教員就職のための講座が充実している」点にどの程度魅力を感じていますか。
- ③ あなたは南九州大学の「地元へのUターン就職に対して全力でサポートしてくれる」点にどの程度魅力を感じていますか。
- ④ あなたは南九州大学の「各学科に関連する業界の求人情報を多く扱っている」点にどの程度魅力を感じていますか。
- ⑤ あなたは南九州大学の「インターンシップ制度が充実している」点にどの程度魅力を感じていますか。

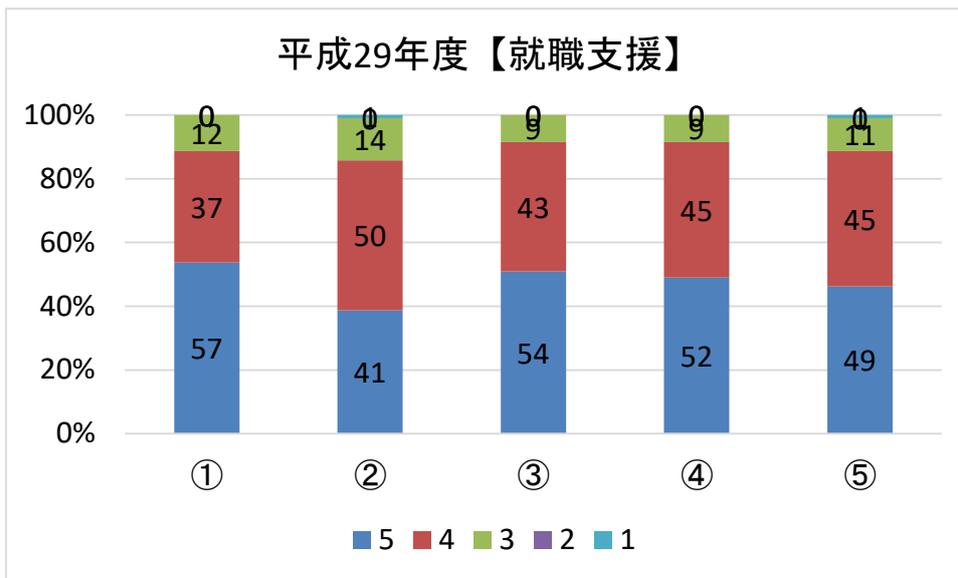
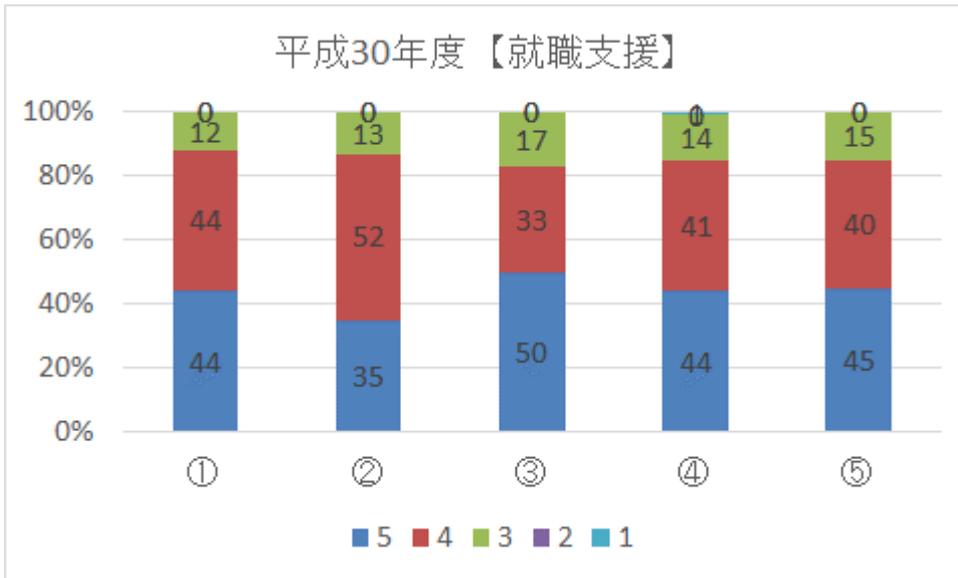


図2. 平成30年度および平成29年度新入生魅力度調査の回答集計（就職支援）

前年度と同様に全ての設問で80%以上の新入生が「5：特に魅力を感じている」または「4：多少魅力を感じている」と答えており、昨年度より魅力度が高い傾向がみられ、新入生の就職支援に対する期待度の高さが伺える。今後、卒業年次を実施する卒業生満足度調査と併せた分析が必要であると思われる。

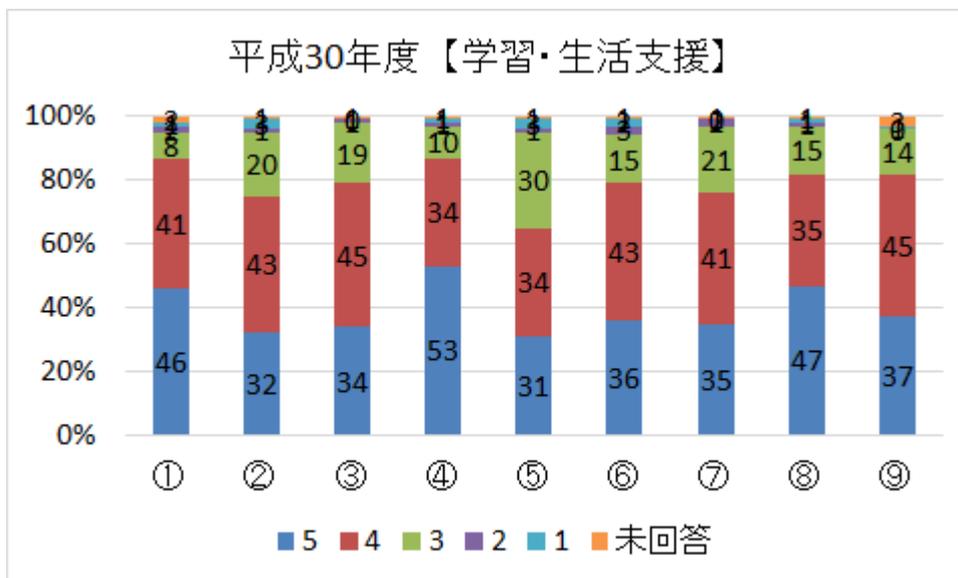
### 3) 学習・生活支援について

#### 【学習・生活支援に対する質問】

① あなたは南九州大学の「学生支援課」があり、当該課の専門スタッフが学習支援（各種証明

書発行・休講時連絡・アルバイト情報等) をしてくれる」点にどの程度魅力を感じていますか。

- ② あなたは南九州大学の「充実した蔵書・雑誌・新聞・視聴覚機器・閲覧スペース等のある図書館があり、学生の学習支援に役立っている」点にどの程度魅力を感じていますか。
- ③ あなたは南九州大学の「保健室・学生相談室」があり、当該室の専門スタッフが怪我・体調不良の治療や体調管理等に関する相談、大学生活に関しての悩み相談をしてくれる」点にどの程度魅力を感じていますか。
- ④ あなたは南九州大学の「生協売店・生協食堂」があり、学生生活の支援充実を図ってくれている」点にどの程度魅力を感じていますか。
- ⑤ あなたは南九州大学の「下宿生を対象にした充実した寮やマンション等の斡旋がある」点にどの程度魅力を感じていますか。
- ⑥ あなたは南九州大学の「課外活動（部活動、学友会、学祭実行委員会等）が充実していて楽しく思い出に残る学生生活を送れる」点にどの程度魅力を感じていますか。
- ⑦ あなたは南九州大学の「毎年有意義な学校行事（大学祭等）が行われている」点にどの程度魅力を感じていますか。
- ⑧ あなたは南九州大学の「充実した奨学金・特待生制度がある」点にどの程度魅力を感じていますか。
- ⑨ あなたは南九州大学の「各学年の教員による担任制度があり、学習支援・学生生活支援をしてくれる」点にどの程度魅力を感じていますか。



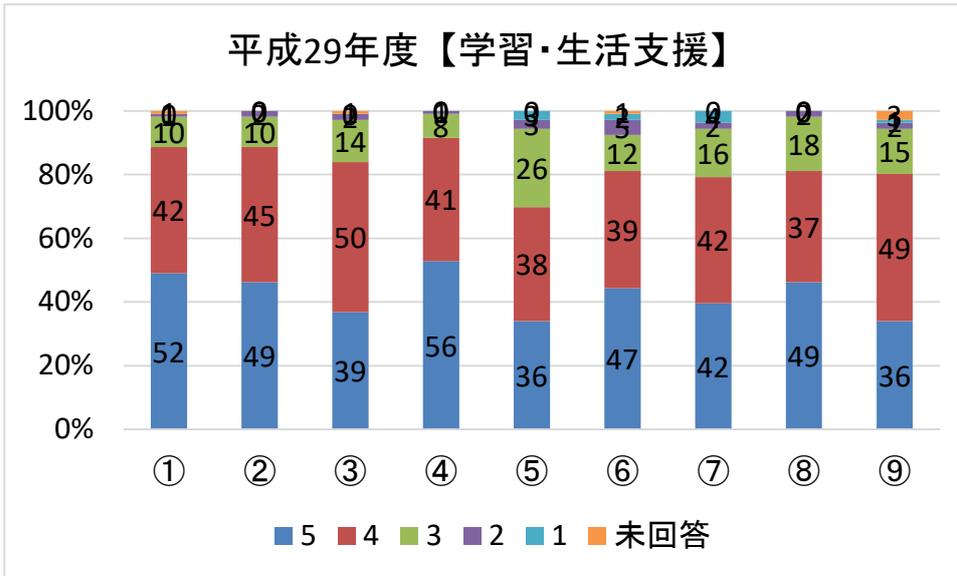


図3. 平成30年度および平成29年度新入生魅力度調査の回答集計（学習・生活支援）

昨年度と同様に全ての設問において60%以上の新入生が魅力を感じており、一定の学習・生活支援に対する期待感が伺えられる。ただし、「5：特に魅力を感じている」については、昨年度および一昨年度に引き続き、設問5「下宿生を対象にした充実した寮やマンション等の斡旋がある」が最もポイントが低かった。本設問については現状と一致していないことから今後設問に関する検討が必要である。

#### 4) 施設・設備について

##### 【施設・設備に対する質問】

- ① あなたは南九州大学の「最先端の機器を導入した実験室や実際の現場を想定した実習室（フィールドセンターを含む）が整備されている」点にどの程度魅力を感じていますか。
- ② あなたは南九州大学の「インターネット環境が充実し整っている（学内LANの充実、情報処理室の充実等）」点にどの程度魅力を感じていますか。
- ③ あなたは南九州大学の「清潔で機能的で、また快適な校舎で学生生活が送れる」点にどの程度魅力を感じていますか。
- ④ あなたは南九州大学の「通学に関して、スクールバスの運行や広い駐車場・駐輪場を有しており、通学に便利である」点にどの程度魅力を感じていますか。
- ⑤ あなたは南九州大学の「体育館・グラウンドなどの運動施設やサークル活動の支援施設（クラブハウス）が充実している」点にどの程度魅力を感じていますか。
- ⑥ あなたは南九州大学の「休憩時間中にすごせる憩いの場（食堂・中庭・学生ラウンジ等）が充実している」点にどの程度魅力を感じていますか。

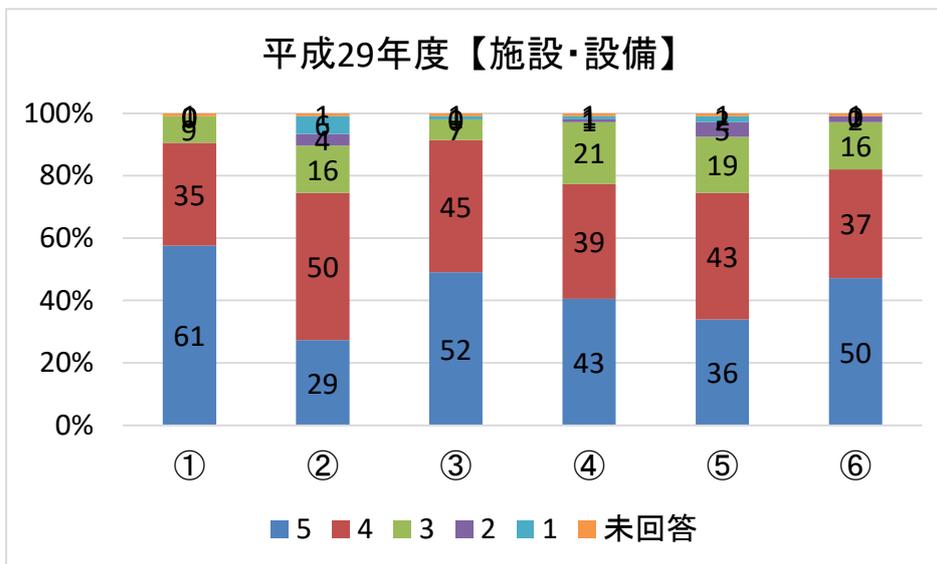
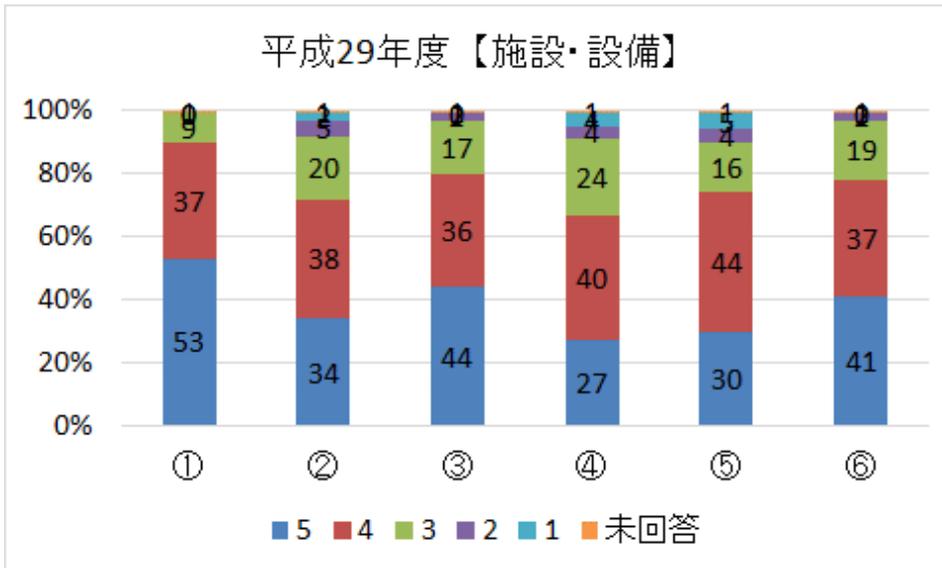


図4. 平成30年度および平成29年度新入生魅力度調査の回答集計（施設・設備）

全体的に昨年度と同様な傾向にあるが、設問4「通学に関して、スクールバスの運行や広い駐車・駐輪場を有しており、通学に便利である」については、「5：特に魅力を感じている」と評価した学生が、昨年度よりも減少している。この点については、本学科の新入生は県外出身者が多いことからスクールバスの利便性について享受していないことが考えられる。また、設問2「インターネット環境が充実し整っている（学内LANの充実、情報処理室の充実等）」については、例年通り低水準であることから早期の改善が望まれる。

#### 5. 全体を通して

全体として昨年度の結果と同じような傾向にある。大きな変化がない限り、この傾向は変わらないのかもしれない。調査した各設問に対して、あまりあるいは全く魅力を感じないとの回答「1、

2) は概ね 10%未満であり、本学並びに本学科の教育研究、就職支援、学習・生活支援および施設・設備は新入生の多くに魅力あるものになっていることが示された。この高い魅力度を高い満足度に維持・向上に繋げる取り組みが重要であると思われる。また、新入生（高校生）のニーズは変化するものと考えられることから、今後、時代に即した対応や本学の特色や魅力度をさらに高める取り組みも必要であると考えられる。

## (2) 環境園芸学科の卒業予定者満足度調査報告

83 人からの回答が得られ、設問の種別ごとに纏めた。

※尚、設問によっては全員が回答しておらず、データから除外したため、設問の回答数の合計が 83 人にならない場合がある。

※ 5 段階（5：特に満足している 4：多少満足している 3：どちらでもない 2：あまり満足していない 1：まったく満足していない）で評価している。

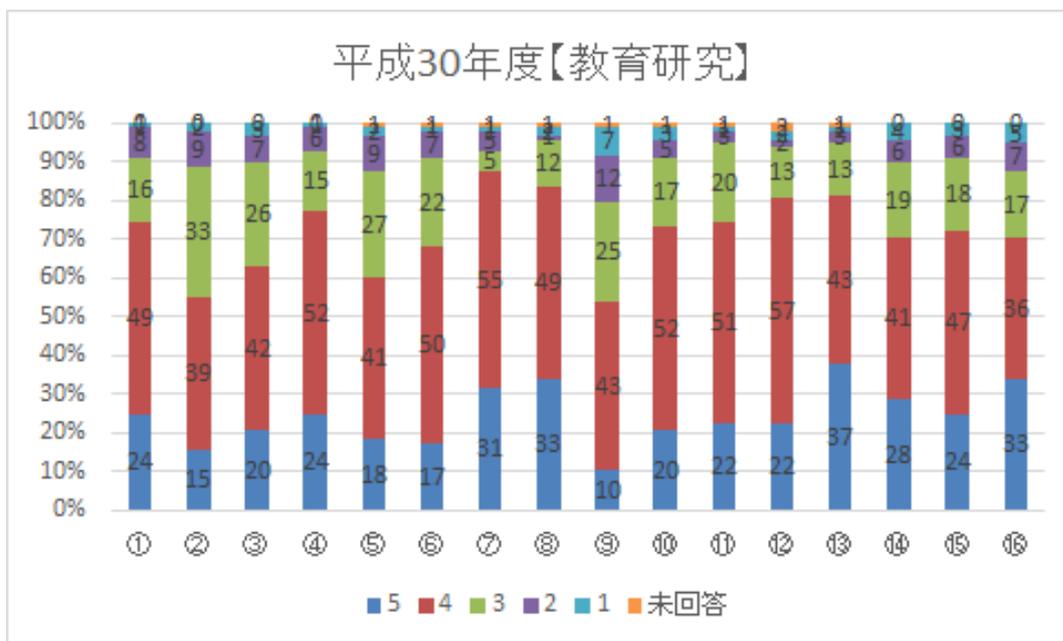
### 1) 教育研究について

#### 【教育研究に対する設問】

- ① あなたは南九州大学の「豊かな自然と温和な気候に恵まれた南九州の環境」で勉学に励めることをどの程度満足しましたか。
- ② あなたは南九州大学の「創造性に富み、人間性と社会性豊かな人間を育成する」点にどの程度満足しましたか。
- ③ あなたは南九州大学の「食・緑・人に関する基礎的、応用的研究をすすめ、専門的分野において社会に貢献寄与できる人材を育成している」点にどの程度満足しましたか。
- ④ あなたは南九州大学の「優れた教育研究業績をもつ、あるいは優れた現場経験をもつなど、高い能力を持った教員による教育を受けることができる」点にどの程度満足しましたか。
- ⑤ あなたは南九州大学の「優れた研究環境のもと最先端の研究ができる」点にどの程度満足しましたか。
- ⑥ あなたは環境園芸学科が、「環境」を基礎に置きつつ、「緑、食、人」をキーワードとして教育を行っていることにどの程度満足しましたか。
- ⑦ あなたは環境園芸学科が、附属の実験施設やフィールドセンター等を活用した実学教育と少人数教育を行っていることにどの程度満足しましたか。
- ⑧ あなたは環境園芸学科が、6 つの専攻（園芸生産環境、植物バイオ・育種、花・ガーデニング、造園緑地、自然環境、アグリビジネス）を設けていることにどの程度満足しましたか。
- ⑨ あなたは環境園芸学科が、1 年次に人間性と社会性豊かな教養を身につけるための「教養教育科目」を設置していることにどの程度満足しましたか。
- ⑩ あなたは環境園芸学科が、1 年次に農学の分野の専門職業人として必要とされる基礎的な知識と技術を身につけるための「専門基礎科目」を設置していることにどの程度満足しましたか。
- ⑪ あなたは環境園芸学科が、専門的な方法論と知識を体系的に学ぶために「専門教育科目」を

設置していることにどの程度満足しましたか。

- ⑫ あなたは環境園芸学科が、幅広い知識を身につけるために、自分が目指す専門分野を超えて関心のある科目を履修できるように「専門選択科目」を設置していることにどの程度満足しましたか。
- ⑬ あなたは環境園芸学科が、講義に加えて、演習や実験、実習の専門授業を数多く設置していることにどの程度満足しましたか。
- ⑭ あなたは環境園芸学科が、3年次後期に全員の研究室配属を行い、身につけた知識や技術を駆使して、新たな問題の探求能力や解決能力を養成するカリキュラムを取っていることにどの程度満足しましたか。
- ⑮ あなたは環境園芸学科が、4年次で卒業論文を学科の必須として、専門性を高めることとしていることにどの程度満足しましたか。
- ⑯ あなたは環境園芸学科が、教員免許、学芸員免許、樹木医補、測量士補などの資格や免許の取得に対応した「専門選択科目」を設置していることにどの程度満足しましたか。



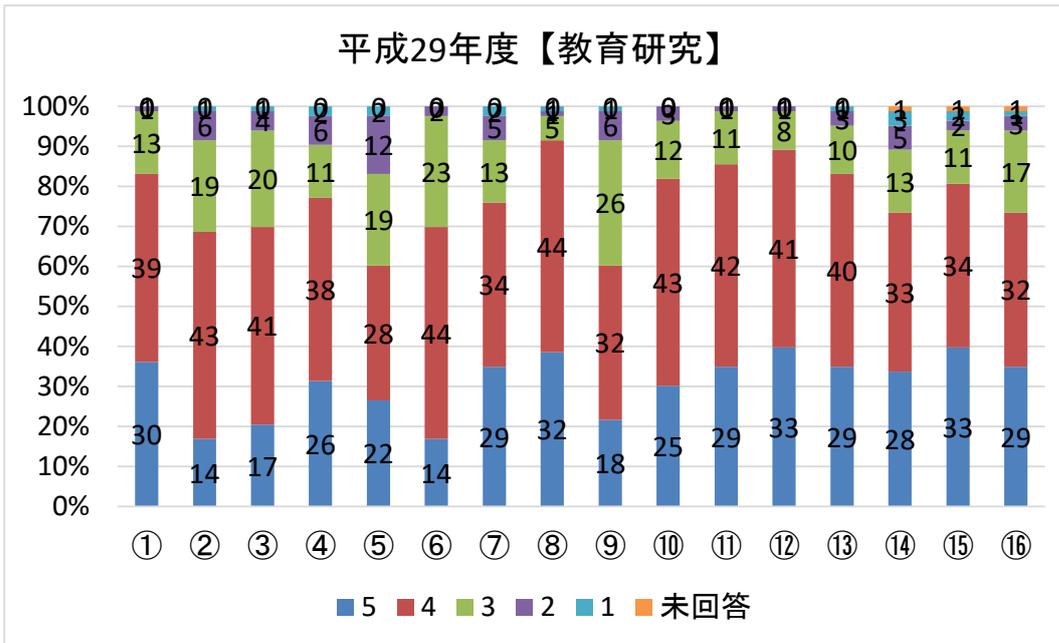


図5. 平成30年度および平成29年度卒業予定者満足度調査の回答集計（教育研究）

すべての設問で、50%以上の学生が満足（4以上）と回答しており、満足していない（2以下）と回答した学生は20%以下と概ね良好な値を示している。今年度の調査において、満足（4以上）と回答した学生の割合が低かったのは（60%以下）、設問2「創造性に富み、人間性と社会性豊かな人間を育成する」と設問5「優れた研究環境のもと最先端の研究ができる」、設問9「教養教育科目の設置」であった。例年同じような傾向にあるが、設問9は昨年度と同様に満足（4以上）と回答した学生の割合が最も低かった。これらの結果から、本学科の学生は概ね満足（4以上）しているものの、「教養教育科目」よりも「専門科目」に高い関心を持っていることが示唆された。今後、学生への「教養教育科目」の重要性の理解や在り方、「教養教育科目」と「専門教育科目」のバランス（専門の特化も含め）などについての検討が課題として考えられる。

## 2) 就職支援について

### 【就職支援に対する質問】

- ① あなたは南九州大学の「就職課」があり、当該課の専門スタッフが就職活動支援をしてくれる」点にどの程度満足しましたか。
- ② あなたは南九州大学の「将来の進路に関するセミナー・ガイダンスや公務員・教員就職のための講座が充実している」点にどの程度満足しましたか。
- ③ あなたは南九州大学の「地元へのUターン就職に対して全力でサポートしてくれる」点にどの程度満足しましたか。
- ④ あなたは南九州大学の「各学科に関連する業界の求人情報を多く扱っている」点にどの程度満足しましたか。
- ⑤ あなたは南九州大学の「インターンシップ制度が充実している」点にどの程度満足しましたか。

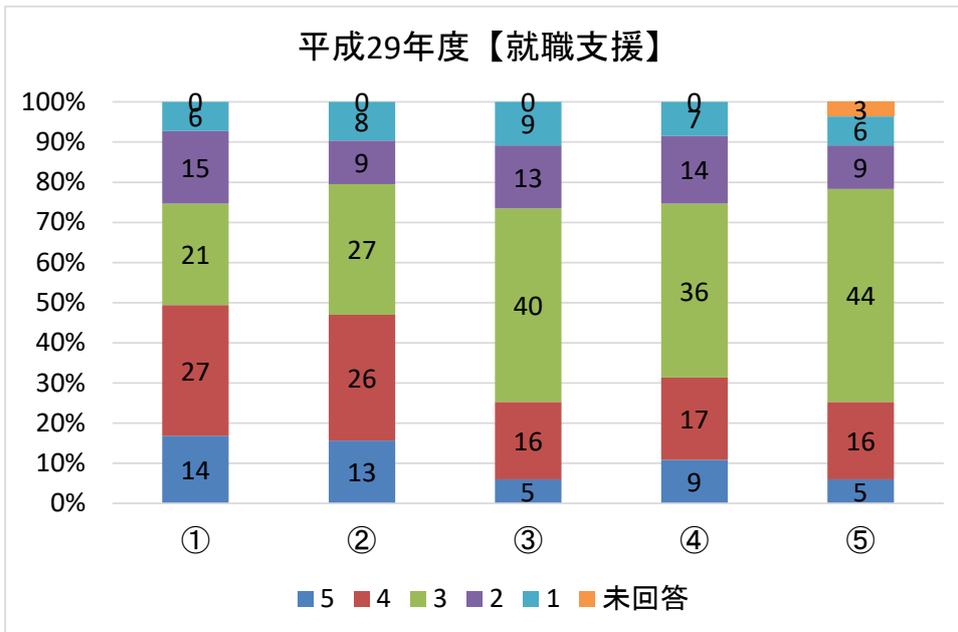
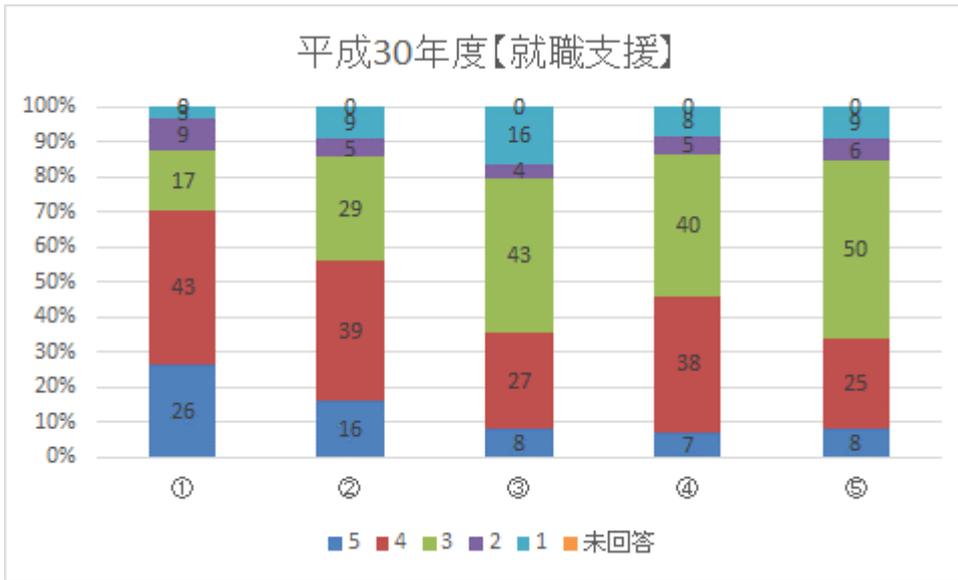


図6. 平成30年度および平成29年度卒業予定者満足度調査の回答集計（就職支援）

昨年度と比較して、全ての設問において満足度（4以上）が増加した。これについては、就職課をはじめとして学科の就職に関する取り組みの積み重ねの結果であると考えられる。しかしながら、設問3「地元へのUターン就職に対して全力でサポートしてくれる」および設問5「インターンシップ制度が充実している」について例年満足度（4以上）が40%以下と低い評価である。設問3の原因としては、本学科の学生は全国から集まっていること、地元へUターン就職しない学生の割合が多いこと、などが考えられる。この対策としては、地元へどのような就職先（企業・役場・団体など）があり、それらの求人や採用試験の情報収集と対応が重要であることを関係課と連携を取り学生に指導していく必要があると考えられる。また、設問5のインターンシッ

プ制度については、本年度は昨年度および一昨年度と比較して満足度（4以上）が増加しており着実に成果が出始めている。今後は内容および取組みについて、学生への周知を徹底する必要があると考えられる。

### 3) 学習・生活支援について

#### 【学習・生活支援に対する質問】

- ① あなたは南九州大学の「“学生支援課”があり、当該課の専門スタッフが学習支援（各種証明書発行・休講時連絡・アルバイト情報等）をしてくれる」点にどの程度満足しましたか。
- ② あなたは南九州大学の「充実した蔵書・雑誌・新聞・視聴覚機器・閲覧スペース等のある図書館があり、学生の学習支援に役立っている」点にどの程度満足しましたか。
- ③ あなたは南九州大学の「“保健室・学生相談室”があり、当該室の専門スタッフが怪我・体調不良の治療や体調管理等に関する相談、大学生活に関する悩み相談をしてくれる」点にどの程度満足しましたか。
- ④ あなたは南九州大学の「“生協売店・生協食堂”があり、学生生活の支援充実をはかっている」点にどの程度満足しましたか。
- ⑤ あなたは南九州大学の「下宿生を対象にした充実した寮やマンション等の斡旋がある」点にどの程度満足しましたか。
- ⑥ あなたは南九州大学の「課外活動（部活動、学友会、学祭実行委員会等）が充実していて楽しく思い出に残る学生生活を送れる」点にどの程度満足しましたか。
- ⑦ あなたは南九州大学の「毎年有意義な学校行事（大学祭等）が行われている」点にどの程度満足しましたか。
- ⑧ あなたは南九州大学の「充実した奨学金・特待生制度がある」点にどの程度満足しましたか。
- ⑨ あなたは南九州大学の「各学年の教員による担任制度があり、学習支援・学生生活支援をしてくれる」点にどの程度満足しましたか。

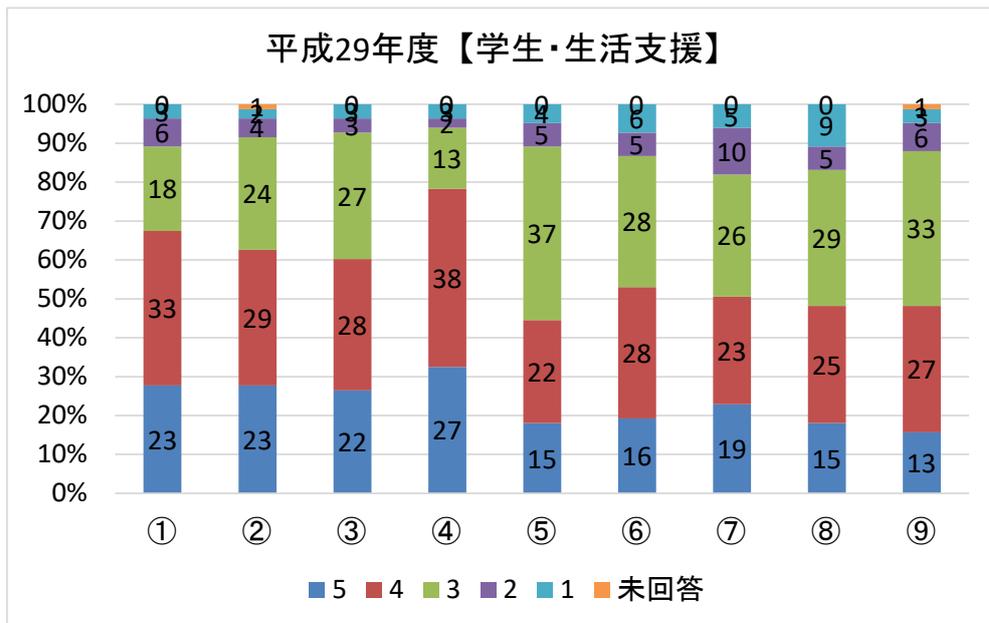
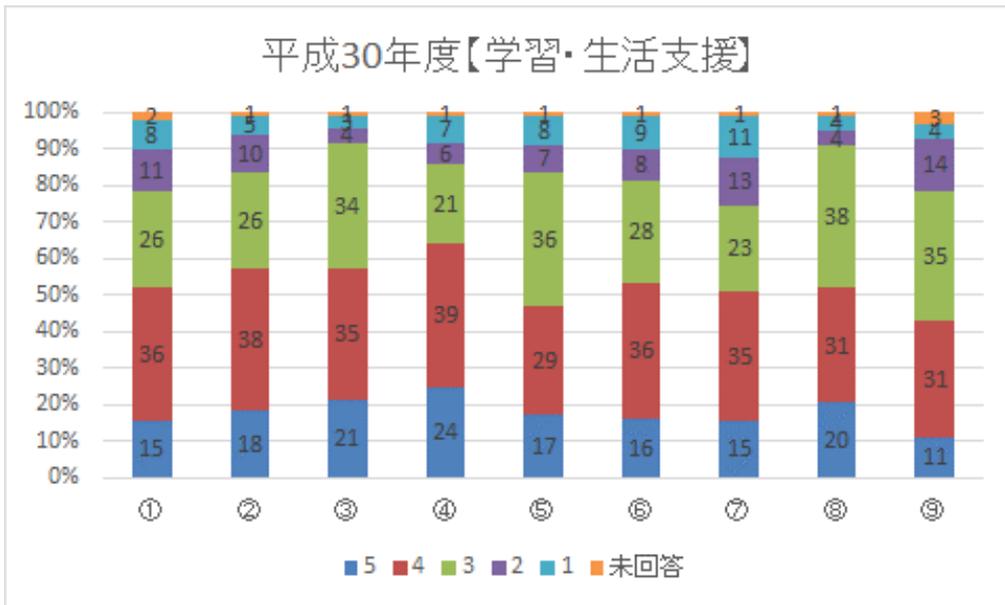


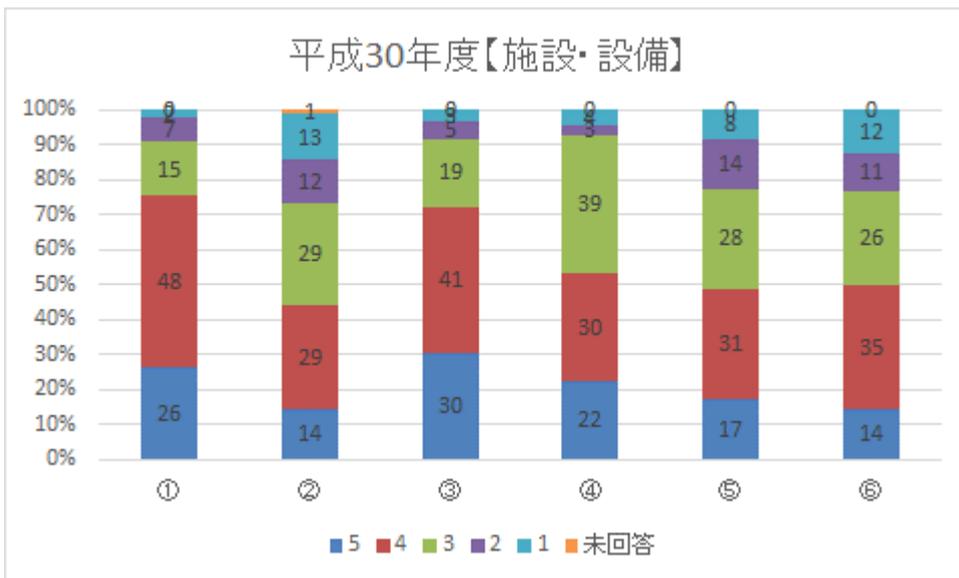
図7. 平成30年度および平成29年度卒業予定者満足度調査の回答集計（学習・生活支援）

昨年度と比較して、全ての設問において満足度（4以上）が同等かまたは減少傾向にある。65%程度が満足（4以上）と回答したのは昨年度および一昨年度と同様に設問4「生協売店・食堂の充実」の1項目だけであった。設問5「下宿生を対象にした住居の斡旋」と設問9「担任制度」については、昨年度と同様に50%以下であり、対策を検討する必要がある。設問9については、本学科では3年前期までは学年ごとに4人程度の教員が、3年後期の研究室配属後はその研究室の教員が担任として指導に当たっているが、研究室配属後の教員を担任として考えて回答していない可能性があり、このことについて学生に周知することや設問を修正することにより、満足度が上がる可能性がある。

4) 施設・設備について

【施設・設備に対する質問】

- ① あなたは南九州大学の「最先端の機器を導入した実験室や実際の現場を想定した実習室（フィールドセンターを含む）が整備されている」点にどの程度満足しましたか。
- ② あなたは南九州大学の「インターネット環境が充実し整っている（学内 LAN の充実、情報処理室の充実等）」点にどの程度満足しましたか。
- ③ あなたは南九州大学の「清潔で機能的で、また快適な校舎で学生生活が送れる」点にどの程度満足しましたか。
- ④ あなたは南九州大学の「通学に関して、スクールバスの運行や広い駐車場・駐輪場を有しており、通学に便利である」点にどの程度満足しましたか。
- ⑤ あなたは南九州大学の「体育館・グラウンドなどの運動施設やサークル活動の支援施設（クラブハウス）が充実している」点にどの程度満足しましたか。
- ⑥ あなたは南九州大学の「休憩時間中にすごせる憩いの場（食堂・中庭・学生ラウンジ等）が充実している」点にどの程度満足しましたか。



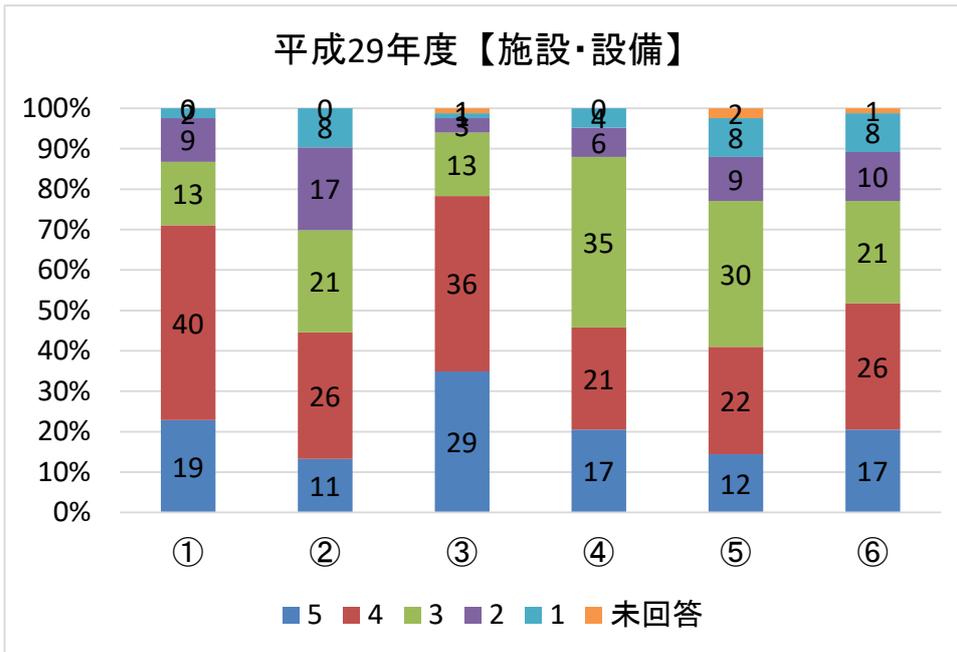


図 8. 平成 30 年度および平成 29 年度卒業予定者満足度調査の回答集計（施設・設備）

昨年度および一昨年度（データ省略）と同様に設問 2「インターネット環境の充実」および、設問 5「運動施設やサークル活動の支援施設の充実」で満足度（4 以上）が 50%以下と低評価であり、早急に対策を検討する必要がある。設問 2 および 5 については、Wi-Fi 環境の充実や運動施設・サークル活動のハード面での整備充実などの全学的な検討が必要である。また、満足度（4 以上）が 70%を超えている項目としては、昨年度と同様に設問①「研究・実習用の設備・環境」と設問③「快適な校舎」の 2 項目であった。これらの項目は概ね高評価であるが、本学の特徴としてさらなる充実を図っていく必要がある。

## 【管理栄養学科】

### 1. 全学的 FD 活動への積極的な参加

全学的 FD 活動である、各種事業に学科全教員がそれぞれ関係する事業へ参加した。それぞれの事業に参加することで、教育力向上、地域貢献などを目指すことができた。

### 2. 学科独自の委員会等の設置

管理栄養学科では、全学的な委員会とは別に学科独自の委員会を設置し、活動を行っている。独自の委員会は、管理栄養士国家試験に関して対策の立案等を主な業務にする「国試対策委員会」、高度な技能をもつ管理栄養士の養成ができるようカリキュラムの検討等を主な業務にする「カリキュラム委員会」、卒業生とのネットワーク構築を目的とした「アフターフォローネットワーク構築委員会」、学生の就職

支援等を主な業務にする「就職担当」などがある。これらの委員会がそれぞれの業務を円滑に進めることにより、学生の国家試験の高合格率、学生の就職の高内定率、高度な技能をもつ管理栄養士の排出を実現している。

### 3. 学科全教員で参画する管理栄養士国家試験対策

管理栄養学科の大きな教育目標として、「管理栄養士国家試験の全員合格」というものを掲げている。その大きな目標の実現に向け、学科全教員が学生たちの国家試験対策の支援を行ってきている。上記 2 の国試対策委員会が立案した国試対策方針を基に、教員は国試対策授業を行い、助手は勉強会の実施などを行ってきている。特に 4 年生になってからは各研究室の担当教員によるサポートを充実させている。これまでの組織的な取り組みの成果もあり、平成 29 年 5 月発表の国家試験の結果(11 期生)は 100%、平成 30 年 3 月発表の国家試験の結果(12 期生)は 100%と全国でもトップレベルの合格率を出している。即戦力のある高度な技能をもった管理栄養士の養成とともに、管理栄養士国家試験を突破できる人材をこれからも養成していく。

### 4. 学生の名前と顔を覚える事業

管理栄養学科では、新入生オリエンテーションの時に顔写真をとり、それをもとに顔写真と氏名の書かれた資料を作成し、学科全教員へ配布するようにしている。また、学籍カードも作成している。そうすることで、学生一人ひとりの名前と顔を覚えることができるとともに、学生指導・支援の推進に役立っている。

### 5. 学生指導

管理栄養学科は 1 学年 2 クラス制となっているため、担任を各クラス 1 名ずつ計 2 名配置し、細やかな指導を行っている。授業への欠席が続いた学生やレポートが未提出になっている学生に対しては、早い段階で担任に連絡を取り、対応することで、長期欠席や単位未修得につながらないようにしている。また、学業への不安などがある場合は、早急に面談を行い、解決策を一緒に考え、学業に専念できるよう支援を行っている。

定期的に行われる学科会議で各担任教員より各学年の様子について報告がなされ、情報共有することで教員全員によって見守る体制をとっている。

### 6. リメディアル教育の推進

管理栄養学科の推薦入学等で早期に合格した入学予定者を対象に学科独自のリメディアル教育を推進してきている。入学予定者のうち、文系、理系出身者問わず、高校「基礎化学・化学」および「基礎生物・生物」レベルの基礎的な課題 10 問ほどを出し、決められた期日までに提出させている。栄養学を学ぶにあたり、化学および生物は大変重要な基礎的科目であり、このような課題を出すことで、入学前の学力向上に努めてきている。

### 7. 基礎的科目(化学・生物)の支援

管理栄養学科では上記 7 の事業とは別に入学後の基礎的科目(化学・生物)の支援も独自で行ってき

ている。1年次配当科目である「からだと栄養実験」などで、高校の基礎化学・化学および基礎生物・生物に関する内容を盛り込み、当該科目が苦手な学生に対しては、個別に対応するなどして、学科の授業についていけるよう支援してきている。

## 8. 食農教育

管理栄養学科では、「食農教育」ができる人材を育成しようと、2006年より長年にわたり、地域青年部の方々のご協力のもと農作物を育て、収穫することで農業を知るとともに感謝の心を学ぶ活動を行っている。また宮崎県で収穫される作物を使ってレシピを考案し、発表会を行ったり、地域のイベントでの販売などに参加し、学生にとって大変貴重な体験となっている。全学年を対象に4月に参加者を募り、希望者がこの活動に参加できる体制をとっている。

## 9. 前期 授業評価アンケート 集計結果分析

管理栄養学科については、昨年の授業評価アンケートの結果と比較しながら反省点を分析した。

(アンケート集計結果(平均値):( )内は平成29年度前期結果)

設問 1) 私はこの授業によく出席した	4.81(4.83)
設問 2) 私は授業内容について質問や発言をした	3.15(3.29)
設問 3) 私はこの科目に積極的に取り組んだ(予習や復習をした)	3.84(3.91)
設問 4) 教員の声は聞き取りやすかった	<b>4.45</b> (4.41)
設問 5) 教員の板書(又はPPT・配布資料等)は読みやすかった(見やすかった)	4.27(4.29)
設問 6) 教員は授業の開始・終了の時刻を守ろうとしていた	<b>4.78</b> (4.71)
設問 7) 教員は学生の反応を確かめながら授業を進めていた	<b>4.44</b> (4.38)
設問 8) 教員は熱意を持って授業をしていた	<b>4.57</b> (4.53)
設問 9) 私はこの授業内容を理解できた	<b>4.13</b> (4.12)
設問 10) 私はこの授業で学んだ内容はなんらかのかたちで将来役立つと感じた	<b>4.63</b> (4.52)
設問 11) 私は総合的に判断してこの授業で満足が得られた	<b>4.33</b> (4.32)

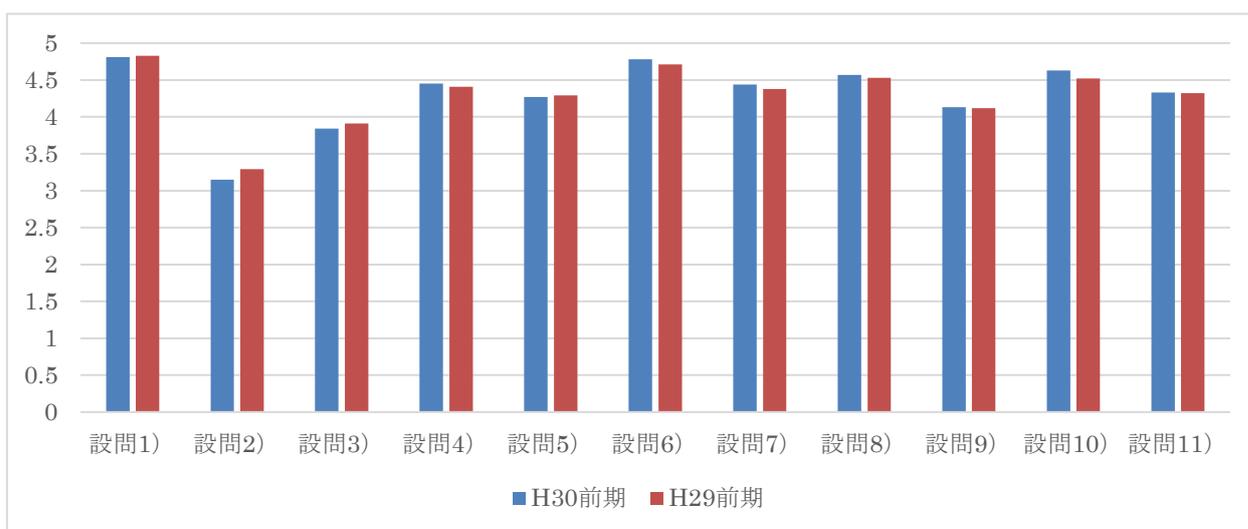


図 1. 前期授業評価アンケート 集計結果(H30,29 年度比較)

- ・ 管理栄養学科では前期において平成 25 年度から今年度(平成 30 年度)まで、設問 2)、設問 3)の項目を除いてすべての項目で 4.00 ポイント以上という高い評価が得られている。
- ・ 今回のアンケートの平均値では、前回のアンケート集計結果(平成 29 年度前期)と比較して、設問 4)および設問 6)～11)の項目でポイントの上昇がみられた。
- ・ 特に教員の授業実施方法に関する設問項目 4)～8)において、すべての項目で平均値が 4.27～4.78 ポイントと高い数値となっていた。各教員の授業評価の結果を踏まえた積極的な取り組みを学生が支持した結果といえよう。
- ・ 学生の授業取り組みに関する設問項目 1)～3)において、すべての項目で平均値が前年度と比較して低下していた。特に設問 2)では、6 割以上(63%)が授業内容について質問や発言をしたとは(あまり)思わない、あるいはどちらともいえないと回答していた。授業評価アンケートの対象となった科目をみるとほとんどが座学であったため、このような結果になったとも考えられたが、座学においても学生が積極的に発言できるような授業方法を各教員が取り入れるよう工夫が必要であると思われる。設問 3)の項目についても、平成 25 年度から今年度(平成 30 年度)まで、4.00 ポイント以下の数値となった。昨年度は各教員が予習テストや復習テストを取り入れるなどして、学生が授業時間以外にも積極的に学習に取り組むための工夫を行ったことにより、ポイントは 4.00 ポイントに近い数値となり上昇傾向にあったが、学生が積極的に予習、復習に取り組むよう、更なる工夫が必要であると思われる。
- ・ 学科全体で反省点をまとめると、ほとんどの項目で 4.00 ポイント以上という高い評価が得られており、おおむね良好な結果が得られた。各教員が授業評価アンケートの結果を分析し、より良い授業内容にするために改善あるいは積極的な取り組みを行った結果といえよう。ただし、学生の授業取り組み

に関して、特に積極的な発言、予習、復習については、引き続き低下傾向であることから、これを改善すべく授業方法の工夫など考えていく必要がある。また学生の積極的な発言などがみられる授業(座学)を紹介するなども取り入れていけたらと考える。

## 平成 30 年度後期 授業評価アンケート 集計結果分析

管理栄養学科については、昨年の授業評価アンケートの結果と比較しながら反省点を分析した。

(アンケート集計結果(平均値):( )内は平成 29 年度後期結果)

設問 1) 私はこの授業によく出席した	4.78(4.81)
設問 2) 私は授業内容について質問や発言をした	3.54(3.18)
設問 3) 私はこの科目に積極的に取り組んだ(予習や復習をした)	4.11(3.84)
設問 4) 教員の声は聞き取りやすかった	4.53(4.50)
設問 5) 教員の板書(または PPT・配布資料等)は読みやすかった(見やすかった)	4.38(4.29)
設問 6) 教員は授業の開始・終了の時刻を守ろうとしていた	4.74(4.71)
設問 7) 教員は学生の反応を確かめながら授業を進めていた	4.46(4.36)
設問 8) 教員は熱意を持って授業をしていた	4.63(4.59)
設問 9) 私はこの授業内容を理解できた	4.25(4.14)
設問 10) 私はこの授業で学んだ内容はなんらかのかたちで将来役立つと感じた	4.63(4.62)
設問 11) 私は総合的に判断してこの授業で満足が得られた	4.46(4.35)

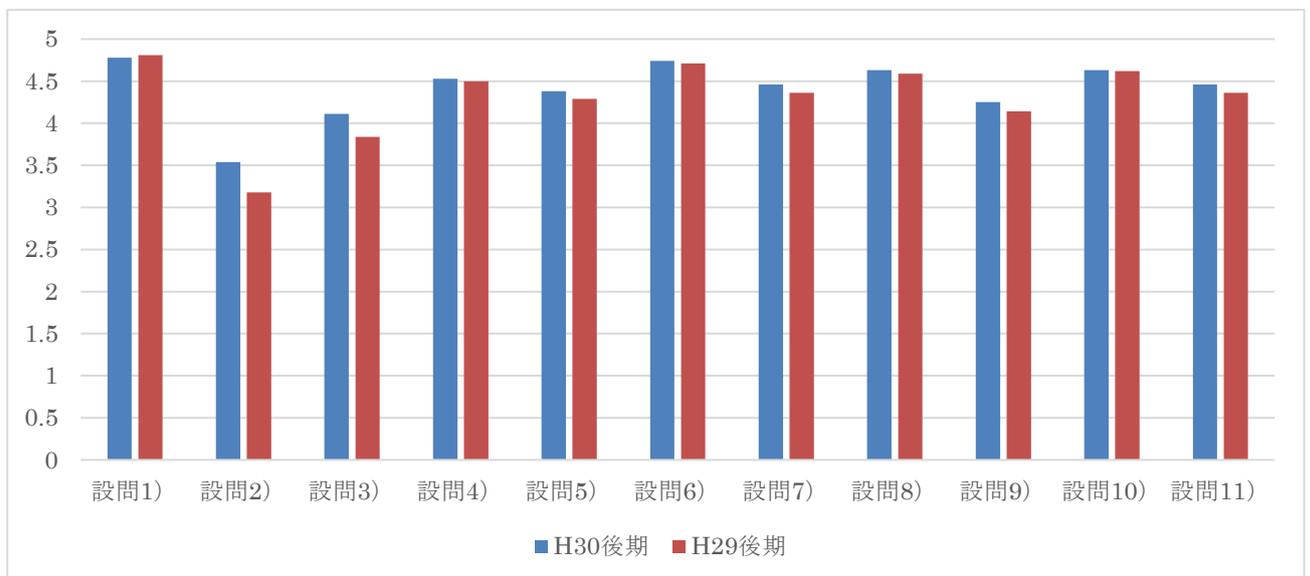


図 2. 後期授業評価アンケート 集計結果(H30,29 年度比較)

- 管理栄養学科では後期において設問 2)の項目を除いてすべての項目で 4.00 ポイント以上という高い評価が得られた。

- 今回のアンケートでは、前回のアンケート集計結果(平成 29 年度後期)と比較して、設問 1)を除くすべての項目で平均値が上昇していた。授業評価アンケートの結果を受け、個々の教員がより良い授業を行うための工夫に取り組んだ結果といえよう。

特に設問 2)の授業についての質問や発言、設問 3)の予習・復習についての設問項目での上昇が大きかった。これらの設問項目では「課題を事前に与え、次週の最初に発表させる」、「前に出て書かせる」、「発表授業や Q&A を入れて発表の場を取り入れた」、「暗記の小テストを追加した」、「授業時間外でのマンツーマン指導を取り入れた」、「時間外学習で次回実習の課題を与えた」など具体的な学生の積極性を引き出す取り組み、授業実施方法の改善への工夫を行った結果といえよう。
- 学科全体で反省点をまとめると、後期においてはほとんどの項目でポイントの上昇がみられ、おおむね良好な結果が得られたことから、授業評価アンケートの結果が授業に活かされていると考えられた。特に今回ポイントの上昇がみられた設問 2)3)については引き続き、学生の積極性を引き出せるような工夫、取り組みを行っていくようにしたい。ただし、設問2)については3ポイント台と他の項目より低いいため、次年度も改善(4ポイント台になるよう)に更なる対策が必要である。この項目の改善により、より質の高い授業が期待されるのではないかと考える。

## 11.新入生魅力度調査

### 【教育研究に対する設問】

- 質問①から⑤までが「南九州大学」の教育研究の理念等に対する魅力度調査であり、質問⑥から⑩までが「管理栄養学科」の教育研究に対する魅力度調査であった。
- 質問①～⑤では4あるいは5(多少魅力あるいは特に魅力を感じている)に回答している割合が順に73%、67%、90%、84%、78%であった。特に質問③の南九州大学の「食・緑・人」に関する研究、人材育成への魅力度が高いことが分かった。
- 管理栄養学科における教育研究に対する質問に対しては、すべての項目で平均値が4.0以上となっていることから、「管理栄養学科」の教育研究に対する魅力度が高いことが分かった。その中で質問⑧「管理栄養士国家試験受験資格を取得できる」点への魅力が平均値4.73と引き続き高い魅力度となっていた。さらに質問⑩の「国家試験合格に向けた支援の充実、合格率100%を目指している」点への魅力が平均値4.62と管理栄養学科の国家試験対策に魅力を感じ、期待を持って入学してきていることが分かった。
- 質問⑩の「臨地・校外実習をカリキュラムに組み込んでいる」点への魅力も平均値が4.51と高い数値であった。卒後に活かせる現場での教育に魅力を感じていることが分かった。

### 【就職支援に対する設問】

- 就職支援に対する魅力度については、すべての質問項目で平均値が4.0以上となっていることから、就職支援に対する南九州大学の体制が整っており、その点に魅力を感じていることがうかがえる。

- ・ 質問③「Uターン就職」については平均値が 4.03 となっているが、管理栄養学科は宮崎県内出身者の多い学科であることから、「宮崎県内の地元就職に対する魅力度」について質問を設けてもいいかもしれない。

#### 【学習・生活支援に対する設問】

- ・ 質問⑤⑥⑧⑨以外は平均値が 4.0 以上であった。その中で質問④「生協売店・生協食堂の充実」に対する平均値が 4.54 と特に高かった。また、質問①②の「大学の学生支援課や図書館の充実」にも 8 割以上が 4 あるいは 5（多少魅力あるいは特に魅力を感じている）に回答していることから、南九州大学の学習・生活支援に対する体制やサポートに魅力を感じていることが分かった。
- ・ 質問⑤については例年同様どちらでもないとの回答が最も多く、平均値も設問項目の中では一番数値が低かった。管理栄養学科では地元宮崎県出身者が多いため、このような結果となったと考えられる。質問内容や選択項目の見直しが必要と考える。

#### 【施設・設備に対する設問】

- ・ 質問②で平均値が 3.84 でそれ以外はすべて 4.0 以上となっていることから、南九州大学における施設・設備におおむね魅力を感じていることが分かった。特に質問④スクールバスの運行や広い駐車場・駐輪場の完備について平均値が 4.37 と高かった。管理栄養学科では地元宮崎県出身者が多いため、車で通学している学生が多く、入学してきた 1 年生も車通学を考慮しており、対応できる広い駐車場が完備している点に魅力を感じたのではないかと考えられる。また質問③「キャンパスが清潔で機能的、快適である」の平均値が 4.33 と例年同様高く、管理栄養学科が設置されている宮崎キャンパスは開設 10 年以上経つがキャンパスの維持・管理が行き届いていることがうかがえる。
- ・ 質問①「最先端の機器を導入した実験施設の充実」に対しても平均値が 4.24 と高くなっており、入学後すぐに開講される実験などを行う環境が充実していることがうかがえる。
- ・ 質問⑥「休憩時間中にすごせる憩いの場の充実」でも平均値が 4.21 と高くなっていることから、入学後のキャンパスライフに魅力を感じ、期待を持って入学してきていることが分かった。
- ・ 質問②については平均値が例年同様 4.0 以下であることからインターネット環境、特に Wi-Fi 環境の充実が必須かと思われる。

## 12. 卒業生満足度調査報告

#### 【教育研究に対する設問】

- ・ 質問①から⑤までが「南九州大学」の教育研究に対する満足度調査であり、質問⑥から⑩までが「管理栄養学科」の教育研究に対する満足度調査であった。
- ・ まず「南九州大学」の教育研究に対しては質問①の平均値が昨年に引き続き 4.0 以上（4.03）であったことから、南九州大学の「豊かな自然と温和な気候に恵まれた南九州の環境」で勉学に励めたことに満足していることが分かった。

- ・ 質問②～⑤については、平均値がすべて 3.5 以上となっており、その中でも質問③「専門分野における社会に貢献できる人材育成」や、質問④「教員の質」については 75%以上が 4 あるいは 5（多少魅力あるいは特に魅力を感じている）に回答していた。
- ・ 次に管理栄養学科の教育研究に対しては、質問⑩の「現場で職業体験ができる臨地・校外実習がカリキュラムに組み込まれていること」への満足度が 4.27 と高い数値となっており、大学での座学や実験実習だけでなく実際に現場で学べたことに満足していることが分かった。それ以外の質問ではすべての項目で平均値が 3.50 以上であった。次年度はすべての項目で平均値が 4.00 以上になるよう、教員一同研究教育に励んでいきたい。

#### 【就職支援に対する設問】

- ・ 質問③⑤以外は平均値が 3.5 以上であった。質問③の「地元への U ターン就職へのサポート」に対しては昨年同様 4 割以上が 3（どちらでもない）に回答しており、宮崎県内出身者が多いことが原因と考えられる。管理栄養学科では地元出身の学生が多いことから、今後質問内容についても検討が必要と思われる。また質問⑤の「インターンシップ制度の充実」に対しても昨年同様 4 割以上が 3（どちらでもない）に回答しており、本学科ではインターンシップ制度を殆ど利用していないため、このような結果となったと思われる。この質問に関しても検討が必要と思われる。
- ・ 【就職支援に対する質問】に関する質問項目については、管理栄養学科独自の質問内容に変更する必要があると思われる。

#### 【学習・生活支援に対する設問】

- ・ 質問④の生協売店・生協食堂の学生生活の支援に対して、昨年同様平均値が 4.0 以上 (4.33) であったことから、学生にとって学生生活を送るうえで、日頃よく利用する場については満足度の高いものであることが分かった。
- ・ 例年同様、特に平均値が低かったのは質問⑤の下宿の斡旋に関するもので、回答が 3 の「どちらでもない」が 6 割以上を占めていた。管理栄養学科では地元出身の学生が多いことから、今後はこの質問については検討が必要と思われる。その他の質問項目でほとんど平均値が 3.50 前後であった。

#### 【施設・設備に対する設問】

- ・ 質問④⑤以外は平均値が 4.0 以上となっており、南九州大学の施設・設備に対しておおむね満足していると思われる。特に質問③の平均値が昨年に引き続き平均値が 4.36 と高かったことから、「清潔で機能的で、また快適な校舎で学生生活が送れる」点に大いに満足していることが分かった。学生にとって清潔できれいな校舎は魅力度調査においても数値が高かったことから、今後も一層施設・設備の維持、充実に努めていく。

### (5) 管理栄養学科の新入生魅力度・卒業生満足度調査結果分析

①新入生魅力度調査（平成 24 ・ 25 ・ 26 ・ 27 年度）

②卒業生満足度調査（平成 27 ・ 28 ・ 29、30 年度（今年度））

これらのデータを活用し、特に管理栄養学科における研究教育面に対する入学時の魅力度と卒業時の満足度のギャップを分析した。「5：特に魅力を感じる、4：多少魅力を感じる」に回答した学生の割合（％）の変動を示した。

【4ヶ年集約】 ▼\*：20%以上割合が低かったもの

設問	新入生魅力度	卒業生満足度
①勉学に励める環境（豊かな自然と温和な気候）	68	81
②創造性に富み、人間性と社会性豊かな人間の育成	61	60
③社会に貢献寄与できる人材の育成	83	77
④優れた教育研究業績および現場経験を持つ教員による教育	76	78
⑤最先端の研究ができる	70	54▼*
⑥人生観、世界観を考える社会性と人間性を備えた人材の育成	71	64
⑦専門性を兼ね備えた管理栄養士の育成	81	75
⑧国家試験受験資格を取得できる	93	82
⑨栄養教諭免許を取得できる	82	58▼*
⑩臨地・校外実習の充実	88	89
⑪現場を知る教授陣による学修	83	76
⑫宮崎に貢献できる人材育成	73	67
⑬臨床栄養のスペシャリストとしての知識・技能の習得	82	65▼*
⑭国家試験対策の充実	87	78
⑮充実した研究室の設置	84	73

・「入学時の期待」値を上回っている項目が複数あり、多くの項目で大幅な減少が見られなかったことから、学生の期待に概ね応えられていることが分かった。

・特に下回った項目“栄養教諭免許取得”に関しては、学内審査を経た学生が授業を受講するため、すべての学生を対象とした設問内容ではないため、このような結果になったと思われる。

【H27 入学-H30 卒業】 ▼\*：20%以上割合が低かったもの

設問	新入生魅力度	卒業生満足度
①勉学に励める環境（豊かな自然と温和な気候）	80	78
②創造性に富み、人間性と社会性豊かな人間の育成	71	60
③社会に貢献寄与できる人材の育成	90	75
④優れた教育研究業績および現場経験を持つ教員による教育	78	76

⑤最先端の研究ができる	76	55▼*
⑥人生観、世界観を考える社会性と人間性を備えた人材の育成	78	66
⑦専門性を兼ね備えた管理栄養士の育成	86	75
⑧国家試験受験資格を取得できる	94	80
⑨栄養教諭免許が取得できる	87	58▼*
⑩臨地・校外実習の充実	97	86
⑪現場を知る教授陣による学修	95	80
⑫宮崎に貢献できる人材育成	83	63▼*
⑬臨床栄養のスペシャリストとしての知識・技能の習得	87	70
⑭国家試験対策の充実	92	67▼*
⑮充実した研究室の設置	90	72▼*

・今年度卒業した学生の入学時の魅力度と卒業時の満足度を対比させてみた結果、多くの項目で「入学時の期待」値を下回っていた。これらの結果を重く受け止めて、学科内で話し合い、より良い教育を学生に提供できるよう一丸となって取り組んで行く必要がある。

・昨年度の分析（2ヶ年集約データ）ではおおむね期待に応えられていたことから、今年度の結果が【4ヶ年集約】の結果に大きな影響を与えたことが考えられる。毎年変わらず学生の「入学時の期待」に応えられるよう、学科での組織的な取り組みや、各教員においても授業評価アンケートを参考にしながら、改善策を考え、教育に励む必要がある。

## 12. 後期授業参観報告

（対象授業）

授業①： 生地 暢 教授 1月11日（金） 1,2,3,4限 1603 教室  
生化学実験

授業②： 村上 眞珠美 准教授 1月18日（金） 1,2,3,4限 1115、1117 教室  
臨床栄養学実習 I

（参観者）

授業①： 3名

授業②： 3名

（課題）

- ・ 昨年度より参観者数が減った。金曜日は4つの実験・実習が並行して行われていることも原因の一つと考えられる。教授会・学科会議等での周知は出来ているが、参観日当日にメール等で呼びかけ、学科内での参加促進を図る必要があると考える。
- ・ 前期・後期での授業評価アンケート結果から所見報告書を作成しているが、そのうえで授業参観の目的を明確化するとともに、授業参観できる環境（時間）を整える必要があると考

える。

- ・ 実施後のアンケートにより、それぞれ「授業の長所」に言及した上で「参考になった点」や「参観した授業の改善に参考となる意見（アドバイス）」について意見が寄せられ、授業参観を通じてお互いの教育力向上の機会になったと考えられる。

## 【 食品開発科学科 】

### 1. 入学前教育（リメディアル教育）の実施

入学予定の新入生が、入学後に学習をスムーズに開始できるようにすることを目的として、入学手続者を対象に、生物・化学・数学・食品学・食品科学英語の分野に関する課題に解答後、提出してもらいリメディアル教育を学科全教員が実施している。提出された解答については、学科教員がコメントを添えて各自に返却している。

### 2. カリキュラムの検討

学科教育の根幹をなすカリキュラムの見直しは年間を通じて適宜行っている。特に、専門科目の配当年次や開講科目の検討については十分な時間をかけて行っている。食品開発科学科の名称にふさわしいように、食品開発関連の実習授業を充実させることで実学教育の強化を実施した。来年度に向けて一部の科目の開講年次または開講期を変更し、より効果的な学習が可能となるように変更を加えた。

### 3. 学年別ガイダンスの強化

各学年での大学生活や卒業後の職業生活への展望を明確に持たせるために、前期・後期の開始時に学年別ガイダンスを実施している。これにより、各自で履修状況や資格取得などに関する意識付けを行うことを可能にし、より有意義な大学生活を送ることができるようにしている。

### 4. 怠学者および成績不良者に対する緻密な指導

授業出欠管理の徹底と教員間における情報の共有により、問題を有する学生に対して、指導教員を中心にきめ細かな指導を実施している。

### 5. レポート作成支援の為の「レポート工房」の運営

実験授業等で提出が必要なレポート作成に対して、「レポート工房」に設置したパソコンを用いて、1年次の食品基礎実験、食品微生物学実験などの授業において、作図や表計算プログラムの効率的な使用方法を指導している。パソコンとプリンタの導入台数は毎年増やしているため、学生の利便性も更に増し、使用頻度は着実に増加している。30年度は、Windows 3台、Mac 3台のパソコンを設置した。インターネットには繋げていないが、実験実習授業のレポート作成や発表用の資料作成のために活用している。これまでに化学構造式を描く際に有用なソフトウェア”

ChemDraw”及び描画ソフトの”Illustrator”を導入し、実験レポートのレベル向上に一役買っている。また30年度は新たに、大半の学生が所有するiPhoneで撮影したデータを、Air Dropなどを使って共有することも可能になった。この「レポート工房」の使用に当たっては学生の自主性を尊重しているが、使用時間帯を定めていること、使用簿に記録する等の一定の規則を決めて運用している。

#### 6. 授業改善の為の設備充実

アクティブラーニングを推進するべくiPadの導入を実施した。これにより、授業の理解や学修意欲だけでなく、調べ学修における検索キーワードの選択能力アップ、グループディスカッションなどを通して身につけたスキルは就職活動や社会人でも役立つと考えられる。

#### 7. 3年前期からの研究室配属

早期に研究室へ配属させることにより、専攻生への手厚い指導・支援を可能にしている。また、研究室の大学院生や4年生のアドバイスを得ながら、2年間じっくりと高度な専門的知識・技術を習得できることも利点である。

#### 8. 資格取得・就職支援の充実

食品開発科学科はフードスペシャリストと健康食品管理士の養成校認定を受けている。「応用食品学演習」においては、上記の資格を含む各種資格取得に繋がる教育を実施している。また、例年11月から12月にかけて実施される認定試験に向けて、後期授業の開始とともに受験希望者に対してカリキュラム時間外での受験対策講座を実施している。就職支援に関しては、1年前期に「キャリア入門」を開講するとともに、3年後期に「キャリアフォーメーション」を3年生全員の出席を前提とした授業として開講し、就職課と連携して学生のキャリア形成と就職支援を実施している。

食品開発科学科では、食品製造現場の現状に沿った実践力を養成するため、来年度からのHACCP管理者養成プログラム開講へ向けた準備を行った。具体的には、他大学や民間企業等で既に導入されているHACCP教育プログラムについての情報を収集し、学科の教員で構成されるHACCP教育ワーキンググループ会議で、「HACCP管理者資格（一般社団法人日本食品保蔵科学会）」認定制度を食品開発科学科へ導入することを決定した。

その後、学科教員が、HACCPワークショップの受講およびHACCP管理者認定審査（基礎科目認定）を経て、「HACCP管理者資格」を取得した。また、12月に開催されたHACCP委員会認定講師講習会での試験（模擬授業）に合格し、「HACCP講師」としての認定を受けた。

このことにより、来年度から新たに、食品開発科学科に「HACCP管理者資格」を取得するための教育プログラムを導入することとなり、本学科に在籍している学生は、所定科目の単位取得により、3年次の12月に、この資格の認定を受けることができるようになった。

#### 9. 高校・農業大学校との連携

前年度に引き続き、宮崎農業高校との連携を積極的に行い、相互の教育に係る連携・交流を通して、学生の視野を広げ、教育の活性化を図っている。今年度は、南九州大学において、体験入学を実施した。

また、日南振徳高校とは、今年度から新たな形での連携を結んだ。そして、6月に計3回にわたり、宮崎南高校の生徒たちが、本学宮崎キャンパスにおいて「ヒトの常在細菌の分離と培養」というテーマで研修を実施した。さらに、宮崎県立農業大学校との連携活動の一環として、農業大学校フードビジネス専攻の正課必修授業を本学宮崎キャンパスで実施した。

## 10. 企業との連携

平成30年5月24日(木)に、食品開発科学科3年生対象の「食品開発実習Ⅱ」の授業として、有限会社らいふのぱんから特別講師を招聘し、「ドイツのソーセージ作り」を実施した。今後、当学科の学生たちが食品開発分野の学びや実習を行っていく上で参考となる、大変有意義な講義となった。また、11月13日(火)には、2年生対象の「食品開発実習Ⅰ」の特別講師による授業のひとつとして、御菓子のさとうの佐藤達夫社長の指導による和菓子作り(ねりきり)の実習を行った。受講生達は、大変興味を持って、カラフルな和菓子作りを行った。学生たちの地域食品産業への関心や食品開発への関心を高める良い機会となった。

食品開発科学科3年生は、8月から9月にかけて、夏季集中講義の実学教育の一環として、宮崎県食品開発センター(3名が受講)、沖縄県豊見城市の忠孝酒造株式会社(1名が受講)、有限会社らいふのぱん(1名が受講)において、食品製造学外実習を行った。参加した学生にとって、通常の授業等では経験できない現場での貴重な体験をする機会となった。食品開発科学科2、3年生対象の「食品開発実習Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ」の授業や卒業論文研究として、鹿児島県錦江町の浜田農園(ワイン)、田野町(機能性茶)、高千穂町(米粉の加工)、洋菓子店(へべすケーキ等)と学生も交えて共同開発を行い、学生が6次産業化や地域食品開発、地域ニーズ等を理解するのに役立てた。

## 11. 各種地域イベントへの積極的な参加

地域における食品開発の学科としての存在感を高めるために、花と音楽とスイーツの祭典、みやざきテクノフェア、ボンベルタ販売会、宮崎県立図書館での実験授業などの地域イベントに参加した。展示ブースには中学生や高校生をはじめとする多数の見学者が詰めかけた。食品開発科学科の教育・研究内容のパネル展示による紹介、学科の学生によるパンフレット配布や来訪者への南九州大学の紹介を行い、お子様から中・高校生、企業担当者、一般参加者まで、幅広い年齢層の地域住民の皆様に理解していただくことができた。宮崎県立図書館での実験授業では、教職課程の学生が中心となって模擬授業を行い、小学生を含めた家族連れが参加し、子供たちの関心も深めることができた。今後社会人となる当学科の学生たちにとっては大変貴重な機会となった。

## 12. 学科主催卒業祝賀会の実施

卒業生の門出を学科教員で祝福することを趣旨とする学科主催の卒業祝賀会を卒業式の終了後

に実施している。卒業生による思い出や感謝の気持ちを表明する機会となり、学科教員からのひとことや保護者代表による挨拶および在学生代表からの贈る言葉など、卒業式の厳粛な雰囲気とは異なるアットホームな雰囲気で卒業生を送り出すイベントとして、学科では定着している。

### 13. 学年を超えた学生同士の交流促進

学科内で学生同士の学年を超えた交流を促進する各種交流イベントを実施しているが、今年度は、ドッジボール大会を開催した。各学年が試合を楽しみながら、試合の合間に自己紹介などをして親睦を深めた。

### 14. 「食事体験実習」をフレッシュマンアワー授業として実施

平成 30 年 7 月 3 日（火）に食品開発科学科 1 年生対象のフレッシュマンアワー授業の一環として、フェニックス・シーガイア・リゾートにおいて食事体験実習を行った。この実習の目的は、一流シェフの料理を味わいつつ、テーブルマナー講習を受講しながら、地元産の食材に触れ、食の素晴らしさと有り難みを体感することである。

学生たちはシーガイアの専門スタッフより、接客する際のポイントを聴いた後、コース料理（フレンチコース）を一品ずつ配膳され、料理担当スタッフの方から食材などについて説明を受けた。接遇マナー、テーブルマナー、食材に関する講習など、食品開発科学科の学生として、ぜひ身につけてほしい講習内容であった。

### 15. 平成 30 年度公募による卒業研究テーマ成果発表会への参加

高等教育コンソーシアム宮崎主催の上記の発表会への学生の参加を学科で勧めており、今年度は食品開発科学科から、2 研究室がポスター発表に挑んだ。残念ながら入賞は逃したが、学生たちにとって、他大学の学生のレベルを知る良い機会となり、今後の勉学にとって良い刺激となった。

### 16. 留学生のインターンシップサポート

食品開発科学科には、平成 28 年度に 2 名、平成 29 年度に 1 名、平成 30 年度に 1 名のベトナムからの留学生が入学し、平成 31 年度においても 2 名の留学生が入学予定である。学科として教員による留学生の支援体制を確立するとともに、日本人学生によるサポートも必要不可欠であることから、学生を交えた留学生受入体制をこれまでに整備し実行してきた。

平成 30 年 10 月に有限会社渡邊酒造場（宮崎市）において留学生の 3 年生 1 名が、焼酎製造の研修（焼酎製造、検品など）を行った。この学生は、いも焼酎造りに大変興味を持っており、ベトナムのナムディン省の農政担当者からも期待されている。卒業後は本学の大学院に進学し、その技術をベトナムに広げたいという夢を持っている。

### 17. スチューデント・アシスタント (SA) 制度の整備

学長裁量費による教育改革案として SA 制度の導入案が採択され、一部の学生を SA に任命し、授業補

助 SA(実験・実習授業の準備・後片付けの補助作業の実施, 授業中のごく簡単なアドバイス等)と留学生補助 SA(留学生の学習・日本語補助)を実施した。SAを担当する学生と補助を受ける学生の双方にとって大きな波及効果を与えている。

#### 18. ラーニングコモンズによる学習支援の試行

本館 5 階食品開発科学科事務室前の廊下スペースに、高鍋キャンパス廃棄備品の机・椅子を設置した。授業時間外に勉強している学生グループに対して、近くを通る教員から話しかけてもらうなど、教室とは異なる自由な環境づくりを行っている。

#### 19. 卒業論文発表会の開催

平成 31 年 2 月 20 日(水)に、食品開発科学科の 1 年生から 4 年生全員が参加し、卒業論文発表会を開催した。4 年生は、約 1 年間実施してきた卒業研究の集大成として、口頭またはポスターで成果を発表した。

1 年生から 3 年生は、先輩たちの研究を知ることのできる絶好の機会となり、今後は、後輩たちが研究テーマを引き継ぎ、卒業研究のさらなる活性化が期待される。

#### 20. 授業評価アンケート

平成 30 年度前期 授業評価アンケート 集計結果分析

(1) 平成 30 年度前期 授業評価アンケート実施科目

教員名	科目名	学年	回答者数
山下博	食品加工学	2	36
寺原典彦	有機化学総論	1	36
外山英男	フードスペシャリスト論	2	40
紺谷靖英	微生物学	1	42
中瀬昌之	食品学Ⅱ	2	43
岡崎善三	食品開発科学概論	1	40
矢野原泰士	パン・菓子製造学	2	11
		合計	248

(参考) 平成 29 年度前期 授業評価アンケート実施科目

教員名	科目名	学年	回答者数
山下博	食品の官能評価・鑑別論	3	28
寺原典彦	有機化学総論	1	41

外山英男	フードスペシャリスト論	2	19
紺谷靖英	微生物学	1	43
中瀬昌之	食品学Ⅱ	2	30
岡崎善三	食品開発科学概論	1	39
矢野原泰士	パン・菓子製造学	2	15
		合計	215

(2) 平成 30 年度前期 アンケート結果

設問番号	回答欄					回答数 (人)	平均値	
	5	4	3	2	1			
①	163	51	29	4	1	248	4.50	
②	37	60	102	22	27	248	3.23	
③	44	81	98	21	3	247	3.57	未回答 1
④	96	72	46	22	10	246	3.90	未回答 2
⑤	99	80	48	12	7	246	4.02	未回答 2
⑥	166	53	25	2	1	247	4.54	未回答 1
⑦	94	88	52	8	5	247	4.04	未回答 1
⑧	114	92	31	9	2	248	4.24	
⑨	67	99	63	13	5	247	3.85	未回答 1
⑩	113	94	36	3	1	247	4.28	未回答 1
⑪	79	104	54	8	2	247	4.01	未回答 1

(参考) 平成 29 年度前期 アンケート結果

設問番号	回答欄					回答数 (人)	平均値	
	5	4	3	2	1			
①	141	47	18	9	0	215	4.49	
②	13	40	93	39	29	214	2.86	未回答 1
③	22	53	97	31	12	215	3.20	
④	81	74	42	17	1	215	4.01	
⑤	69	75	57	12	2	215	3.92	

⑥	139	55	21	0	0	215	4.55
⑦	72	91	43	6	2	214	4.05
⑧	96	79	34	4	1	214	4.24
⑨	32	106	62	12	3	215	3.71
⑩	70	83	51	8	3	215	3.97
⑪	52	98	53	8	4	215	3.87

未回答 1

未回答 1

各学期のアンケート結果

設問 1. 私はこの授業によく出席した。

昨年と、ほぼ同じであった。今後も引き続き、学科教員間で学生の出欠状況の情報共有を行い、早い段階で怠学者の抽出を行い、指導教員を中心に対応していく。

設問 2. 私は授業内容について質問や発言をした。

平均値が 3.23 と前年より上昇した。今後も、各教員が質問可能な時間帯を設けたり、学生が自主的に質問しやすい雰囲気作りをしたりするなど双方向性の授業形態に向けて更なる努力が必要である。

設問 3. 私はこの科目に積極的に取り組んだ（予習や復習をした）。

平均値が 3.57 と前年より上昇した。学生に対して、さらに自学自習の習慣を定着させる必要がある。

設問 4・5・6・7・8 は教員の授業実施方法に関する質問である。

平均値が 3.90－4.54 と前年よりも上昇した。概ね良好であり、同一科目が対象ではないが、高い値を示している。

設問 9. 私はこの授業内容を理解できた。

平均値が 3.85 と前年より上昇した。今後も、学生の理解度を増すための教員側の努力の継続が必要である。

設問 10. 将来役に立つと感じた。

平均値が 4.28 となり前年より上昇し、前回より改善がなされていた。今後も、学生の立場から見て、学科で設定している科目群及び授業内容の更なる改善を継続していくことが必要である。

設問 11. 満足度

平均値が 4.01 で前年より上昇した。引き続き、授業内容の改善を継続していくことが必要である。

平成 30 年度後期 授業評価アンケート 集計結果分析

(1) 平成 30 年度後期 授業評価アンケート実施科目

教員名	科目名	学年	回答者数
山下博	食品流通・消費論	2	31
寺原典彦	食品機能学	2	40
外山英男	生物学Ⅱ	1	23
紺谷靖英	栄養学Ⅱ	3	29
中瀬昌之	健康食品概論	2	26
岡崎善三	食品製造学	2	33
矢野原泰士	ニュートリゲノミクス	3	26
		合計	208

(参考) 平成 29 年度後期 授業評価アンケート実施科目

教員名	科目名	学年	回答者数
山下博	食品流通・消費論	2	25
寺原典彦	食品分析学	1	38
外山英男	生物学Ⅱ	1	10
紺谷靖英	栄養学Ⅱ	3	37
中瀬昌之	健康食品概論	2	25
岡崎善三	食品製造学	2	23
矢野原泰士	ニュートリゲノミクス	3	28
		合計	186

(2) 平成 30 年度後期 アンケート結果

設問番号	回答欄					回答数 (人)	平均値
	5	4	3	2	1		
①	109	64	22	13	0	208	4.29
②	33	57	76	32	10	208	3.34
③	40	81	58	23	5	207	3.62
④	81	73	37	14	3	208	4.03

未回答 1

⑤	86	81	28	10	3	208	4.14	未回答 1
⑥	116	66	17	7	1	207	4.40	
⑦	82	70	44	8	4	208	4.05	
⑧	90	69	41	5	3	208	4.14	未回答 1
⑨	63	91	41	10	2	207	3.98	
⑩	83	80	35	9	1	208	4.13	
⑪	68	87	40	9	4	208	3.99	

(参考) 平成 29 年度後期 アンケート結果

設問番号	回答欄					回答数 (人)	平均値	
	5	4	3	2	1			
①	107	53	19	6	1	186	4.39	
②	27	36	67	31	24	185	3.06	未回答 1
③	16	53	84	21	11	185	3.23	未回答 1
④	70	63	37	10	6	186	3.97	
⑤	75	65	31	14	1	186	4.07	
⑥	116	45	22	0	2	185	4.48	未回答 1
⑦	74	65	36	8	2	185	4.09	未回答 1
⑧	78	65	30	8	5	186	4.09	
⑨	38	76	57	10	5	186	3.71	
⑩	58	74	45	6	3	186	3.96	
⑪	54	73	48	5	6	186	3.88	

各学期のアンケート結果

設問 1. 私はこの授業によく出席した。

平均値 4.29 で、前年とほぼ同様に良好である。一方、回答番号 3 以下の割合が約 17% 存在し、前年度よりも僅かに上昇した。引き続き学科教員間で学生の出欠状況の情報共有を行い、早い段階で怠学者の抽出を行い、指導教員を中心とした対応を継続していく必要がある。

設問 2. 私は授業内容について質問や発言をした。

平均値 3.34 と前年より上昇した。前年度とほぼ同じで、設問中最も低い。各教員が質問可能な時間帯を設けたり、学生が自主的に質問しやすい雰囲気作りをしたりするなど双方向性の授業形態に向けてさらなる改善・工夫を継続していく必要がある。

設問 3. 私はこの科目に積極的に取り組んだ（予習や復習をした）。

平均値が 3.62 と前年より上昇した。今後も、学生に自学自習の習慣を身に付けさせるための更なる工夫が必要である。

設問 4・5・6・7・8 は教員の授業実施方法に関する質問である。

平均値が 4.03－4.40 と概ね良好であり、同一科目が対象ではないが、これまでの傾向とほぼ同様である。今後も、さらなる改善を継続していくべきと思われる。また、学年による学生の気質の変化も考慮していく必要がある。

設問 9. 私はこの授業内容を理解できた。

平均値が 3.98 と前年より上昇した。今後も、学生の理解度を増すための教員側の努力と工夫を継続していくことが必要である。

設問 10. 将来役に立つと感じた。

平均値 4.13 と前年より上昇した。学科で設定している科目群及び授業内容と学生の将来像が結び付くように提供する科目や授業内容をさらに改善していく必要がある。

設問 11. 満足度

平均値が 3.99 で、と前年より僅かに上昇した。1 または 2 と回答した学生が 13 人もいるが、この点については、今後詳しく調査する必要がある。見落としている課題が隠れている可能性がある。

## 21. 魅力度・満足度調査調査報告

### (1) 食品開発科学科の新入生魅力度調査報告

[教育研究に対する質問]

①あなたは南九州大学の「豊かな自然と温和な気候に恵まれた南九州の環境」で勉学に励めることをどの程度魅力を感じていますか。

②あなたは南九州大学の「創造性に富み、人間性と社会性豊かな人間を育成する」点にどの程度

魅力を感じています

- ③あなたは南九州大学の「食・緑・人に関する基礎的、応用的研究をすすめ、専門的分野において社会に貢献寄与できる人材を育成している」点にどの程度魅力を感じていますか。
- ④あなたは南九州大学の「優れた教育研究業績をもつ、あるいは優れた現場経験をもつなど、高い能力を持った教員による教育を受けることができる」点にどの程度魅力を感じていますか。
- ⑤あなたは南九州大学の「優れた研究環境のもと最先端の研究ができる」点にどの程度魅力を感じていますか。
- ⑥あなたは食品開発科学科が、「環境」を基礎に置きつつ、「緑、食、人」をキーワードとして教育を行っていることにどの程度魅力を感じていますか？
- ⑦あなたは食品開発科学科が、食品の開発・製造（美味しくつくること）に携わる専門家を育成するための教育研究を行っていることにどの程度魅力を感じていますか。
- ⑧あなたは食品開発科学科が、附属の実験施設やフィールドセンター等を活用した実学教育と少人数教育を行っていることにどの程度魅力を感じていますか。
- ⑨あなたは食品開発学科が、1年次に人間性と社会性豊かな教養を身につけるための「教養教育科目」を設置していることにどの程度魅力を感じていますか。
- ⑩あなたは食品開発学科が、1年次に農学の分野の専門職業人として必要とされる基礎的な知識と技術を身につけるための「専門基礎科目」を設置していることにどの程度魅力を感じていますか。
- ⑪あなたは食品開発学科が、専門的な方法論と知識を体系的に学ぶために「専門教育科目」を設置していることにどの程度魅力を感じていますか。
- ⑫あなたは食品開発学科が、幅広い知識を身につけるために、自分が目指す専門分野を超えて関心のある科目を履修できるように「専門選択科目」を設置していることにどの程度魅力を感じていますか。
- ⑬あなたは食品開発学科が、講義に加えて、演習や実験、実習の専門授業を数多く設置していることにどの程度魅力を感じていますか。
- ⑭あなたは食品開発学科が、3年次後期に全員の研究室配属を行い、身につけた知識や技術を駆使して、新たな問題の探求能力や解決能力を養成するカリキュラムを取っていることにどの程度魅力を感じていますか。
- ⑮あなたは食品開発学科が、4年次で卒業論文を学科の必須として、専門性を高めることとしていることにどの程度魅力を感じていますか。

【教育研究に対する設問】	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	⑪	⑫	⑬	⑭	⑮
5 特に魅力を感じている	4	3	5	5	5	7	8	7	9	7	9	3	10	10	10
4 多少魅力を感じている	15	18	18	14	12	11	14	12	13	11	11	13	13	8	12
3 どちらでもない	5	4	3	5	9	6	3	6	3	7	4	8	2	7	3
2 あまり魅力を感じない	2	1	0	2	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0
1 まったく魅力を感じていない	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0
未回答						2	1	1	1	1	1	1	1	1	1

設問①から⑮まで大半の学生が魅力を感じているという結果が得られ、学科の方向性は適切であると言える。また、設問①から⑮まで「まったく魅力を感じていない」と回答した学生はわずか1名（前年は3名）であった。また、学科のカリキュラムについても大半の学生が魅力を感じているようで、この点についても学科の方針は適切と思われる。

[就職支援に対する質問]

- ①あなたは南九州大学の「“就職課”があり、当該課の専門スタッフが就職活動支援をしてくれる」点にどの程度魅力を感じていますか。
- ②あなたは南九州大学の「将来の進路に関してのセミナー・ガイダンスや公務員・教員就職のための講座が充実している」点にどの程度魅力を感じていますか。
- ③あなたは南九州大学の「地元へのUターン就職に対して全力でサポートしてくれる」点にどの程度魅力を感じていますか。
- ④あなたは南九州大学の「各学科に関連する業界の求人情報を多く扱っている」点にどの程度魅力を感じていますか。
- ⑤あなたは南九州大学の「インターンシップ制度が充実している」点にどの程度魅力を感じていますか。

【就職支援に対する設問】	①	②	③	④	⑤
5 特に魅力を感じている	4	3	7	7	4
4 多少魅力を感じている	16	16	9	13	12
3 どちらでもない	5	5	9	5	9
2 あまり魅力を感じない	0	0	0	0	0
1 まったく魅力を感じていない	0	1	0	0	0
未回答	1	1	1	1	1

半数以上の学生が「魅力を感じている」と回答しているので、今後も継続して期待に応えられるように対応する必要がある。また、「どちらでもない」以下の回答をした学生に対して、原因の究明と改善が必要である。

[学習・生活支援に対する質問]

- ①あなたは南九州大学の「“学生支援課”があり、当該課の専門スタッフが学習支援（各種証明書発行・休講時連絡・アルバイト情報等）をしてくれる」点にどの程度魅力を感じていますか。
- ②あなたは南九州大学の「充実した蔵書・雑誌・新聞・視聴覚機器・閲覧スペース等のある図書館があり、学生の学習支援に役立っている」点にどの程度魅力を感じていますか。
- ③あなたは南九州大学の「“保健室・学生相談室”があり、当該室の専門スタッフが怪我・体調不良の治療や体調管理等に関する相談、大学生活に関しての悩み相談をしてくれる」点にどの程度魅力を感じていますか。

- ④あなたは南九州大学の「生協売店・生協食堂」があり、学生生活の支援充実をはかってきている」点にどの程度魅力を感じていますか。
- ⑤あなたは南九州大学の「下宿生を対象にした充実した寮やマンション等の斡旋がある」点にどの程度魅力を感じていますか。
- ⑥あなたは南九州大学の「課外活動（部活動、学友会、学祭実行委員会等）が充実していて楽しく思い出に残る学生生活を送れる」点にどの程度魅力を感じていますか。
- ⑦あなたは南九州大学の「毎年有意義な学校行事（大学祭等）が行われている」点にどの程度魅力を感じていますか。
- ⑧あなたは南九州大学の「充実した奨学金・特待生制度がある」点にどの程度魅力を感じていますか。
- ⑨あなたは南九州大学の「各学年の教員による担任制度があり、学習支援・学生生活支援をしてくれる」点にどの程度魅力を感じていますか。

【学習・生活支援に対する設問】	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨
5 特に魅力を感じている	5	6	3	11	3	4	5	9	3
4 多少魅力を感じている	16	13	14	9	7	12	12	12	15
3 どちらでもない	4	4	7	4	13	7	9	5	7
2 あまり魅力を感じない	1	3	2	2	2	3	0	0	1
1 まったく魅力を感じていない	0	0	0	0	1	0	0	0	0

ほとんどの学生が「魅力を感じている」と回答している一方で、さらに期待に応えられるようにしていく必要がある。設問⑤で「どちらでもない」以下の回答をした学生が半数以上（16名）おり、この点に対して改善が必要であると考えられる。また、設問③、⑥、⑦、⑨においても、「どちらでもない」以下の回答をした学生が多く存在するので、この点に対して、原因究明と改善が必要である。

#### 【施設・設備に対する質問】

- ①あなたは南九州大学の「最先端の機器を導入した実験室や実際の現場を想定した実習室（フィールドセンターを含む）が整備されている」点にどの程度魅力を感じていますか。
- ②あなたは南九州大学の「インターネット環境が充実し整っている（学内LANの充実、情報処理室の充実等）」点にどの程度魅力を感じていますか。
- ③あなたは南九州大学の「清潔で機能的で、また快適な校舎で学生生活を送れる」点にどの程度魅力を感じていますか。
- ④あなたは南九州大学の「通学に関して、スクールバスの運行や広い駐車場・駐輪場を有しており、通学に便利である」点にどの程度魅力を感じていますか。
- ⑤あなたは南九州大学の「体育館・グラウンドなどの運動施設やサークル活動の支援施設（クラブハウス）が充実している」点にどの程度魅力を感じていますか。
- ⑥あなたは南九州大学の「休憩時間中にすごせる憩いの場（食堂・中庭・学生ラウンジ等）が充

実している」点にどの程度魅力を感じていますか。

【施設・設備に対する設問】	①	②	③	④	⑤	⑥
5 特に魅力を感じている	5	4	10	10	8	7
4 多少魅力を感じている	13	11	12	9	10	13
3 どちらでもない	4	6	2	5	5	3
2 あまり魅力を感じない	0	4	2	2	1	1
1 まったく魅力を感じていない	1	1	0	0	1	1
未回答	3				1	1

ほとんどの学生が魅力を感じていると回答しており、ある程度期待に添えていると思われる。しかしながら、設問②、⑤において、「どちらでもない」以下の回答をした学生が多く存在するので、原因の究明と改善を行う必要がある。

## (2) 食品開発科学科の卒業予定者満足度調査報告

### [教育研究に対する設問]

- ①あなたは南九州大学の「豊かな自然と温和な気候に恵まれた南九州の環境」で勉学に励めることをどの程度満足しましたか。
- ②あなたは南九州大学の「創造性に富み、人間性と社会性豊かな人間を育成する」点にどの程度魅力を満足しましたか。
- ③あなたは南九州大学の「食・緑・人に関する基礎的、応用的研究をすすめ、専門的分野において社会に貢献寄与できる人材を育成している」点にどの程度満足しましたか。
- ④あなたは南九州大学の「優れた教育研究業績をもつ、あるいは優れた現場経験をもつなど、高い能力をもった教員による教育を受けることができる」点にどの程度満足しましたか。
- ⑤あなたは南九州大学の「優れた研究環境のもと最先端の研究ができる」点にどの程度満足しましたか。
- ⑥あなたは食品開発科学科が、食品製造者と消費者の両方の視点、および食に関する科学的知識と倫理を身につけた食品のスペシャリストを養成するための教育・研究を行っていることにどの程度満足しましたか。
- ⑦あなたは食品開発科学科が、食品の開発・製造（美味しくつくること）に携わる専門家を育成するための教育・研究を行っていることにどの程度満足しましたか。
- ⑧あなたは食品開発科学科が、食品の適正利用（正しく食べること）の専門家を育成する目的で教育・研究を行っていることにどの程度満足しましたか。
- ⑨あなたは食品健康学科が、食品の衛生（安全を守る）・機能性（体調調節）の専門家を育成するための教育・研究を行っていることにどの程度満足しましたか。
- ⑩あなたは食品開発科学科が、講義に加えて、実験・実習・学外インターンシップなどの授業を多く設置し、実践的能力を身につけるための教育を行っていることにどの程度満足しましたか。
- ⑪あなたは食品開発科学科において、フードサイエンスの基礎科目から食品の衛生・機能性に関

する基幹科目，食品の開発・製造および食品の適正利用に関する実学科目に至るまで体系的に組まれたカリキュラムに従って履修できることに，どの程度満足しましたか。

⑫あなたは食品開発科学科において，1～3年次に学んだ食品開発および食品利用のあり方を集約して，4年次に卒業論文，専攻演習に取り組むことができることにどの程度満足しましたか。

⑬あなたは食品開発科学科において，食品衛生管理者・食品衛生監視員の資格を取得できることにどの程度満足しましたか。

⑭あなたは食品開発科学科において，高等学校教諭1種（農業・理科），中学校教諭1種（理科）の資格を取得できることにどの程度満足しましたか。

⑮あなたは食品開発科学科において，フードスペシャリスト，健康食品管理士を始め，他の食品関連資格を取得できることにどの程度満足しましたか。

【教育研究に対する設問】	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	⑪	⑫	⑬	⑭	⑮
5 特に満足している	1	0	3	3	3	2	4	3	2	2	2	4	4	4	4
4 満足している	11	11	10	9	7	12	7	11	14	11	11	8	13	5	8
3 どちらでもない	10	9	8	7	7	5	8	8	6	5	7	7	5	13	8
2 あまり満足していない	1	1	1	3	5	2	3	0	0	4	2	3	0	0	1
1 まったく満足していない	0	2	1	1	1	2	1	1	1	1	1	1	1	1	2

設問①から⑮まで、「どちらでもない」と回答した学生が非常に多かった。この結果は、満足できた部分と、そうでなかった部分が混在していることを意味していると考えられ、学生たちが満足していない部分の究明と改善が必要である。

#### 【就職支援に対する設問】

①あなたは南九州大学の「就職課」があり，当該課の専門スタッフが就職活動支援をしてくれる」点にどの程度満足しましたか。

②あなた南九州大学の「将来の進路に関してのセミナー・ガイダンスや公務員・教員就職のための講座が充実している」点にどの程度満足しましたか。

③あなたは南九州大学の「地元へのUターン就職に対して全力でサポートしてくれる」点にどの程度満足しましたか。

④あなたは南九州大学の「各学科に関連する業界の求人情報を多く扱っている」点にどの程度満足しましたか。

⑤あなたは南九州大学の「インターンシップ制度が充実している」点にどの程度満足しましたか。

【就職支援に対する設問】	①	②	③	④	⑤
5 特に満足している	5	3	1	1	3
4 満足している	4	8	7	5	3
3 どちらでもない	10	7	12	12	11
2 あまり満足していない	0	3	1	2	5
1 まったく満足していない	4	2	2	3	1

設問①から⑤まで、「どちらでもない」以下の回答をした学生が多かった。学生たちの満足度を向上させるためには、どのような方法を取るべきかなどについて検討する必要があると思われる。

[学習・生活支援に対する設問]

- ①あなたは南九州大学の「“学生支援課”があり当該課の専門スタッフが学習支援（各種証明書発行・休講時連絡・アルバイト情報等）をしてくれる」点にどの程度満足しましたか。
- ②あなたは南九州大学の「充実した蔵書・雑誌・新聞・視聴覚機器・閲覧スペース等のある図書館があり、学生の学習支援に役立っている」点にどの程度満足しましたか。
- ③あなたは南九州大学の「“保健室・学生相談室”があり、当該室の専門スタッフが怪我・体調不良の治療や体調管理等に関する相談、大学生活に関しての悩み相談をしてくれる」点にどの程度満足しましたか。
- ④あなたは南九州大学の「生協売店・生協食堂”があり、学生生活の支援充実をはかってきている」点にどの程度満足しましたか。
- ⑤あなたは南九州大学の「下宿生を対象にした充実した寮やマンション等の斡旋がある」点にどの程度満足しましたか。
- ⑥あなたは南九州大学の「課外活動（部活動，学友会，学祭実行委員会等）が充実していて楽しく思い出に残る学生生活を送れる」点にどの程度満足しましたか。
- ⑦あなたは南九州大学の「毎年有意義な学校行事（大学祭等）が行われている」点にどの程度満足しましたか。
- ⑧あなたは南九州大学の「充実した奨学金・特待生制度がある」点にどの程度満足しましたか。
- ⑨あなたは南九州大学の「各学年の教員による担任制度があり，学習支援・学生生活支援をしてくれる」点にどの程度満足しましたか。

【学習・生活支援に対する設問】	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨
5 特に満足している	5	2	4	5	2	3	2	5	2
4 満足している	9	9	11	9	3	11	5	10	7
3 どちらでもない	7	9	8	6	14	8	11	7	10
2 あまり満足していない	2	2	0	2	3	1	4	1	1
1 まったく満足していない	0	1	0	1	1	0	1	0	2
未回答									1

設問①、③、④、⑥、⑧については、大半の学生が満足を示している。しかし、その他の設問に関しては、「どちらでもない」と回答した学生の数も多く、さらに改善が必要である。

[施設・設備に対する設問]

- ①あなたは南九州大学の「最先端の機器を導入した実験室や実際の現場を想定した実習室（フィ

ールドセンターを含む) が整備されている」点にどの程度満足しましたか。

②あなたは南九州大学の「インターネット環境が充実し整っている(学内 LAN の充実, 情報処理室の充実等)」点にどの程度満足しましたか。

③あなたは南九州大学の「清潔で機能的で, また快適な校舎で学生生活が送れる」点にどの程度満足しましたか。

④あなたは南九州大学の「通学に関して, スクールバスの運行や広い駐車・駐輪場を有しており, 通学に便利である」点にどの程度満足しましたか。

⑤あなたは南九州大学の「体育館・グラウンドなどの運動施設やサークル活動の支援施設(クラブハウス)が充実している」点にどの程度満足しましたか。

⑥あなたは南九州大学の「休憩時間中にすごせる憩いの場(食堂・中庭・学生ラウンジ等)が充実している」点にどの程度満足しましたか。

【施設・設備に対する設問】	①	②	③	④	⑤	⑥
5 特に満足している	4	6	9	7	4	2
4 満足している	5	10	8	5	4	8
3 どちらでもない	6	6	5	9	9	6
2 あまり満足していない	7	0	0	1	5	5
1 まったく満足していない	1	1	1	1	1	2

設問②、③、④については、大半の学生が満足を示している。しかし、その他の設問に関しては、「どちらでもない」以下の回答をした学生が多く、さらに改善が必要である。

(3) 食品開発科学科の平成 24・25・26・27 年度新入生魅力度調査と平成 27・28・29・30 年度卒業生満足度調査の前後比較

#### 【教育研究に対する設問】

新入生魅力度調査の結果が、卒業生満足度調査を上回った設問が 15 項目中 5 項目であった。特に設問①と⑫については、共に 9% の上昇が見られ、今後も、この点を伸ばしていく必要があると思われる。

設問⑤「優れた研究環境のもと最先端の研究ができる」は、「魅力を感じている」が 71% だったのが、「満足している」が 52% に低下している。また、設問⑦「食品の開発・製造(美味しくつくること)に携わる専門家を育成するための教育・研究を行っている」に関しては、「魅力を感じている」が 84% だったのが、「満足している」が 67% に低下した。これらの点については、新たな設備の導入など、改善を図っている段階である。

設問⑩「講義に加えて、実験・実習・学外インターンシップなどの授業を多く設置し、実践的能力を身につけるための教育を行っていること」に関しては、「魅力を感じている」が 79% だったのが、「満足している」が 62% に低下した。この点については、学外インターンシップへの参加を促すなど、改善を図っている段階である。

設問⑭「高等学校教諭 1 種(農業・理科), 中学校教諭 1 種(理科)の資格を取得できること」

については、「魅力を感じている」が64%だったのが、「満足している」が46%に低下していた。

#### [就職支援に対する質問]

全ての設問で、入学時と卒業時でのギャップが見られ、設問④「各学科に関連する業界の求人情報を多く扱っている」と、設問⑤「インターンシップ制度が充実している」については、「あまり満足していない」という回答が目立つ。これらの点を改善するためには、企業との連携などが必要である。

#### [学習・生活支援に対する設問]

設問⑤「下宿生を対象にした充実した寮やマンション等の斡旋がある」と設問⑦「毎年有意義な学校行事（大学祭等）が行われている」は、入学時と卒業時でのギャップが見られる。

#### [施設・設備に対する設問]

設問③「清潔で機能的で、また快適な校舎で学生生活が送れる」については、新入生魅力度調査の結果が、卒業生満足度調査を上回った。この点は、学生たちにとって重要であり、引き続き学生たちの満足度を維持していく必要がある。

設問①「最先端の機器を導入した実験室や実際の現場を想定した実習室（フィールドセンターを含む）が整備されている」と、設問⑤「体育館・グラウンドなどの運動施設やサークル活動の支援施設（クラブハウス）が充実している」について、入学時と卒業時でのギャップが見られる。

設問⑥「休憩時間中にすごせる憩いの場（食堂・中庭・学生ラウンジ等）が充実している」については、来年度から新たに学生会館（ひなた館）が竣工することもあり、改善されるものと思われる。

## 22. 参観授業報告

今年度の授業参観については、以下のような状況であった。

- ・学科会議で、2度周知を行い、学科教員の約半数が参加した。今後も学科内での参加促進を図りたい。

- ・2人の学科教員の授業で、それぞれ4名、3名の参加があった。実施後のアンケートにより、それぞれ「参観した授業の中で参考になった点」に加えて「授業の改善に参考となる意見（アドバイス）」についても多くの意見が寄せられ、担当教員にとって、貴重な意見が得られたと思われる。

## 【子ども教育学科】

### 1 全学FD活動について

#### (1) 学生授業評価アンケート実施と授業改善の取り組み

□アンケート集計結果

【前期：実施教員 15 名 回答数 466 名】（授業ごとの複数回答）

【後期：実施教員 15 名 回答数 531 名】（授業ごとの複数回答）

表1 全項目（①～⑪）平均値の年度別・前後期データ

（数字は、回答の平均値）

設問 番号	質 問 内 容	2017 前期	2017 後期	2018 前期	2018 後期
学生の授業取り組みに関する質問					
①	私はこの授業によく出席した	4.68	4.63	4.53	4.60
②	私は授業内容について質問や発言をした	3.37	3.26	3.74	3.36
③	私はこの科目に積極的に取り組んだ（予習や復習をした）	3.87	3.81	3.88	3.78
教員の授業実施方法に関する質問					
④	教員の声は聞き取りやすかった	4.37	4.47	4.42	4.32
⑤	教員の板書（またはPPT・配布資料等）は読みやすかった（見やすかった）	4.30	4.19	4.19	4.13
⑥	教員は授業の開始・終了の時刻を守ろうとしていた	4.56	4.71	4.52	4.57
⑦	教員は学生の反応を確かめながら授業を進めていた	4.39	4.49	4.35	4.24
⑧	教員は熱意を持って授業をしていた	4.53	4.63	4.46	4.45
総合的評価					
⑨	私はこの授業内容を理解できた	4.13	4.23	4.12	4.03
⑩	私はこの授業で学んだ内容はなんらかのかたちで将来役に立つと感じた	4.41	4.48	4.39	4.38
⑪	私は総合的に判断してこの授業で満足が得られた	4.28	4.38	4.25	4.21

表2 各項目の「特にそう思う」「多少そう思う」の占める割合(%)

(小数点以下は四捨五入により算出)

設問 番号	質 問 内 容	2017 前期	2017 後期	2018 前期	2018 後期
学生の授業取り組みに関する質問					
①	私はこの授業によく出席した	94	92	89	90
②	私は授業内容について質問や発言をした	43	36	57	42
③	私はこの科目に積極的に取り組んだ (予習や復習をした)	65	62	67	60
教員の授業実施方法に関する質問					
④	教員の声は聞き取りやすかった	84	88	85	81
⑤	教員の板書(またはPPT・配布資料等) は読みやすかった(見やすかった)	82	78	76	73
⑥	教員は授業の開始・終了の時刻を守ろう としていた	89	94	88	89
⑦	教員は学生の反応を確かめながら授業を 進めていた	85	87	83	78
⑧	教員は熱意を持って授業をしていた	91	92	88	86
総合的評価					
⑨	私はこの授業内容を理解できた	80	82	79	74
⑩	私はこの授業で学んだ内容はなんらかの かたちで将来役に立つと感じた	87	88	86	84
⑪	私は総合的に判断してこの授業で満足が 得られた	84	86	82	79

## □アンケート結果の分析

### 【全体的分析】

表1に示すように、今年度における学科教員の平均値が4ポイント以上の高い値を得た項目は、前年度同様全11項目中、前期後期ともに9項目を占めるため、全体としての授業評価は良好と見なすことができる。

次に、表2に示す「特にそう思う」、「多少そう思う」の占める割合についてみると、80%台以上の項目は、11項目中、前期で7項目、後期は5項目あり、同様に良好ととらえることができよう。前年度と比較すると、全体的に微小な減少が見られるが、有意差とは言えない。

以上のように、表1及び表2の結果を前年度と比較すると、教員に対する授業評価は、前年度

とほぼ同等の結果となった。前年度の高い水準を維持できた点は評価できるが、今後は個々の反省事項を踏まえて、教員各自がさらなる授業改善に当たっていく必要もある。

注目したいのは、各項目の中でも「学生の授業取り組みに関する質問」である、項目②「質問や発言」のポイント（下線）が、前年度に比べて前期後期ともに上昇していることだ。このことは、学生の能動的な授業参加が実現しつつあることを意味する。国が進める大学教育の改革の一つであり、教育方法の質的転換でもある「アクティブ・ラーニング」（学生の能動的な活動を取り入れた授業や学習方法）を実践してきた成果と言えよう。

このように、項目②は数値が上昇したが、項目③「予習や復習」とともに、多項目に比べるとまだ低いため、満足のいく結果とは言えない。今後も、学生と教員が双方向に向き合い、かつ学生が能動的に参加し、参加したくなる授業展開の在り方を工夫し、授業の質向上に努めていく必要がある。

以下は、昨年度と本年度における、前期、後期それぞれについての概括的な分析である。

#### 【前期について】

○表1から見えてくること

前年度前期と比較して、全11項目の平均値は、ほぼ同等であった。前述したように、項目②「質問や発言」が0.4ポイント近く上昇していることから、学生の授業参加における能動性が増していることが分かる。

○表2から見えてくること

前年度前期と比較して、全体的に変化が見られないなか、項目②「質問や発言」が14%も上昇し、多項目に比べても目立って高い上昇率となった。逆に、⑤「教員の板書（またはPPT・配布資料等）の読みやすさ・見やすさ」が6%減少し、最も大きく減少した項目となった。学生の能動性は向上した一方で、教員側の板書や資料の不明瞭さが増してきたことが分かる。前者は本年度に向けた授業改善の成果といえるが、後者についてはより一層の改善が望まれる。

#### 【後期について】

○表1から見えてくること

前年度後期と比較して、10項目の平均値がわずかに減少したが有意な差とは言えない。反対に、上昇した項目は項目②「質問や発言」であり、前期ほどではないが0.1ポイント上がった。この点は、学生自身の主体性に関わる部分であり、数値を上げるのは容易ではないが、前年度の改善事項の課題を踏まえ、各教員が授業改善に取り組んだ成果が数値として表れた結果であるといえる。

○表2から見えてくること

前年度後期と比較して、全11項目の割合が高くなった項目は②「質問や発言」であり、6%上昇している。一方、⑦「教員は学生の反応を確かめながら授業を進めていた」が9%、⑨「私はこの授業内容を理解できた」が8%減少した。この⑦と⑨は関連し、学生が理解できているか教員が十分な確認をせずに授業が進められたため(⑦)、学生が授業内容を理解することができない結果となった(⑨)、と解釈することができる。学生の能動性を上げることはできたが、一方で学生の理解の状況を把握しないまま授業が進められ、授業理解に関して十分な満足の得られない結

果となった。上昇した②については、これからの課題に対する授業改善の取り組み次第で、さらなる増加が見込める一方、⑦と⑨に関しては、学生の理解度を確認しながら丁寧に授業を進めるといった各教員の一層の努力が必要であるといえる。

## (2) 参観授業の実施

本学科の今年度の参観授業は、若宮邦彦教授及び趙雪梅准教授の二人によって下記の通り実施された。

### ・若宮邦彦教授

実施日：1月17日(木) 科目名：社会福祉

受講学年：1年、32人 教室：都城キャンパス(1107)

参観者は2名で、それぞれ教職教養センターのFD推進委員会委員および子ども教育学科の一般教員であった。

### ・趙雪梅准教授

実施日：1月10日(木) 科目名：算数

受講学年：2・3年、44人 教室：都城キャンパス(小児保健実習室)

参観者は、子ども教育学科FD推進委員会委員1名を含む3名であり、一般教員の参観者は子ども教育学科および環境園芸学科からの1名ずつであった。

今年度の子ども教育学科の参観者数は計5名で、昨年度の計2名に比べると2倍以上に増えたが、学科教員数の3分の1に届かなかった。全学的にも昨年度に比べて参観者数が減少しており、参観のための提供コマ数が少なかった影響も考えられる。子ども教育学科の場合提供された2科目2コマの時間帯に各自のスケジュールを合わせることが容易ではなかったことが大きな要因として挙げられる。

他の教員の授業を参観することは、自らの担当する授業の内容や方法の改善に役立ち、学科全体の教育活動のレベルアップにつながる。今後は、全学的な計画の組み方を再考し、参加しやすい形態を検討することが必要だと思われる。

## 2 学科独自のFD活動について

### (1) 学科内FD研修会の実施

学科内FD研修会を、2018年11月30日(金)14時～14時45分の日程で、子どもの学び研究所において実施した。

研修内容としては、学科新任教員である鳴海正也講師による研究内容の紹介を主とした。

研究内容の概要は、以下の通りである。

[テーマ] 今日の教育課題としての特別支援教育

[概要]

特別支援教育が制度化されて15年この間多様な制度改変や法整備の中で特別支援教育が学校の

中ではかなり位置づいてきた。しかし、目標である共生社会の実現が、達成されるには長い道のりがあるといえる。そこで、この15年を鳴海の著作に引き寄せて説明しようとした。

特別支援の最も表面上目立った点は、発達障害と言う支援のはざまに残された障害者たちに光をあてたことである。よってこの15年間の前半5年間は発達障害というものの理解や支援体制の構築に大半の力がそそがれたと言えよう。そのために、個々の障害に対するアセスメントや支援方法に関する著作が中心となったことを明らかである。中期の5年間は、支援の方策が国や地方公共団体から出され「通級指導教室」や「支援学級」の運営や実態に関する著作が中心となった。後期の5年間は、今までの枠には合わない「気にかかる」と呼ばれることが多い普通学級に在籍する支援を必要とする子どもに焦点を当てた著作が増加する。

このような流れの中で、特別支援教育は単に障害を持つ子どもだけを対象にするのではなく個別のニーズを持つ多様な子どもに対する教育へと変貌していく。それに伴って「合理的な配慮」と言った多くの教育場面で適応される概念を広げていくことになるということ述べた。質疑応答が多く教員から出たことから、特別支援が広い範囲での教育課題となっていることがうかがわれた。

## (2) 「子どもの学び研究所」「子育て支援センター」「子育てひろば(みなみん)」「環境教育センター」の活動について

学部附属の「子どもの学び研究所」、「子育て支援センター」、「子育てひろば(みなみん)」、「環境教育センター」では、現場教師との共同研究や、地域の親子への子育て支援活動、更に学生も参加しての研究活動などそれぞれにおいて柱となる活動が展開されている。2018年度の活動内容の詳細は『南九州大学人間発達研究』第9巻に報告されているが、どの活動も大学教員としての教育力量を向上させることに、直接的、間接的に貢献するものである。

## (3) 学生への支援について

### ①担任制による学生への目配りと支援

1・2・3・4年生混合グループを編制してホームを作り、各教員がホーム担任となって、学生への相談・助言・ケア等を行っている。

### ②履修計画に関するきめ細かい指導

保育士資格・幼稚園教諭免許・小学校教諭免許の3資格免許、2013年度入学生からは特別支援学校教諭免許を加えた資格免許を、どういう組み合わせでどう取得するかについての履修計画づくりへの指導・支援を、特に1・2年生段階で丁寧に行っている。

### ③キャリア教育としての課外授業「夢を叶える塾」

課外授業として、小学校・特別支援学校・幼稚園・保育園の先生に必要な資質・能力を高めることを目的に、2・3年生対象の「夢を叶える塾」(通称「夢かな」)を通年で毎週開催している。小学校・特別支援学校志望者には採用試験対策講座、保育者志望者には手遊びや手作り人形、パネルシアター・ペープサートによる劇づくり等を行っている。その成果として、今年度は4年生の教員採用試験受験者19名のうち、13名が合格を果たした。その内訳は、宮崎県が11名、

熊本県と福岡県が1名ずつである。在学中に合格を果たせなかった卒業生についても、在學生と同様に試験問題対策や面接指導などのサポートをしており、宮崎県の合格者数は卒業生だけで17名に上った。保育者志望者については、日頃の成果をオープンキャンパス等の学科行事の際に、パネルシアターやペープサート劇、また大型仕掛け絵本の実演を通して発表した。

#### ④3・4年生の教育・保育実習の指導・支援

小学校・幼稚園の教育実習、保育所・児童施設の保育実習に3年生・4年生を送りだした。小学校教育実習では、周到的な事前指導が実施され、実習校からは実習生への高い評価を得ている。学生たちは実習を通して大きな達成感を得ることができ、大学での授業に向かう姿勢等に良好な変化がみられている。

#### ⑤学科教員全体での学生に関する情報の共有と支援

学科会議において、「気になる」学生に関しての情報交換・共有に努め、教員全体で支援を行っている。なお、「学生支援連絡会」において、学生部教員を含む複数の教員、保健室、学生相談室、学生支援課で気がかりな学生についての情報交換会を行っている。ここでの学科教員全体で共有した方がよい情報については、その後、学科会議で共有し、学生支援に役立てている。

### 3 新入生魅力度調査および卒業生満足度調査

新入生魅力度調査および卒業生満足度調査の回答は5段階評定で魅力（満足）の高い方から5～1のいずれかを選択して回答する。したがって、5、4は「魅力度」（満足度）が高く、2、1は「魅力度」（満足度）が低いことを示している。

#### 1) 平成30年度新入生魅力度調査

平成30年度入学の55名が回答し、「4」あるいは「5」の回答が80%以上に達している質問項目が多数ある。教育研究に対する質問項目15項目の中で、80%以上が「魅力」ありと回答した項目が13項目、2項目が75%である。就職支援に対する質問項目5項目中、80%以上が「魅力」ありと回答した項目は3項目、1項目が79.6%で4項目がほぼ80%が魅力度が高いと回答している。学習・生活支援に対する質問項目9項目中、80%以上が「魅力」ありとの回答が5項目、70%以上が3項目である。施設・設備に対する質問項目6項目中、80%以上が「魅力」ありとの回答は5項目である。

この結果から新入生は大半の項目で魅力があるとの回答を示している。

#### 2) 平成27年度新入生魅力度調査

##### (1) 教育研究に対する設問

教育研究に対する質問項目15項目の中で、70%以上が「魅力」ありと回答した項目が12項目。90%以上が魅力ありと回答した項目が「保育士資格、幼稚園教諭一種免許、小学校教諭一種免許の三つの資格・免許を取得」「小学校・幼稚園とつながって、恒常的に現場で学ぶことができる連携学校園方式」の2項目。

## (2) 就職支援に対する設問

就職支援に対する質問項目 5 項目中、70%以上が「魅力」ありと回答した項目は 4 項目。

「” 就職課” があり、当該課の専門スタッフが就職活動支援」「将来の進路に関してのセミナー・ガイダンスや公務員・教員就職のための講座」「各学科に関連する業界の求人情報を多く扱っている」「インターンシップ制度が充実している」画素の内訳で、卒業後の就職に関心が高いことがわかる。

## (3) 学習・生活支援に対する設問

学習・生活支援に対する質問項目 9 項目中、70%以上が「魅力」ありと回答した項目は 8 項目である。内訳は、「” 学生支援課” があり当該課の専門スタッフが学習支援」「充実した蔵書・雑誌・新聞・視聴覚機器・閲覧スペース等のある図書館」「” 保健室・学生相談室” があり、当該室の専門スタッフが怪我・体調不良の治療や体調管理」「” 生協売店・生協食堂” があり、学生生活の支援充実」「課外活動（部活動、学友会、学祭実行委員会等）が充実」「毎年有意義な学校行事（大学祭等）」「充実した奨学金・特待生制度」「各学年の教員による担任制度があり、学習支援・学生生活支援」である。新入生にとって快適・安心の大学生活に期待が高いことを示している。

## (4) 施設・設備に対する設問

施設・設備に対する質問項目 6 項目中、70%以上が「魅力」ありとの回答は 4 項目。「インターネット環境が充実」「清潔で機能的で、また快適な校舎で学生生活」「通学に関して、スクールバスの運行や広い駐車・駐輪場」「休憩時間中にすごせる憩いの場の充実」である。

以上から平成 27 年度の新入生も調査した大半の項目で魅力があるとの回答を示している。

## 3) 平成 30 年度卒業予定者満足度調査

### (1) 教育研究に対する設問】

教育研究に対する質問項目 15 項目中 70%以上が「満足」との回答は 7 項目。その内訳は、「人の育ちと地域の育ちを支援する専門家」を育てるという子ども教育学科の方針」「保育士資格、幼稚園教諭一種免許、小学校教諭一種免許の三つの資格・免許を取得」「小学校・幼稚園とつながって、恒常的に現場で学ぶことができる連携学校園方式」「子どもの心身」「地域と子ども」「自然環境」という学びの 3 つの特色」「4 年間の学びを教員がきめ細かにサポートする」「ボランティア活動など、実践的に地域活動へ参加し、子どもとの関わりや地域との関わりを学ぶ子ども支援地域活動」「夢を叶える」での就職試験対策など、手厚い進路サポート」である。

### (2) 就職支援に対する設問

就職支援に対する質問項目 5 項目中、70%以上の「満足」という項目はない。「就職課の専門スタッフが就職活動の支援をしてくれる」「セミナー・ガイダンスや公務員・教員就職のための講座が充実」が 69%が満足度の高い項目である。就職支援に関しては必ずしも満足度が高いとはいえないことを示している。

### (3) 学習・生活支援に対する設問

学習・生活支援に対する質問項目 9 項目中、70%以上が「満足」と回答した項目は 4 項目である。その内訳は「” 学生支援課” があり当該課の専門スタッフが学習支援」「充実した蔵書・雑誌・新聞・視聴覚機器・閲覧スペース等のある図書館」「” 保健室・学生相談室” があり、当該室の専門スタッフが怪我・体調不良の治療や体調管理等に関する相談、大学生活に関する悩み相談」「” 生協売店・生協食堂” があり、学生生活の支援充実」である。

#### (4) 施設・設備に対する設問

施設・説示に対する質問項目 6 項目中、70%以上が「満足」と回答した項目は「清潔・機能的・快適な校舎」の 1 項目である。

### 4) 期待度調査と満足度調査の比較

平成 27 年度入学の学生が卒業する平成 30 年度の満足度調査の結果を期待度調査の結果と比較し、評価に 10%以上違いがある項目は以下の通りである。

#### (1) 教育研究に対する設問

##### ⑤優れた研究環境のもと最先端の研究ができる

魅力度調査において魅力 59%、満足度調査において満足 49%の回答で満足度が低い。

##### ⑧小学校・幼稚園とつながって、恒常的に現場で学ぶことができる連携学校園方式を採用

魅力度 91%、満足度 77%の回答で満足度が低い。特に「5」の満足が 27%の減少で差が大きい。

##### ⑨「子どもの心身」「地域と子ども」「自然環境」という学びの 3 つの特色

魅力度 83%、満足度 73%の回答で満足度が低い。

##### ⑩子ども教育学科のボランティア活動など、実践的に地域活動へ参加し、子どもとの関わりや地域との関わりを学ぶ「子ども支援地域活動」という独自の科目

魅力度 86%、満足度 71%の回答で満足度が低い。

##### ⑫学生一人ひとりの学習意欲の向上や科目履修計画作成に役立つように G P A 制度

魅力度 65%、満足度 53%の回答で満足度が低い。

##### ⑬しっかり学習ができるよう年間取得単位を制限する C A P 制

魅力度 57%、満足度 44%の回答で満足度が低い。

##### ⑭「夢を叶える塾」での就職試験対策など、手厚い進路サポート

魅力度 84%、満足度 71%の回答で満足度が低い。

#### (2) 就職支援に関する設問

##### ②将来の進路に関してのセミナー・ガイダンスや公務員・教員就職のための講座が充実している

魅力度 79%、満足度 68%の回答で満足度が低い。

##### ③地元への U ターン就職に対して全力でサポートしてくれる

魅力度 69%、満足度 40%の回答で満足度が低い。特に「5」の評価が 23%減の 10%に減少している。

##### ④各学科に関連する業界の求人情報を多く扱っている

魅力度 76%、満足度 54%の回答で満足度が低い。

⑤インターンシップ制度が充実している

魅力度 70%、満足度 33%の回答で満足度の減少が大きい。特に「5」の評価が 22%減の 8%まで減少している。

(3) 学生・生活支援に関する設問

① ”学生支援課”があり当該課の専門スタッフが学習支援

魅力度 85%、満足度 71%の回答で満足度が低い。

⑤下宿生を対象にした充実した寮やマンション等の斡旋がある

魅力度 55%、満足度 34%の回答で満足度が低い。

⑧充実した奨学金・特待生制度がある

魅力度 74%、満足度 56%の回答で満足度が低い。

⑨各学年の教員による担任制度があり、学習支援・学生生活支援をしてくれる

魅力度 77%、満足度 63%の回答で満足度が低い。

(4) 施設・設備に対する設問

①最先端の機器を導入した実験室や実際の現場を想定した実習室

魅力度 68%、満足度 38%の回答で満足度が低い。魅力度に比べ 30%の大きな減少。

② インターネット環境が充実し整っている

魅力度 71%、満足度 53%の回答で満足度が低い。また、不満足 of 回答が 24%であり、回答者の 1/4 を占めている。

⑤体育館・グラウンドなどの運動施設やサークル活動の支援施設

魅力度 69%、満足度 57%の回答で満足度が低い。

⑥休憩時間中にすごせる憩いの場

魅力度 77%、満足度 62%の回答で満足度が低い。

大学入学後間もない時期に実施した魅力度調査と卒業時に実施した満足度調査の結果にある程度の「期待はずれ」と考えられるような違いが生じることはあり得ることだと考えられる。しかし、その程度が大きくなるとその意味については検討する必要がある。その意味では「小学校・幼稚園とつながって、恒常的に現場で学ぶことができる連携学校園方式を採用」の項目についての満足度調査で「満足」が減少し、特に「5」段階評価が減少していることの意味を検討する必要がある。この他にも「地元へのUターン就職に対して全力でサポートしてくれる」の「満足」が減少し、特に「5」の評価が少ないことの意味、「インターンシップ制度が充実している」の満足は回答の 1/3 であり、「5」の評価は 8%と最も低いことの意味については検討する必要がある。「最先端の機器を導入した実験室や実際の現場を想定した実習室」および「インターネット環境が充実し整っている」の項目の満足も低い。これは学科独自で改善できるものではなく大学として検討することである。

#### 4 まとめと今後の課題

平成 30 年度の子ども教育学科における FD 活動は計画通りの実施がなされている。学生授業評価、新入生魅力度調査、卒業生満足度調査の結果は数値を見る限り良好な評価になっている。また、今年度の卒業生の進路状況は、公立学校教員採用試験結果にみるように現役合格者が 13 名でありこれまでで最も多く、保育園・幼稚園等の採用状況も希望者全員が採用になっている。これらの結果からは本学科の教育体制は充実してきていると評価できる。

しかし、表に表れている数字にとらわれることなく調査の結果についても学科で実施された FD 活動についても十分吟味し、今後の教育に活かしていくことが重要である。その意味から報告書の結果を掘り下げて検討し、今後の課題について検討する。

学生の授業評価は回答する学生の主観による評価である。そのため学生の実態と一致していないこともある。例えば、学生の授業に取り組む姿勢（予習や復習をした）について学生は肯定的な評価をしている。学生生活実態調査における学修時間は週に 5 時間未満が各年次とも 70% 代で圧倒的に多い。シラバスに記載してある事前、事後課題の学修時間にしがった学修がなされていればこのような学修時間とはならない。この二つの調査結果は学生は積極的に予習・復習に取り組んだと評価しても、実際には一日あたり 1 時間程度の学修時間ということである。大学の専門科目を学ぶに際して一日 1 時間程度の学修で十分な理解ができるであろうか。「授業を理解できたかについて」の学生の授業評価では 4 点台（多少そう思う）であり、大学生生活実態調査では約 70% が「理解できている」「だいたい理解できている」と回答している。調査結果をそのまま受け止めると、子ども教育学科の学生は一日 1 時間程度の学修で授業内容をほぼ理解していることになる。子ども教育学科の学生は複数の資格を取得することができることが学科の魅力であると回答し、ほとんどの学生が複数の資格取得を目指して授業科目を登録している。当然ながら一日の授業は複数の授業科目を受講することになる。これで本当に授業を理解することができているのだろうか疑問が残る。

上述したことは調査結果を見ての疑問の一例である。学生の授業評価については詳細に検討する必要のある項目がいくつもある。これは新入生魅力度調査及び卒業生満足度調査の結果も同様であり、これらの調査結果を活かすためには詳細な分析を行い、対応が必要である。

学生の進路については本格的な調査を行い本学科のキャリア教育を吟味する必要がある。平成 30 年度の卒業生の進路状況は就職希望者全員の就職が決まり就職率 100% である。特に公立学校教員の採用は現役 13 名とこれまでのなかで最多の採用となった。この結果は本学科が積み上げてきた教育の成果であり、学生の努力があったからである。とはいえ、宮崎県の小学校教員採用試験の倍率は 1.9 倍と昨年の 3.0 倍を下回っている。このことは本年度の小学校教員採用の結果が過去の最多となったことには採用試験の環境変化が影響したことを考慮しておく必要がある。さらに、本学科が就職率 100% と謳っているのは卒業時点でのことである。そこには正式採用も臨時採用も含まれている数字である。本学科の卒業生の多くが就職する保育園等の福祉職は就職後 3 年以内の離職率が高いこと知られているが、本学科の卒業生の卒後 3 年の就業については追跡データがない。このことは、本学科のキ

キャリア教育を含む教育内容が妥当であるか否か判断することができない。追跡調査を行卒業生の就業についてのデータを蓄積することは必須のことである。

授業参観と学科内FD活動についても言及する必要がある。授業参観については参観者の数が少ないことが指摘されている。中央教育審議会の答申（2005）においてFDの具体的例として教員相互の授業参観の実施が挙げられている。本学の授業参観もこの答申に沿ったものであろう。答申では授業方法についての研究会の開催も挙げられている。これを踏まえれば、授業参観だけではなく、本学科の学生を対象にした授業をどのように展開することが重要かなどの授業方法に関する研究会を併せて開催する必要があるのではないだろうか。本学科に入学する学生は普通高校の卒業生だけでなく実業高校の卒業生もおり、大学に入学するまでに基礎学力に大きなばらつきがある。基礎的な漢字が読めないことだけでなく語彙力の少なさから来る読解力の問題、表現力の問題など大学の専門教育科目を理解するのに十分な学習能力が身につけていない学生が少なからず在学している。そのような学生を対象とした専門科目の授業をどのように展開するのか本学科教員には喫緊の課題である。本学科教員が授業に関する共通理解をもつ中での授業参観の実施と授業研究会を組み合わせるような取り組みが必要なのではないだろうか。

以上のように本学科のFDの課題は報告書作りのためのFD活動から実質的なFD活動をどのように展開していくか学科が一丸となり本気で取り組むことだと考える。

## 【 教養・教職センター 】

### 1. 授業評価アンケート報告(前期・後期)

授業評価アンケートの11つの設問は3つの分野に分れている。設問1から3は「学生の授業取り組みに関する質問」、4から8は「教員の授業実施方法に関する質問」、9から11は「総合的評価」、関連の設問です。

#### 設問情報

種略	問略	問文
学生取組	出席	私はこの授業によく出席した
学生取組	発言	私は授業内容について質問や発言した
学生取組	取組	私はこの科目に積極的に取り組んだ（予習と復習した）
教員実施	聞取	教員の声は聞き取りやすかった。
教員実施	資料	教員の板書（またはPPT・配布資料など）は読みやすかった（見やすかった）
教員実施	時刻	教員は授業の開始・終了の時刻を守ろうとしていた
教員実施	反応	教員は学生の反応を確かめながら授業を進めていた
教員実施	熱意	教員は熱意を持って授業をしていた
総合評価	理解	私はこの授業内容を理解できた

種略	問略	問文
総合評価	役立	私はこの授業で学んだ内容はなんらかの形で将来的に役立つと感じた
総合評価	満足	私は総合的に判断してこの授業で満足が得られた

種略	種文
学生取組	学生の授業取り組みに関する質問
教員実施	教員の授業実施方法に関する質問
総合評価	総合的評価に関する質問

### 回答

答種	L	答略	答文
SO	5	特に	特にそう思う
SO	4	多少	多少そう思う
DO	3	どちら	どちらともいえない
NO	2	あまり	あまりそう思わない
NO	1	全く	全くそう思わない

### アンケートの人数と実施 教員人数と回収枚数

体	年	期	員	枚
大学	2018	1	59	2452
教養	2018	1	7	269
大学	2018	2	57	2403
教養	2018	2	6	276

### アンケート実施の教員、講義、枚数 2018(H30)前期の教員と講義

教員	科目	枚
スモール	英語コミュニケーション I	8 4
章大寧	農業政策論	5 1
西村盛正	体育実技(男子)	1 7
長友泰潤	宗教学	3 9

教員	科目	枚
植村秀人	教職概論	3 3
岩田賢士	中等教科教育法・農業	3 5
秋山 繁治	中等教科教育法・理科 I	1 0

#### 2018(H30)後期の教員と講義

教員	科目	枚
植村秀人	キャリア入門	102
長友泰潤	哲学	53
西村盛正	生涯スポーツ	30
岩田賢士	特別活動論	15
スモール	英会話 I	68
秋山繁治	中等教科教育法・理科 I	8

#### 182H30K.html

アンケートの結果

前期

大学の結果

特に	多少	どちらも	あまり	全く
5	4	3	2	1
1679	479	202	31	10
419	616	974	190	199
684	822	692	134	65
1341	670	293	69	28
1200	695	374	86	42
1702	480	169	28	17
1315	652	349	52	33
1537	585	236	21	19
938	940	412	73	34
1328	676	325	43	26
1172	781	356	55	34

学科（センター）の結果

5	4	3	2	1
202	41	26	0	0
62	68	99	22	17
72	74	98	14	11
144	67	41	9	8
111	78	55	13	10
171	60	28	5	4
140	65	46	10	8
165	62	27	9	6
96	98	51	14	8
119	76	56	8	8
109	79	60	9	10

後期  
大学の結果

5	4	3	2	1
1679	479	202	31	10
419	616	974	190	199
684	822	692	134	65
1341	670	293	69	28
1200	695	374	86	42
1702	480	169	28	17
1315	652	349	52	33
1537	585	236	21	19
938	940	412	73	34
1328	676	325	43	26
1172	781	356	55	34

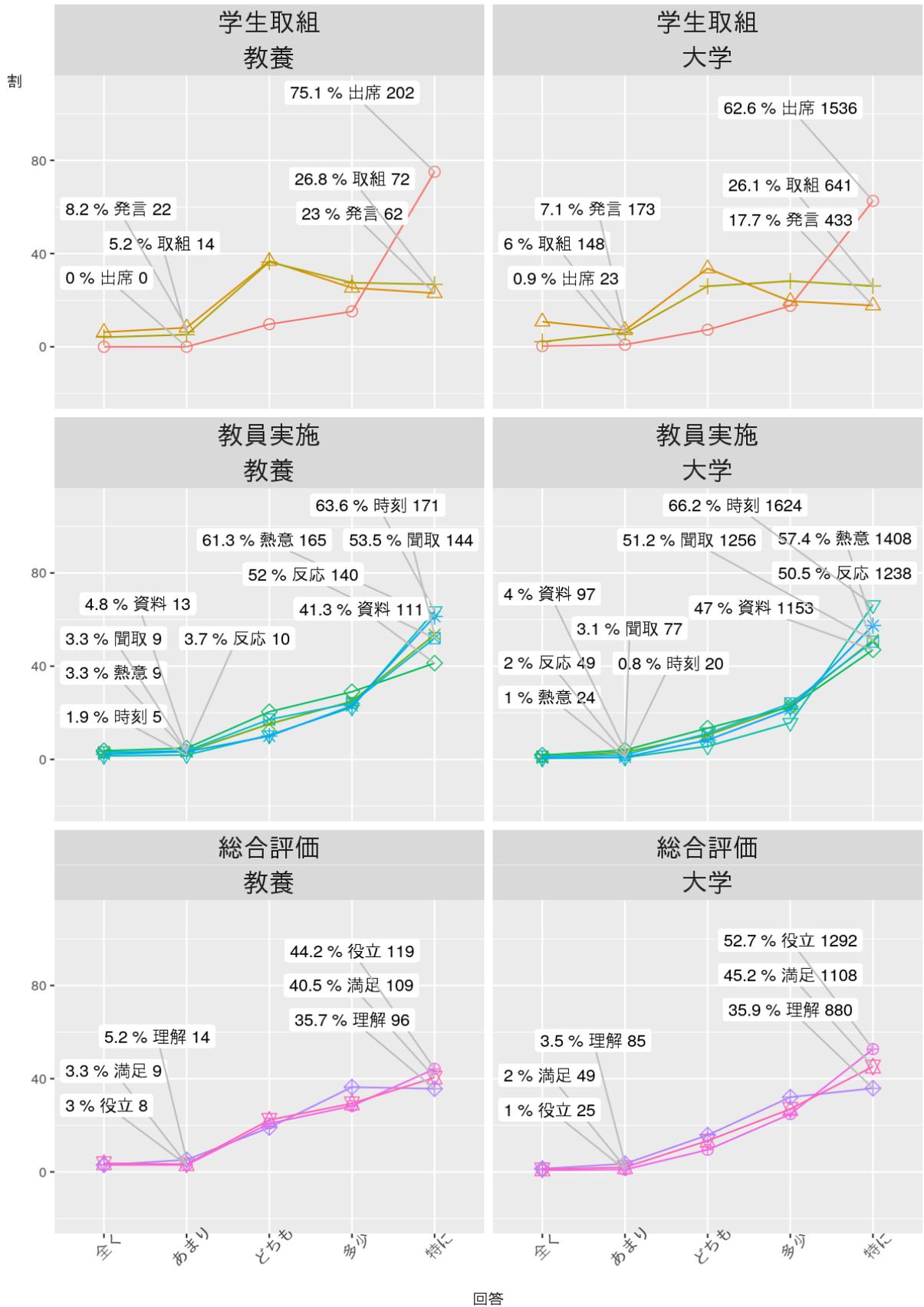
学科（センター）の結果

5	4	3	2	1
198	59	16	3	0
39	86	102	26	22
50	96	90	29	9
130	91	40	10	4

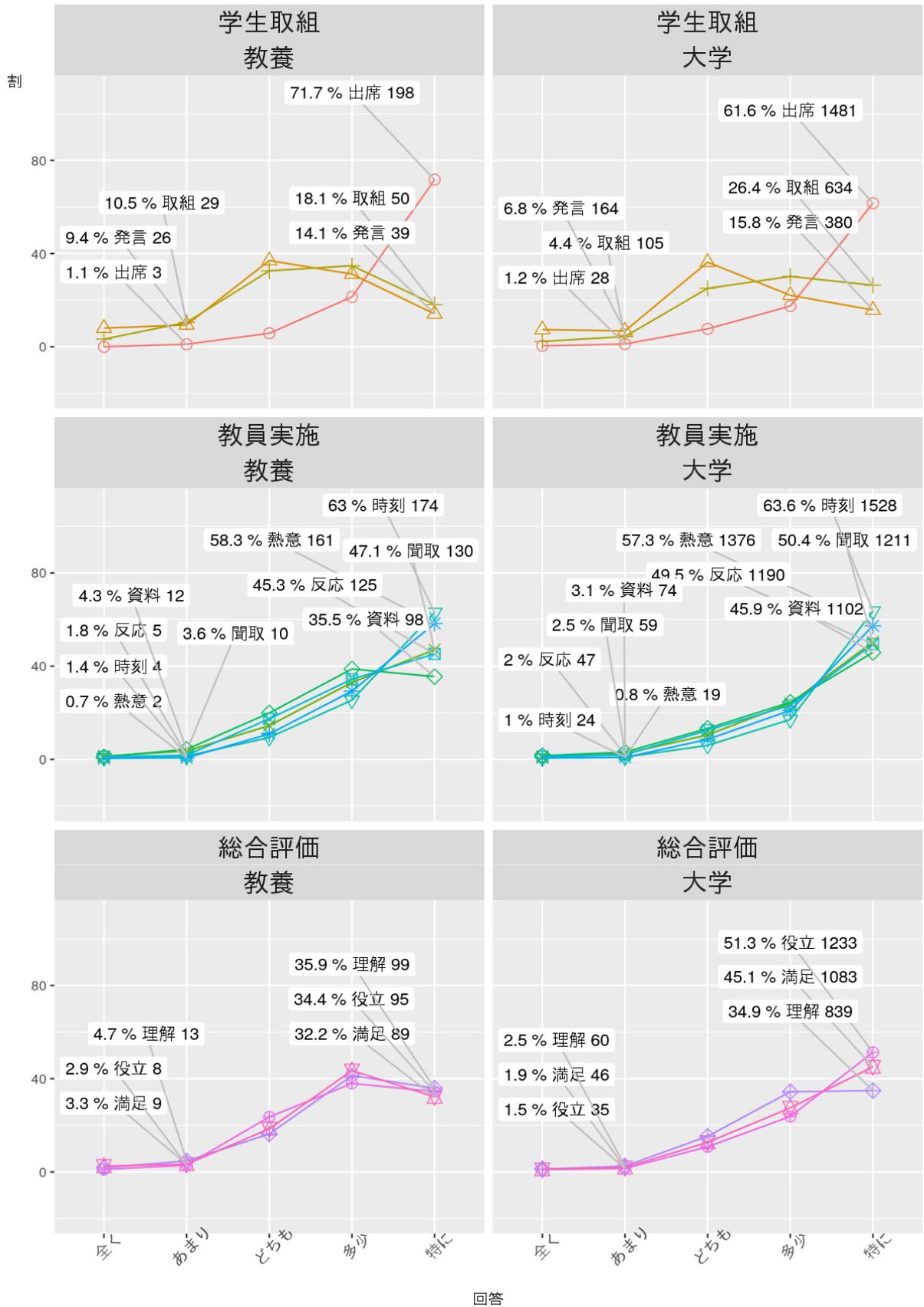
<b>5</b>	<b>4</b>	<b>3</b>	<b>2</b>	<b>1</b>
98	107	55	12	3
174	70	26	4	2
125	95	48	5	3
161	81	30	2	1
99	141	45	13	5
95	105	65	8	3
89	120	51	9	7

上の各表を視覚的に比較するために、図が下にある。

学科,大学のアンケート結果% 前期



学科,大学のアンケート結果% 後期



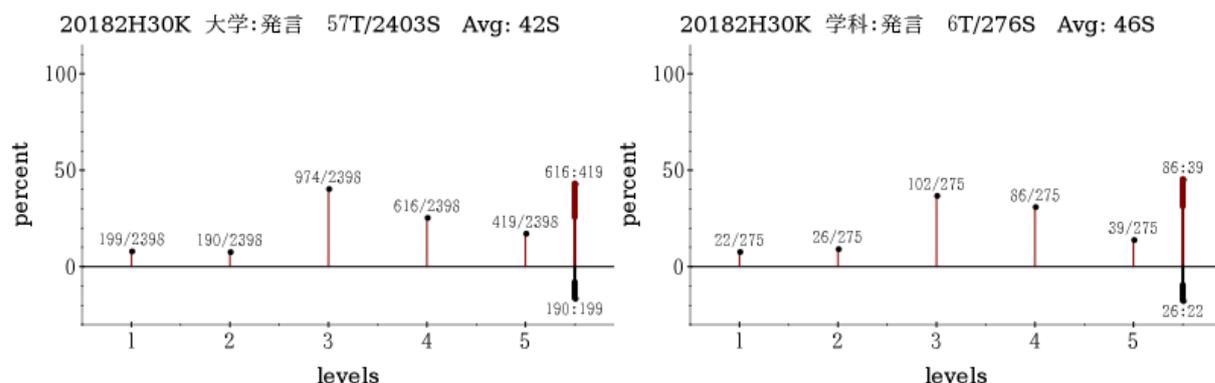
アンケート結果は教養・教職センターのFD話し合いの土台作りに役立っている。そして、アンケート実施は数値の視覚化(Data Visualization, see Edward Tufte's *Beautiful Evidence*) のトレーニング(see Hadley Wickham's *R for Data Science*)になる。

毎年、アンケート結果を視覚的に示すことを、情報デザイン(Tufte)の理念を実践する訓練になっている。教材などの資料作りに役立つ技術を身につく。フリーソフトを使って簡単なプログラム(スクリプト)を組めるとデータの構造と視覚的な表現も自由自在になる。毎年の反復開発の累積でより簡潔な図(プロット、グラフ)を作れるようになる。去年からは Philipp Janert(*Gnuplot In Action*)さんが利用する gnu-plot の代わりに R 言語で Hadley Wickham さんが開発している tidyverse の ggplot2 などのパッケージを使ってデータの「見える化」した。フリーソフトの emacs (と org-mode) おかげで Reproducible Research(再現可能な研究)と Literate Programming(文芸的プログラミング)目指しながら、データの構造と視覚的な表現を勉強することができた。

南九州大学の学生の教育に役立つために、統計のために開発された R 言語とそのデータ視覚化のためのパッケージ ggplot2, からよりシンプルな Scheme 型言語をデータ処理や文章作成に使えたらいいと思うようになった。代数学などの教育と同時最高レベルの研究のために開発した IDE, DrRacket も使って、Racket 言語でデータ処理と図(Plot)作成した。添付ファイル(.pdf)で全ての設問とその結果を見れるけど、毎回、結果が低い「発言」についての設問の図を入れておく。

設問 2 : 「私は授業内容について質問や発言した」

1) 全くそう思わない 2) あまりそう思わない 3) どちらともいえない 4) 多少そう思う 5) 特にそう思う



DrRacket はプロプライアタリーの OS(ウィンドーズなど)に簡単にインストールできるらしい、理想に近いと思う。すぐウィンドーズパソコンしか使っていない人でも簡単に Racket を使えます。大学の学びと働きの一貫性のために、学生の作文も委員会の文章も高級研究の統計的な図も Racket の Scribble で作れるようになったら、理想的でしょう、何かエレガントの関わり方で頭がすっきりして、「質の保証」に繋る。

FD 維新委員会の回覧資料は大学におけるダイアシティ<レジュメ・資料集>(大学コンソーシアム京都)参考になります。印刷しても読めないプレゼンのスライドが多かったけど、今年の FD 講演会でも経験したように、あのやり方が流行っているようだ。講演や大会の形式を変えないといけないだろう。印刷したスライドがあっても、すっきりしたリストと表があった。同士社大学、生命科学部の石浦章一先生も木下是雄さんの理科系の作文技術(中公新書)から影響を受けて、忘れなかったでしょうか？すっきりした雰囲気だけでわんくて内容を見ても習いたいことがあった。谷崎潤一郎も進める九鬼周造の「いき」の構造を、「科学技術表現論」関連で紹介、している。「いき」と「インク/情報 比率」または Plain Style (Christopher Lasch は有名な Elements of Style の続きとして書いた作文の本)と 報告書やその図に繋げることができたらいい。

石浦章一先生のようなすっきりしたスライド、どんなパソコンでもフリーで動く DrRacket でプレゼンすれば、ますます大学(university)の普遍的(universal)な方法に近づいて行けそうだ。「プログラミング言語で▼書くプレゼンテーション」はプログラミング言語図鑑(ソシム p. 138)で触れている。

DrRacket's slideshow, または日本人が作った Ruby 言語の Rabbit, のようなフリーソフトの利用は大学などの教養教育(Liberal Education、 General Education for a Free Society)に相応しいだ。

Free Software and Education <https://www.gnu.org/education/education.html>

Software freedom plays a fundamental role in education. Educational institutions of all levels should use and teach Free Software because it is the only software that allows them to accomplish their essential missions: to disseminate human knowledge and to prepare students to be good members of their community. The source code and the methods of Free Software are part of human knowledge. On the contrary, proprietary software is secret, restricted knowledge, which is the opposite of the mission of educational institutions. Free Software supports education, proprietary software forbids education.

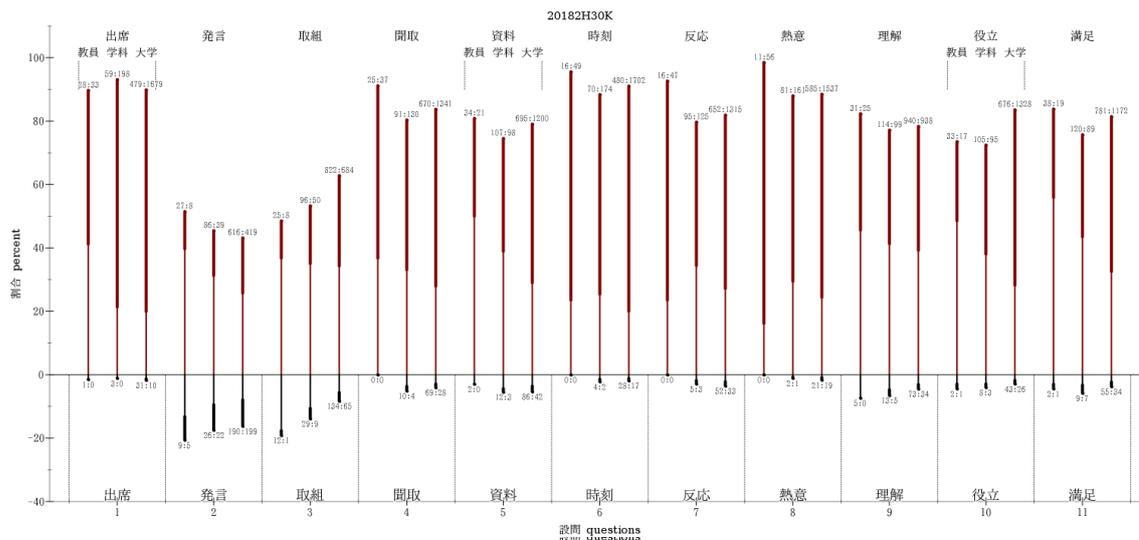
Free Software is not just a technical question; it is an ethical, social, and political question. It is a question of the human rights that the users of software ought to have.

● 自由ソフトウェアと教育 <https://www.gnu.org/education/education.ja.html>

ソフトウェアの自由は教育において基本的な役割をはたします。あらゆる過程の教育機関は自由ソフトウェアを用いて教育をすべきです。なぜなら、人間の知識を広めたり、社会にとってよい一員となる学生を育てたり、といった教育機関がなすべき任務は、自由ソフトウェアによってのみ実現できるからです。自由ソフトウェアのソースコードや手法は、人間の知識の一部です。反対に、プロプライエタリなソフトウェアは秘密的で制限された知識であり、教育機関の任務とは正反対のものです。自由ソフトウェアは教育を支援しますが、プロプライエタリなソフトウェアは教育を制限します。

自由ソフトウェアはただの技術的な問題ではありません。倫理的であり社会的であり、また政治的な問題です。ソフトウェアのユーザが本来持っている人権の問題です。自由と協力は自由ソフトウェアの本質的な価値です。GNU システムはこうした価値と共有の原則を実現します。なぜなら、共有は人間の進歩にとってとても有益だからです。

このような問題を考えるのが大学、教養教育の従来のワークである。フリーソフト(DrRacket)で、基礎教育(再帰の表現、関数のプログラミング、作文の技術)もグラフ(plot)も自由自在になります。



データの構造と視覚化の技術的な問題以外にもアンケートを考えるのが興味深い。ホーソン効果があるか? The Hawthorne Effect :

● Kenkyusha's English-Japanese Dictionary for the General Reader

ホーソン効果:(労働や教育で、単に注目されているという事実によってその対象に起こる業績の向上。この効果の存在が実験的に確認された米国の Western Electric 社 Hawthorne 工場にちなむ。

アンケート結果のデータをフリーソフトの勉強の材料にしながら、ニールポストマンのアドバイスに注意する :

● *Technopoly, The Surrender of Culture to Technology* (1993) p. 183

... if there is an awareness and resistance to the dangers of Technopoly, there is reason to hope that... [we] may survive... technological promiscuity.

● テクノポリ、技術 vs 人間 p. 240

テクノポリの危険にたいする自覚と抵抗が存在すれば、... 「われわれは」技術による無差別を行き抜くことができるかもしれない。

... pay no attention to a poll unless they know what questions were asked and why  
どのような質問がされ、なぜそういう質問がされるかを知らないかぎり、世論調査に応じたり投票したりしない...

... [free] themselves from the belief in the magical powers of numbers, do not regard calculation as an adequate substitute for judgment, or precision as a synonym for truth.

数字の魔力への信仰から開放されていて、計算を判断に代わりうるものにしたたり、正確さを真実の同意語にしない...

アンケートに注意しながら、データとデザインを付き合っていくと教育になる。そして大学という教育現場で以外とアンケートが役立つことがあるようです。Joseph Lowman の「Mastering the Techniques of Teaching」に興味深く大学生のアンケートを取りあげる。残念ながら、ニールポストマンとバトランドラッセルの文と同じようにローマンの和訳がまだない。英語のみで引用しておきます。これから、FD の話し合いの土台にするために報告に入れておく。

- *Mastering the Techniques of Teaching* (1995) p. 11

Studying Questionnaires that assess student's satisfaction with professors' teaching skills has been a fruitful method of doing educational research for well over half a century.

- *Mastering the Techniques of Teaching* (1995) p. 15

Empirical Research using student ratings is amazingly consistent in showing them to be reliable and valid, easily as stable and accurate as other psychological inventories. One recent study of the ratings given 195 instructors over thirteen years showed almost no changes in patterns of scores (Marsh and Hocevar, 1991). ... the forms are sufficiently understood to be useful to faculty striving for improvement in their teaching skills...

- *Mastering the Techniques of Teaching* (1995) p. 16

In a number of studies... evaluations of faculty made several years after graduation (up to ten years, in one case) have been found to be remarkably consistent with the students' original opinions (Firth, 1979; Marsh and Overall, 1979; Overall and Marsh, 1980). Student ratings thus cannot be dismissed as reflecting merely the poor judgment of youth.

Students are remarkably generous judges of faculty – ratings are highly skewed in a positive direction – but they may be tougher judges than faculty members themselves.

If students perceive their teachers' testing and grading as fair and their own motivation as minimal... they are less likely to blame their instructor for poor performance. Recent studies (Baird, 1987; Johnson and Christian, 1990) have shown that student ratings of their instructor's teaching effectiveness are much more highly correlated with ratings of how much they have learned (.57 and .86) than what grades they anticipate receiving (.20 and .28).

- *Mastering the Techniques of Teaching* (1995) p. 18

Secondarily, student ratings have been shown to reflect the quality of interpersonal relationships between instructor and students.

- *Mastering the Techniques of Teaching* (1995) p.

The primary purpose for gathering student ratings is to improve the instructor's future performance. Specific feedback is analogous to specific comments on student papers: it offers directions for future work. Overall ratings of teacher performance are comparable to student grades: they reinforce instructors for a job well done and allow comparisons with others. As with students, the more specific the feedback, the more likely it is to guide future changes

Students are asked to grade instructors because it also student improves morale. College teachers evaluate students all semester, and most instructors consider it fair to turn the tables and allow students to do likewise.

Sharing power in this way also leads students to think seriously about the education they are receiving. One school goes so far as to offer undergraduates a course on college teaching (Zechmeister and Reich, 1994) Teacher evaluation acknowledges students as important participants in the school's instructional program and in their own education.

オンラインのテキストでも Lowman の *Mastering the Techniques of Teaching* の引用が読める:

Edward Tufte Recommends Joseph Lowman:

<https://ruhrspora.de/posts/2322ec802796013743b0005056009f8c>

Joseph Lowman Quotes From *Mastering the Techniques of Teaching*:

<https://ruhrspora.de/posts/4b901ae02797013743b0005056009f8c>

<https://hub.libranet.de/channel/bsmall2/?f=&mid=332522478f7c5397c0560f99d583b17e9918a45e30a3bafed3c9bdb38a40cb35@hub.libranet.de>

FD 維新委員会、またはセンター、ではアンケート結果の報告を一般教育と情報デザインと一般教養になどに繋げることができたら、能力・機能(Faculty)の開発・成長(Development)に貢献できる。

## 2. 後期参観授業報告

平成 29 年度 教養・教職センター参観授業と参加者数

担当教員名	参観授業名	実施日	参加人数
岩田 賢士	特別活動論	1 月 21 日(月)	5~6 名

平成 29 年度 センターの FD 委員が参加した参観授業

担当教員名	参観授業名	実施日
若宮 邦彦	社会福祉	1 月 17 日(木)

### 課題

センターの参観授業への参加者は毎年少いです。他の学科もそうらしいです。センター試験やインフルエンザなど流行る冬の時期ですので、授業参観をする余裕を感じない。参加すると、違う授業で学生がどんな風に関わっているか見えていいことだ。分野によって、学生が違う能力とエネルギーを見せるので興味深いです。わざわざのイベントではなくても、いろいろな授業を見る余裕があればいいと思います。

Alfie Kohn が *What to Look for in a Classroom*[1] という本に説明あるような文化を目指せば、授業も教育機関全体もよくなると思う。よい教育機関の教員たちは、気軽にお互いの授業に参加する。教員はお互いの分野や教授法から学び合う文化を目指すべきだろう。

### 参観授業を考える時、参考にしたいこと：

Svinicki と McKeachie は「*McKeachie's Teaching Tips: Strategies, Research, and Theory for College and University Teachers*」(2014)に参観授業について興味深いコメントした：

p. 333

... Probably the most common form of peer feedback is based on classroom visits. ...

p.334

... The usefulness of peer observation depends partly on what you want to find out. If there is a particular aspect of your teaching that you are concerned about, be sure that the observer knows what to look for. Knowing what to look for is in fact a general principle applying to observations. Meeting with your observer to tell him or her before the observation what your goals are and what you are planning to do will increase the helpfulness of the observation. ... (Centra 1993)

McKeachie の引用をオンラインのテキストで読める：<https://ruhrspora.de/posts/1916187>

特に印象が強かったのは：

p.64

In organizing the *body* of the lecture, **the most common error is probably that of trying to include too much. The enemy of learning is the teacher's need to cover the content at all costs.** When I began lecturing, my mentor told me, "If you get across three of four points in a lecture so that students understand and remember them, you've done well." Lecturers very often overload the students' information processing capacity so that they become less able to understand the material than if fewer points had been presented. **David Katz(1950)**, a pioneer Gestalt psychologist, call this phenomenon "**mental dazzle.**" He suggested that, just as too much light causes your eyes to be dazzled so that we cannot see anything, **too many new ideas can overload processing capacity so that we cannot understand anything.**

. Using examples

**Move from the concrete to the abstract.** ... Because no single example can represent a concept fully, you usually need to give more than one. Concept formation research suggests that examples differing from one another are likely to be most effective if you point out the essential features of the concept exemplified in each example. If you can find a cartoon or funny story that illustrates your point, humor helps maintain interest. But the danger is that students may remember the humor and not the concept. Harp and Maslich (2005) showed that

"**seductive details**" are just as **detrimental to learning** from a lecture as they are from a text, so use them sparingly. And, most important, give students a chance to give examples  
p.333

... In every discipline there are **some concepts or skills** that **seem** to be **particularly difficult to teach**. Meyer and Land (2006) called them "**threshold concepts**" because they **have to be gotten over to proceed**. Often, experienced teachers have strategies for overcoming these difficulties. I've also found that disciplinary journals that have sections on teaching often have articles on just these concepts.

McKeachieの本では、教え方の研究も学問だと書いている。教育の軽視が問題がなければ、わざわざ教授法の研究も立派な“scholarly activity”だと強調しなくてもいいだろうと思うけど、そのことも含めて考えることも立派なFD活動になるだろう。

pp. xvii - xviii

In 1990, Ernest Boyer's book *Scholarship Reconsidered* ... suggested that teachers who keep up with current developments, who devise and assess better ways to help students learn, or who do research on methods of teaching are also scholars. As a result of the debates about Boyer's proposal, there is increasing acceptance of the idea that **good teaching involves much scholarly activity**.

[1]画像：<https://www.alfiekohn.org/article/look-classroom2/>

文字：<https://hub.libranet.de/channel/bsmall2/?f=&mid=52a98d2182812a76d4a45b5b3666dcd698c4e49d9ac3c32a1e82436b45285d4c@hub.libranet.de>

## 【 大学院 】

### 1) 外部講師による学術講演会の開催

①平成 30 年 11 月 12 日（月）に都城キャンパス（宮崎キャンパスにはテレビ会議システム）において、東京大学教授の石川幸男博士を招いて、「ガ類における雌雄間音響交信：ガのラブソングは超音波」という題目で講演をして頂いた。両キャンパスで教員および学生を合わせて 137 名が参加した。

②平成 31 年 1 月 16 日（水）に都城キャンパス（宮崎キャンパスにはテレビ会議システム）において、名古屋大学教授の東山哲也博士を招いて、「ライブセル解析による植物生殖の鍵分子および新規メカニズムの発見」という題目で講演をして頂いた。両キャンパスで教員および学生を合わせて 140 名が参加した。

### 2) 大学院研究科掲示板の設置

宮崎キャンパスと都城キャンパスに大学院研究科掲示板を設置し、大学院生への情報伝達の利便性の向上を図っている。

### 3) 修士論文発表会の公開での開催

修了予定者の審査会（口頭試問）の同日に、審査に先立って修士論文の発表会を公開で開催した。発表を行った大学院生以外に、都城キャンパスは教職員 13 名と学生 13 名、宮崎キャンパスは教職員 8 名と学生 1 名の参加があった。学生にとって研究に対する取り組みや進路について考える契機になると考えられ、今後はより多くの学生の参加があるよう広く呼び掛けたい。

## ◆ 新たな取り組み

令和元年度は、これまで構築してきた FD 推進活動を更に向上させ充実した FD 推進活動へと発展させていく。また、SD 推進会議の組織下における活動の充実と、関連する取組みに積極的に参画していく。

FD 推進委員会が令和元年度に実施する事業は以下の通りである。

- 事業① 授業評価アンケートの実施（前期・後期）
- 事業② SD 推進委員会共催 F D 講演会の実施（複数回実施）
- 事業③ 卒業生満足度調査の実施（平成 30 年度生が卒業するまで）
- 事業④ 授業参観の実施（後期）
- 事業⑤ 各学科独自の F D 活動の実施
- 事業⑥ FD 活動の情報収集
- 事業⑦ SD 推進委員会への協働参画

## ◆ FD 活動の反省と今後の活動

### 【 環境園芸学科 】

新入生魅力度調査では昨年度同様に学生の生活環境、通学、サークル活動を行う上での環境について十分な魅力を得ていないとの結果が得られた。これらは全学的な問題であり、関係部署と連携をしながら対応を考えなければならない。しかしながら、全体としては、調査した各設問に対して、あまりあるいは全く魅力を感じないとの回答は概ね 1 割未満であり、本学並びに本学科の教育研究、就職支援、学習・生活支援および施設・設備は新入生の多くに魅力あるものになっていることが示された。この高い魅力度を高い満足度に維持・向上に繋げる取り組みが重要であると思われる。また、新入生（高校生）のニーズは変化するものと考えられることから、今後、時代に即した対応や本学の特色や魅力度をさらに高める取り組みも必要であると考えられる。

卒業生満足度調査においては、教育研究に対する設問については設問⑨の「教養教育科目設置に関する満足度」を除き全て 3.5 以上の高い値であった。昨年度までと同様に学生の専門科目に対する高い関心が認められるが、一方で教養教育科目に対する魅力度・満足度が低いことが示されている。学生への教養科目の重要性の理解や教養科目の在り方、教養と専門のバランス（専門の特化も含め）等について検討が課題として考えられる。これらの結果は大学としての根幹に関わることであり、大学あるいは学科として早急な結果の分析とその対応が必要である。特に教養教職センターとの連携を深め、科目の選定や配置について熟考しなければならない。また、就職支援に対する設問については、設問③の「地元への Uターン就職に対してのサポート」および「インターンシップ制度の充実」に対して例年満足度が低い傾向にある。この点についても大学および関係部署と連携し対応を急がなければならない。

授業評価アンケートの結果に関しては、これまでの授業評価結果をもとに各教員は各設問項目を中心に改善の努力を行っており、各項目における年次の増減は多少あるものの、着実に成果が現れてきている。今後は、特に学生自信の授業に対する積極的な取組みを向上させることが総合評価の改善に結びつくと考えられる。引き続き、各教員および学科の地道な改善努力の継続が重要であると考えられる。

参観授業については、開催数は 2 授業、参加者 6 名であった。参加人数が少ない要因としては、各教員が各種業務により忙しく参加する余裕がないことが原因と考えられる。しかしながら、参観授業の参加者からは有意義な刺激を受けたとの感想が伝えられていることから、なお一層の参加促進を訴えていく必要がある。

今後の FD 活動の在り方として、これらの活動が形骸化しないよう、FD 活動の意義について各教員個人が、また学科として再認識する必要があり、さらには独自の新しい活動や企画を積極的に考案、実施し、FD 活動を推進させる取り組みが重要であると考えられる。

### 【 管理栄養学科 】

これまで南九州大学の FD 活動の一環として、新入生および卒業生に対して魅力度および満足度調査を実施してきたが、昨年度より入学時魅力度調査に回答した学生の卒業時の満足度を対比して結果を分析できるようになり、「入学時の期待」が 4 年間大学生活を送る中でどのくらい「満足度」に変わったかが分かるようになった。

その中で特に管理栄養学科における研究教育面について、平成 24～27 年度入学者 4 ヶ年を集約すると、「入学時の期待」値を上回っている項目が複数あり、多くの項目で大幅な減少が見られなかったことから、学

生の期待に概ね応えられていることが分かった。ただし、平成30年度卒業生に限定してみると、入学時の魅力度に比べて卒業時の満足度が下回った項目が多く見られた。この点は重く受け止める必要がある。

研究教育面以外では、南九州大学FD推進委員会規定にも書かれている通り、社会貢献、管理運営に関することも必要である。今年度もこれまで同様、地域連携等における「社会貢献」に関する活動をさらに充実させており、次年度も地域社会との連携活動を強化していく。

また今年度管理栄養学科では、厚生労働省(厚生局)による監査があった。研究教育面に関して指摘事項を踏まえ、各教員がそれぞれ専門分野における研究推進を図っていくことが重要である。そのための取り組みとして研究推進の仕組み・方法についてさらなる検討が必要である。

## 【 食品開発科学科 】

### (1) 今年度の反省

今年度は、前期・後期の授業評価アンケートの分析結果として、全体的に昨年度よりも高い評価が得られた。この要因として、教員側の授業実施方法などに改善があったことが考えられる。その一方で、昨年同様、授業に対する学生側の積極的な取組みに欠けるという回答が見られた。この点については、引き続き対策を講じていかなければならない。

授業参観に関しては、学科教員2名の授業に対する参観人数は7名であり、昨年の10名よりも減少した。その理由としては、参観対象科目が昨年の4科目から2科目になったことなどが挙げられる。来年度は、この点についても検討したい。

学科独自のFD活動に関しては、従来からの継続事業を中心として、引き続き学生の教育・研究内容の向上に繋がる多種多様な活動を実施することができた。その一例として、今年度から、学科の卒業論文発表会を実施し、学生たちの学習意欲の向上につながったことが予想される。

### (2) 次年度以降のFD活動

学生たちが、より自主的・積極的に取り組む授業(双方向型の授業)が定着しつつあり、今後も積極的に継続していく。

専門教育に関しては、食品開発に関する専門知識をより広く、より深く学ぶことができるように、引き続き教育体制の整備を実施していく。具体的には、食品開発実習教育および醸造実習教育関連の整備をさらに進めていくことにより、実学教育を一段と強化していく。また、HACCP管理者資格を取得するための「食品安全専門人材育成」に関する教育プログラムを来年度から導入する。

そして、地域社会との連携活動を強化して、学生の教育・研究の充実に繋がる産官学金の連携を進めていく。県内実学系高校との連携では、来年度以降も引き続き、宮崎農業高校をはじめとする県内の複数の高校と連携活動を実施するが、学生たちが、これまで以上に積極的に参加できる活動を増やしていく。

## 【 子ども教育学科 】

平成30年度の卒業生64人のうち、小学校教諭一種免許状35名、特別支援学校教諭一種免許状21名、幼

稚園教諭一種免許状40名、保育士資格29名(計のべ125名)が免許・資格を取得した。また、平成31年度教員採用試験では、現役で小学校に10人、特別支援学校に3人の合計13人が合格し、公立学校教諭として正式な採用を得ることができた。さらに、今年度は卒業生17名も合格を果たした。卒業生サポートを含め、学科教員が継続的な試験問題対策および面接指導などを充実させてきた成果であろう。今年度は、計30名の正式採用を出すこととなったが、就職率も100%を維持しており、好結果を示すことができた。

この就職実績が反映されたように、本年度実施した卒業予定者満足度調査の就職支援に関連する回答のポイントが比較的高かった。同調査の教育研究に関する回答でも、「4年間の学びを教員がきめ細かにサポートする」、「ホーム制や1年次後期から始まる少人数のゼミ」、「夢を叶える塾での就職試験対策など、手厚い進路サポート」の評価が比較的高く、相乗効果が働いていたものと考えられる。

今後の課題として、教員の退職等に伴って、専門分野に応じた新たな教員を迎え入れるなど、学部全体を見据えた教員の配置も含めて、教員相互の研究や教育内容について相互理解が深まるようにFD活動の時間の確保に努めていきたい。さらに、学生の教職志望に応じた学校種等の免許状選択を踏まえて、これまでの教育内容の成果と課題を改めて総括し、カリキュラムの改善等を検討していくなど、授業と教員との横断的な専門性のつながりを追求していきたいと考える。

## 【 教養・教職センター 】

もっと積極的に大学・教育の使命・目的を話し合えるようにする。それぞれの分野の講義の繋がりに気づいて、大学の勉強の辻褄(一貫性 **Coherency**)を強化できるといい。授業の内容だけじゃなくて、もっと出欠・席順など授業運営の(フリーソフトによる)工夫を共有できる機会を作るべきだ。

教養・教職センターの授業は何のために「役立つ」かと大学の勉強の辻褄「有機的つながり」(一貫性)を深く考える課題があって話し合うようにできればいい。大きい課題であるけど、センターではそれぞれの専門分野のお互いの関係と人類の中の位置が見えるように努める方法を探れると充実したFD活動に繋がる。授業のアプローチなどについての話し合いを増やす努力をする。

## 【 大学院 】

平成28年9月より南九州大学FD推進委員会規程の改正に伴い、FD推進委員会の構成員として組み入れられた。平成29年度は、年度最初からFD推進委員会の構成員として委員を置き、FD推進活動に積極的に参画してきた。

平成30年度は、外部講師を招聘した学術講演会を計2回実施した。大学院生の研究意欲をさらに刺激する大変有意義な講演会となった。また、多数の学部生も参加し、普段あまり触れることのない分野の講演内容に接することにより視野が広がったものと考えられる。

今年度は学部生向け大学院説明会や本学大学院出身の修了生による講演会を開催できなかった。来年度以降、大学院生募集の面からも開催するかどうかを検討したらよいであろう。

今後もFD推進委員会の構成員として委員を置き、FD推進活動に積極的に参画していきたい。